
Monster_War

葛城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M o n s t e r | W a r

【Nコード】

N 6 6 3 8 G

【作者名】

葛城

【あらすじ】

蒸し暑いある夏の夜。気ままな夏休みを満喫していた少女、中山^り里里は、ふと『地球を守りますか？』という奇妙な一文にリンクされたサイトを発見した。何かに惹かれた里里は、無意識にその一文をクリックし……同時に、別の二人の少女にも異変が現れ、そこから全てが始まった。

プロローグ：里里編

1．見知らぬ質問

『地球を守りますか？』

「……………なに、これ？」

照明が消された室内に、浮かび上がる少女の姿。

背中まである黒髪をゴム紐で左右二つに分けて、ツインテールにしている少女、中山^{なかやま}里^{りり}里は、パソコン画面に映った文章に呆気に取られた。

適当にまとめた髪に体操服に短パンという、お世辞にも可愛いとはいえない格好をした里里の分厚い眼鏡が、パソコン画面の光を怪しく反射させた。

お風呂あがりの肌をパジャマに包みながら、パソコンの電源スイッチを押し、画面に光が点ってから四時間。

そろそろ寝ようと思い、久しく更新されていないサイトを巡回していて、最後のサイトのリンクをクリックしたのが、ついさっき。そして、見つけたのがこのページ。

はてな？ 里里は首を傾げた。

なぜなら、里里の知っているサイトのトップページと、今、画面に映し出されているトップページが似ても似つかなかったからだ。

パソコン画面に映し出されたのは、真っ白なページ。背景も無く、サイトのタイトルも書かれていない。サイト管理者のプロフィールも、日記も、他のサイトへのリンクも、広告も、何一つ無い。

あるのは唯一つ。画面中央に表示された文章。

『地球を守りますか？』

という、意味不明の文章だった。

もしかしたら、間違えて別のリンクをクリックしてしまったのか

しら。

そう考えた里里は、ブラウザの戻るボタンをクリックした。だが…。

「変わらない……」

画面は変わらず、パソコンは沈黙を守り続けた。

里里の脳裏に、考えたくない言葉が浮かんでくる。今度はパソコンの電源ボタンを押し続けた……変化なし。

里里の脳裏にウイルス、という文字が華やかに輝いた。

里里は泣きたい気持ちで、現実から逃げるように椅子にもたれて返り返った。

「……もしかしてウイルス？ 嫌だな……ウイルスなんて入っても、駆除の方法知らないよ……ウイルス対策ソフト、入れておけば良かったな……」

座っている椅子の背もたれが軋んだ。その後ろで孤独に稼動している扇風機が、夜の温い風をせつせと運んでいた。

「面倒だな～寝て忘れようかな～」

天井を仰ぎ見つつ、里里は不貞腐れた。寝たところで事態は解決することはないのだが、彼女は、良くも悪くもマイペースな少女だった。

それは、彼女には友達が居ないのも関係していた。幼い頃から自室で本を読み、ネットをして過ごしていた、筋金入りのインドア派なのだ。

だからといって、人見知りから、内向的から、友達が居ないのではない。ただ、作らないだけなのだ。

それは中学を卒業し、高校生になっても変わらなかった。

学校から帰宅し、まっすぐ自分の部屋に閉じこもる。それが、中学のときからのライフスタイル。高校入学から四ヶ月。学校は夏休みを向かえ、長期の休みに入った里里は、さらに自室から出なくなっていた。

ある意味、引きこもりに近いのだが、里里はあまり気にしていな

かった。外で遊ぶより、部屋で本を読み、ネットをしている方が何倍も楽しかったからだ。

「……………どうしようかな……………動かないし、コンセント抜いちゃおうかな……………いやいや、それをしてしまうと色々面倒なことになりそうだし……………」

背もたれから身体を起こし、机に肘を乗せる。謎の文章を表示している画面を見つめた。

キーボードを適当に叩いてみても、マウスを無茶苦茶に動かしてみても、パソコンは何も反応を返さない。

両親に相談しようとも考えたが、止めた。共に、パソコンの基本的な操作くらいなら知っていると思うが、こういったトラブルに対処する知識を持っているとは思えなかったからだ。なにより……………

「さすがに、夜中の一時に起こされたら怒るよね……………絶対」

視線を画面右下に向ける。画面に小さく表示されている時刻は、夜中の一時を回っていた。

誤差もあるし、パソコンが動かなくなった以上、画面に表示された時刻は多少前の時間だ。実際は、もう少し後の時刻だろう。里里の居る自室以外が暗くなってから、2時間。そろそろ眠りも深くなっている頃合だ。起こしたら、烈火のごとく怒られるだろう。

憂鬱とはこういう気分なのかな？

「ああん、もう、本当にどうしようかな……………」

どんどん気分が落ち込んでいくのを実感しながら、パソコン画面を見つめた。

「……………ん？ あれ、こんなもの表示されていたっけ？」

すると、何時の間に表示されていたのか、『地球を守りますか？』の文章の下に小さく、『Yes/No』と選択肢が表示されていた。首を傾げながらもマウスを動かすと、画面に表示されたカーソルも合わせて動いた。

「あ、動いた」

右に左に、カーソルが動く。だが、ブラウザの戻るボタンと、イ

ンターネットを閉じることは出来なかった。ちゃんと反応はしているのに、何度クリックしてもページは変わらなかった。

「……………」

試しに、『Yes/No』の部分にカーソルを近づけてみると、カーソルは矢印から、人の手の形になった。どうやら、パソコン自体はまだ機能しているみたいだ。

これは、どちらかを選べという意味だろうか？

「馬鹿馬鹿しい」

掴んだマウスが動き、カーソルは『No』の文字と重なり、指に力が……入る寸前、里里の左手が、マウスをつかんでいる右手を止めた。

「……………え？」

最初、里里はマウスが誰の手によって止められたのか分からなかった。数秒間、つかまれている手と、つかんでいる手を交互に見つめた後、ゆっくりと左手を離れた。

その手をじっと見つめて、開閉する。ぐっば、ぐっば、何の変哲も無い左手だ。

顔を上げると、画面は変わらず一文を表示し続けていた。ただ、カーソルは『No』の上ではなく、『Yes』の上に置かれていた。

「……………」

自分の意思とは関係なく動いた左手。マウスを動かしていないのに、勝手に動いたカーソル。

驚けばいいのか、それとも正気を疑えばいいのか、里里には分からなかった。

だが不思議と、恐ろしいとは思えなかったし、感じなかった。ただ、この質問はとても大切で重大な事である、ということだけはなぜか理解した。そう、それこそ一生を左右してしまうくらい、重大な事だということだ。

自然と、里里は口腔に溜まった唾を飲み込んだ。

せめて心の準備が欲しかった。里里は誰にでもなく、そう愚痴をこ

ぼしたくなった。もう里里の頭には、パソコンのことや、無意識に動いた左手のことなど頭に無かった。

そう、これはとても重大な……。

「決断……！」

じんわりにじんできた汗が、頬を伝っていく。

すぐに、里里の中で答えが出た。それが正しいと考え、悩む前に、里里の右手はマウスを動かし、カーソルが『Yes』の上に……。

「……………」『Yes』」

薄暗い室内に、マウスのクリック音が静かに響いた。

里里は『Yes』を選択した。

そうしなければならない。そうするべきなのだ。そう、里里は不思議と納得していた。

ゴクリと、喉が鳴る。カラカラに乾いた喉へ、無理やり唾を送る。変化は、すぐに起こった。

「……………」あ、変わった」

室内に、里里の呟きが静かに広がった。

音もなく、画面は中央に表示されていた文章が消えて、新しい文章が画面中央に一文だけ表示された。

やはり、管理人のプロフィールも、日記も、他サイトのリンクも、広告も無かった。あるのは唯一つだけ、『貴方はアンドロイドになって戦ってもらいます』とだけ表示されていた。

……………」アンドロイドになった戦う？

「これだ」

け、と最後の言葉を話すよりも早く、画面が再び真っ白になった。「け？」

そして、最後まで言い切った直後、画面から黄金に輝く何かが飛び出し、里里の身体を貫いた。痛みは全くなかった。

いや、里里には一瞬の光と、強い衝撃しか感じなかった。

視界が次々に移り変わり、気づいたときには、里里は柔らかい物の上で仰向けになっていた。すぐに、それがベッドであることに思

に至った。

真っ暗な天井を一瞬眺めた後、視線だけ下げると、ディスプレイの発光がわずかに感じ取れた。

どうやら、あそこからこっちに吹っ飛ばされたい……今、何が起こった？

里里は疑問に思ったが、それを考える続けることは出来なかった。視界に広がる天井が、渦を巻き始めたから。

「あ、れ？」

急速に目蓋が下がっていく。里里はとにかく目蓋に力を入れようと努力したが、無意味に終わった。あっという間に意識は奥底に沈み、里里は意識を失った。

プロローグ：弓編

「ありがとうございます」

みなみかゆみ

コンビニ店員の声を背に南川弓は、自動ドアを潜り、蒸し暑い外に出た。父用に買ったビールやら自分用のジュースやらが入ったビール袋を片手に持ち替える。両手で持つほどには重くない。

ポケットから携帯電話を取り出し、開く。時刻は夜の23時を回ったところだった。

「……ん？」

ふと、微かに耳をかすめた音に足を止めて、耳をすませる。どこか遠くから、虫の鳴き声が聞こえた。

あれはなんだろうか？

弓は辺りを見回し、音の方向を探ったが、よく分からなかった。まだ、虫の鳴き声は聞こえてくる。

リーン、リーン、リーン、リーン。文字にすれば、こんな感じかな？

いや、もつと高いか？

いやいや、もう少し早く、低いかな？

考えれば考える程分からなくなってきたので、黙って虫の鳴き声を聞くことにした。夜も遅いので、早く帰りたい。再び歩き出す。

「……リーン、リーン」

なんとなく口ずさんでみた。けれども、恥ずかしくなって止めた。家路の途中にある丁字路。曲がると、丁度電話をしていた見知らぬ通行人が居た。

他に見るものが無いので、弓の視線が通行人に向く。通行人も、弓が近づいていることを察知し、顔を上げた。

「……でさひい！？」

通行人が弓の顔を見た瞬間、通行人は息を呑んだ。そして、すぐさま早歩きで弓の横を通り過ぎていった。

振り返ると、通行人は全力で走っていた。追いかけてようと考えるが、面倒なので止めた。

「……ふう」

何もしていないのに妙に疲れた。弓はそう思い、再び家路に着いた。

顔を見られて避けられるなど、一度や二度ではない。もう慣れたことなので、たいして気に留めて置く必要がない出来事なのだ。

まあ、しかし、逃げるのも無理はないか。

弓は一人納得していた。視線を下げると、紫のＴシャツが目映った。胸が邪魔してジーンズが見えないが、世間一般の感覚から考えたら、それほどおかしい姿ではないだろうと、弓は思った。

それより問題は、この顔だな。

空いている片手を頬に当てる。年相応の瑞々しい肌を、指に感じた。脱色して茶色になったショートヘアの髪に鋭い目つき。女性にしては高い身長。傍目からは、不良と思われるでも仕方ないくらいの風貌だ。

ただ、目つきを除いて、だが。

美人の部類に入る顔立ちなのだが、あまりに怖い目つきによって、むしろマイナスのイメージを持ってしまふ、それが南川弓という人だった。

あゝ、また誰かに目を付けられないうちに、家に帰ろう……と考えたところで、鼻がムズムズと……。

「ふああ……眠い」

大きな欠伸が出た。にじみ出た涙を指で拭いながらも、弓は我慢しなくてはと思った。

二ヶ月前の身体測定で１８０ｃｍへ王手が掛かったのは、まだ新しい記憶。四捨五入すれば、約１８０ｃｍ。

不良、問題児、屑、馬鹿、女番長、罵詈雑言なんて掃いて捨てる程言われてきた。

けれども、それでも、弓は女の子である。ある程度背が高い方が服

も似合うというが、それにも限度というものがあるのだ。

「いくらなんでも、そこまで背はいらねえよ」

不意に口から飛び出した本音に、慌てて手で口を塞ぐ。幸い、辺りには人影は無かった。ため息がこぼれた。

昔から早寝早起きは得意だったが、まさかそれが今日の悲劇を生むことになるとは……。幼い頃の弓には想像も付かなかっただろう。22時が就寝時間の弓にとって、一時間後の23時は未体験の世界。けれども、これ以上背を伸ばさない為には、成長ホルモンを抑えなくてはいけない。

そのための夜更かし、そのための夜間の外出。高校生初めての夏休み、弓は人知れず努力していた。

しかしながら、それもそろそろ限界なのかもしれない。

弓は眠気を堪えつつも、そんな弱音が頭を過ぎった。油断すればすぐさま白旗を掲げる目蓋に気合を入れ、慣性で足を動かす。

夏休みに入ってから幾日。毎日夜更かしをし、毎日朝早く起きた。そのため、一日の睡眠時間は6時間程度だ。

それでも6時間なのだが、されど6時間。ああ、背を高くするのは大変だが、背を小さくするのも大変だ。

これでは駄目だ。弓は考えた。眠気を耐える為にも、少しでも夢中になれることを考えなければならぬ。

ふと、弓の脳裏に、先ほどのコンビニ店員の姿が頭を過ぎった。

これはいいかもしれない。

「店員、店員、店員」

人通りもない夜間に、店員と呟く年若い女性。傍目にも通報されてしまいそうだが、人通りがなかったため、通報されることはなかった。

「それにしても、あの店員は何かならんだろうか」

弓は頼りなく点滅する街灯が取り付けられた電柱の横を通りながら、先ほどのコンビニ店員のことを考えた。

「こつちが未成年って分かっているのか分からんが、気になるなら確認しろよ」

どう考えても未成年で酒を飲んではいけない年齢だと分かっているのに、酒を買っている自分が悪いのだが、どうしてもあの店員が気に入らなかった。

弓の脳裏に、店員との一部始終が甦ってくる。

『これ、お願いします』

ジュースやら酒やらを抱え、レジに並べる私。

『かしこまりました……あの？』

無表情にバーコードリーダーで商品の情報を読み取っていく店員。その目が酒に留まる。

『……はい？』

もしかして、売ってもらえないか？

『い、いえ、失礼しました』

そう言った店員、手早く酒のバーコードに赤い光を当てた。

『977円になります』

『……？』

不可解に思いながらも、お金を渡す自分。

『1000円ですね、お釣り、23円になります』

こちらに目を合わせることも無く、手早く商品をビニール袋に詰め、私に手渡す店員。

『ありがとうございます』

袋を受け取った瞬間、店員と目が合った。その目は、はっきりと私を見下していた。

回想が終わる。途端、湧き上がってくる怒り。おかげで、目が覚めた。

「やっぱり、一発殴っておけば良かった」

変わりに残ったのが、どうしようもない怒りだった。いつもそう、弓は憤慨した。

小学生のときも、中学生のときも、高校生になっても、いつも彼らは弓のことをあのような目で見ていた。

弓は、あの目が嫌いだ。あの、どうしようもない屑を見るような、どうしようもない馬鹿を見るような、冷たい眼差しが嫌いだ。

文句があるなら言えればいい。注意するならすればいい。

怖いのは分かる。逆上されるのを恐れる気持ちも分かる。それによつて怪我してしまうことを避けようとする気持ちも、痛いほど分かる。

だからといって、あのような眼差しを向ける権利など、あいつらにあるわけがない。

なんせ、私もそうなのだ。弓の脳裏に、今まで会ってきた人達が現れる。

「どいつもこいつも、言いたいことがあるなら言えればいいんだ。陰でコソコソ、目でコソコソ、本当に情けない」

私だつて怖い。逆上されるのも怖いし、怪我をするなんて考えるのも嫌だ。だけど、注意しなければならぬことを見て見ぬ振りをするのは我慢できない。

悪いと思つたことを口で注意し、時には力で注意し、その結果付いたのが不良というレッテル。後悔はしていない。

だが、あいつらときたらどうだ？

目で見下し、言葉で見下し、集団で見下す。こちらが近づけば我先に逃げ出し、こちらが離れれば我先に悪口を吐く。側に居るときは目を伏せてこちらの機嫌を伺い、側に居ないときは堂々と性根を疑つてしまうような言葉を述べるあいつら。

ふう、弓はため息を吐いた。握り締めていた指をゆっくり離す。

ビニールの袋と一緒に握り締めた爪が、掌に痕を残していた。

苦笑して、痕が残った掌を揉み解す。

途端、ポケットに入れていた携帯電話が鳴った。家族用に設定した着メロではなく、単純なコール音だ。学校に友達はいないし、家族以外に番号を教えたことはない。

つまり、見知らぬ誰かから電話が掛かってきたのだ。

「誰からだ？」

携帯電話を取り出し、番号を確認……しようとして、弓は首を傾げた。

「あれ、番号が表示されていない」

携帯電話の画面には、何の番号も表示されていなかった。

ただ電話のアイコンが表示されていただけだった。いつもならアイコンの下に、番号か非通知の文字が表示されるのだが……。

不思議に思ったが、悩む暇は無かった。携帯電話は絶えずコール音を鳴らし、静かな住宅街に響き渡っていたからだ。

このままでは近所に迷惑だし、とりあえず出よう。そう思い、弓は通話ボタンを押して、携帯電話を耳に当てた。

「もしもし？」

『地球を守りますか？』

通話口から、無機質な声が耳に入ってきた。

弓の心臓が、強く跳ねた。

なぜかは分からないが、一瞬で汗が噴出し、背筋に悪寒が走った。

……なんだ、今のは？

喉に強い渴きを覚えつつも、弓は繰り返し尋ねた。

「……もしもし？」

だが、通話の相手は何も答えなかった。

誰だ？ 弓は思った。同時に、声から相手を想像する。

けれども、想像出来なかった。男でもない、女でもない、子供でもない、老人でもない、無機質で中世的な声。

もしかして、今喋った相手……電話の向こうに居るやつは……人間なのか？

弓は頭を振って、今しがた考えたことを切り捨てた。

馬鹿馬鹿しい。どちらかといえば、機械音声に近いかもしれない。いや、きっとそうだ。

「もしもし？ 聞いているのか、もしもくし？」

これで返事が返って来なかったら、切ろう。そう考えた弓は、もう一度尋ねた。

そして、機械音声とも言えなくもない、不思議な声で返事が返ってきた。

『地球を守りますか？』

「……………」

さつきと同じ質問に、弓は眉をしかめた。

悪戯だ。そうに、違いない。

耳から携帯を離し、通話ボタン押して通話を切ろうと指に力が入る。

「……………」

だが、押せなかった。というより、押すことが出来なかった。

通話ボタンの上に乗せた指は、凍りついたように動かなくなり、指先にボタンの滑らかな感触を伝えてくるだけになっていた。

「……………」

ボタンから手を離し、ゆっくり耳に持っていく。怖いだとか、そういう感情は無かった。どうしてか分からないが、何時の間にか背筋に走ったそれらの感情は消えていた。

弓の脳裏にあるのは、たった今選択しようとしている通話の相手の質問。

『地球を守りますか？』

についての返答だけ。携帯電話が耳に収まり、もう一度尋ねようと口を開くと。

『地球を守りますか？』

同時に、通話の相手が質問した。

あまりにタイミングが良すぎる、どこかから見ているのではないか、たちの悪い悪戯ではないか、そんな疑問が浮かぶよりも先に、

弓は口を開いた。

「守る……いや、守りたい」

弓は、通話の相手の質問に、『Yes』の選択をした。

『……………』

……通話口からは無音しか返ってこない。永遠にそれが続くかと錯覚しそうになったが、思いのほか早く終わりを告げた。

『貴方は人狼になって戦ってもらいます』

「……はあ？」

通話の相手の言葉に、弓は呆気にとられた。

直後、ブツリと、電話が切れた。慌てて耳を澄ます。けれども、ツー、ツー、と、携帯電話は回線の遮断を伝えていた。

……何なんだ、今の？

汗で湿ったＴシャツを不快に感じながら、弓は首を傾げた。だが、考える暇はなかった。

「ぐるるるるる……」

突然耳に届いた、唸り声。その声は、犬や狼のような大きな獣が出したみたいにな、とても低く、身体に響いた。

「え？」

反射的に弓は振り向いた。同時に、後悔した。

「……え？」

弓の視線の先に、一頭の獣が佇んでいた。

その獣を見た瞬間、弓は悟った。こんなところで私は死んでしまふのか、と。

弓がそう思ったのも、仕方ない話だった。その獣は、弓の知るところな生き物よりも恐ろしく、どんな生き物よりも迫力があつたからだ。

「……マジ？」

弓の口から漏れた言葉が、夜道に消えていった。片手に握った携帯電話が、音もなくすり抜けて地面に落ちた。

それを合図に、獣が咆哮した。

「ぐるうあああ!!」

あまりに力強く、あまりに恐ろしい咆哮。獣は一瞬屈んだかと思うと、弓の眼前に迫って来て、筋肉隆々の腕を振り上げた。振り上げた手の先に、人間の身体など豆腐のように引き裂いてしまいそうな、鋭い爪が幾つも生えていた。

弓はジーンズが温かい何かで濡れていくのを頭の隅で理解しながら、硬く目を閉じた。

プロローグ：マリア編

これは誰の悪戯かしら？

はせがわ

長谷川マリアは、ベッドに置いてあった一通の封筒を摘み、眼前まで持ち上げた。透き通るような青い瞳は照明に輝き、長い金髪は光を優しく受け止めた。

その些細な振る舞いは、とても美しかった。けれども、それを見ていたのは窓に張り付いていた一匹の蝶だけだった。

「うゝん」

封筒の裏を見ても、何も書いていない。照明に透かしてみると、中に紙が入っているのが確認出来た。

……開けてしまおうかしら？

そんな考えが頭を過ぎったけど、止めた。なんだか盗み見しているようで、胸の奥がざわつくからだ。

でも、埒が明かないし、何とかしないとね。

もう一度封筒を裏返す。フワリと風が動き、空調の効いた冷たい空気が、マリアの頬をくすぐった。

長谷川マリア……今年の春、高校生になった、ハーフの少女である。

父は大会社の日本人の社長、母は世界的に有名なモデルという彼女。マリアの容姿は母譲りだ。

パジャマの上からでも分かるメリハリのある四肢。出るところは出て、引つ込むところは引つ込んでいる、世の女性が嫉妬の視線を向けそうなスタイルだ。

染み一つない顔に、優しく伸びた鼻の造形。大きく広がった目には、透き通るような青い瞳が浮かび、僅かに垂れ下がった目尻が柔らかな印象を加えていた。

絶妙なバランスの元に付けられた唇は、ほんのり桃色に咲き、全体の顔立ちを整えていた。

東洋人特有の美しさと、西洋人特有の美しさを、全て同時に持つて生まれてきたようなものであった。

「うーん、誰からでしょうか？　もしかしたら郵便の人が間違えて届けたのでしょうか？」

男から見れば、思わず頬を染めてしまいそうな可愛さで、首を傾げるマリア。

顎に手を当てて、考えるポーズ。記憶の糸を探って、マリアは今日の出来事を振り返ってみた。

「たしか、朝学校に向かったときは、何もありませんでした」

いつも通りの時間に起床し、いつも通り準備を整えたマリアは、朝、執事の源一郎げんいちろうが運転する車に乗って学校に向かった。

ホームルーム開始15分前に到着。車から降りる際、ファンクラブの人達が遠目から撮影しているのを、横目で確認した。

「……あ、ここは必要ないか」

軽く頭を小突き、天井を見上げながら、家に帰ってからの出来事を振り返る。

家に帰ってから、すぐ自室に入って着替えた。たしか、そのときには手紙なんてものは置いていなかった。

その後すぐにピアノのレッスンに向かい、自室に帰ってきたときにも何も置いていなかった。

夕食を食べに部屋を出たときにも無かった。部屋に戻ったときにも無かったし、お風呂へ向かったときにも無かった。もちろん、帰ってきたときにも無かった。

「……あれ？」

首を傾げて、もう一度封筒を見下ろす。

すると、先ほどまで閉じられていた封は開かれていて、中の紙が封筒の上に広げられていた。

紙の中央には、一文だけ。

『地球を守りますか？』

とだけ、書かれているだけだった。その文章の下には『Yes /

No』と、選択肢が書かれていた。

「え、え、どうして中身が……」

慌てて、両手で紙を押さえる。だが、開かれた紙は意外と大きく、反対にマリアの手は小さかった。

押さえた場所も手紙の両端であつたため、結果的にマリアは『地球を守りますか？』の一文を注目する形になってしまった。

『地球を守りますか？』

その一文を改めて読んだ瞬間、マリアの胸の奥で、何かが熱く鼓動した。その熱い何かは、心臓から始まり、全身に広がっていく。

……これは……なに？

目が離せない、離すことが出来ない。マリアの短い生涯の中で、全く経験したことがない感覚が沸きあがって来た。

マリアの細くて形良い白い指が、紙の上を滑っていき……。

「Yes」

マリアは『Yes』を選択した。

直後、マリアは驚きのあまり、目を見開いた。

白い紙にあつた全ての文字が動き出したのだ。ミミズのようにのたうちながら、白い紙の上を這っていく。

わずか数秒程度で、ミミズの移動は終わり、新しい文面がそこにあった。

『貴方は吸血鬼になって戦ってもらいます』

「貴方は吸血鬼になって戦ってもらいます」

文面を復唱し、一つ一つの意味を読み取っていく。顔を上げ、目を閉じると、目の前で起こった超常現象のことが頭の中を渦巻いた。

知らないうちに置かれた封筒。中身は勝手に文面が変わる手紙。

そして、奇妙な文面。

考えても、悩んでも、答えは出そうにない。

「……これはいったい？」

ポツリと呟くが、どこからも返事は返ってこない……はずだった。

フワリと風を頬に感じた。証拠に、後ろ髪が風に揺れて頬をかすかにくすぐった。

そして、背中に感じる、あるはずのない何かの気配。

「——っ!？」

マリアは戦慄した。自室のドアが開かれた音はしなかったし、そもそも部屋にいるのは自分一人だけ。

自分以外、部屋には誰もいない……はずだったのに。

一気に膨れ上がる何かの気配。何かは、すぐ側まで迫ってきていた。

マリアは一度大きく深呼吸して、ゆっくり身体に力を込める。挫けそうな心を奮い立たせ、マリアは歯を食いしばり、振り返え……ろうとした。

「だっ」

振り返ろうとしたが、出来なかった。振り返るよりも早く、何かはマリアの首筋に鋭い牙を突き刺した。

「え？」

一瞬、マリアは何をされたのか分からなかった。だが、凄まじい勢いで体中の体液を吸われていくのを実感した瞬間、血を吸っているのだと心の中で理解した。

抵抗しようと四肢に力を入れる。けれども、あっという間に身体は動かなくなっていた。身体はどんどん重く、視界は薄暗くなっていく。

熱、痛、痛い、なに……これ？ 血？ 血が出ているわ……どこ、だ……れ……

「だ……れ……」

その言葉と共に、マリアは意識を失った。

それぞれの始まり：里里編

朝、里里はカーテンの隙間から漏れる日差しによって、目が醒めた。次いで、蟬の合唱、道路工事の音、車の走行音、様々な音が里の耳に届いた。

けれども、最初に認識して理解したのは、それらの音ではなく、少し汚れた天井だった。次に蛍光灯の電灯。次に丸い照準が入った。二、三、瞬きをする。その度に、視界に変化が現れた。一回目は右端に三つのメーターが現れ、それらのゲージが上下した。

二回目には左端に人体のシルエットが現れ、シルエットの各部位に、次々と日本語で説明が表示されて消える。

三回目にはシルエットに大きく『異常なし』と表示された後に消え、右端のゲージも最大まで上昇すると消えてしまった。

ゆっくりと身体を起こし、パソコンに目を向ける。

「……………ん」

ベッドとパソコンは少し離れているので、目を凝らす。すると、ディスプレイ画面を囲むように四角い照準が現れた。ピッ、と軽い電子音が頭に響くと、四角い囲みの中が拡大表示され、よく見えるようになった。

「……………夢？」

頭を掻き、分厚い眼鏡を外してこめかみをほぐす。どうにも寝た気がしない。

顔を上げて、もう一度画面を見つめる。

ディスプレイ画面には、昨日のようなページは表示されていないかった。代わりに、里里の記憶にあるトップページが表示されていた。その更新経歴には『NEW』と更新を示すアイコンが表示されていて、その下に細かい更新内容が書かれていた。

文字が小さくてはつきり見えないので、さらに目を凝らす。する

と、さらに四角い囲みが更新経歴らしき文章を囲み、囲んだ部分が拡大表示されて視界に広がった。

「ええっと、何々？」

その文章に意識を集中させると、文章が視界上の部分にそのまま表示された。

『久しぶりの更新です♪ 本当に遅くなつてごめんね？ 最近忙しくって、あんまり更新する時間が無かったんだ。けれどももう大丈夫。これからまたバリバリ更新していくから、また日記に感想書き込んでね♪』

ピピピッと、読み上げていく速度と同速度で、文字が出てきた。

ここ、また更新するんだ。チェック入れとかなきゃ。

そう思った里里は、ベッドから立ち上がり、パソコン専用の椅子に腰を下ろす。

眼鏡をかけ直し、マウスを片手にお気に入りボタンをクリック…

…しようとしたところで、手が止まった。

「……………は？」

今、私は何をした？

里里は自問した。

簡単、眼鏡をかけた。

里里は答えた。

そう、私は眼鏡をかけた。

……………え、眼鏡を？

気づいたとき、里里は立ち上がってパソコンを見下ろしていた。

震える手を見ないようにして、掛けている眼鏡を外す。いつもなら目の前が霧に包まれたように見えなくなるのに、今は何も変わらなかった。

今度は眼鏡をかける。視界は全く変わらない。今度は眼鏡を外す。視界は全く変わらない。

たしか、私の視力って0.01くらいだったわよね。

手元に視線を向けると、牛乳瓶の裏をそのままレンズにしたかの

ような眼鏡が見えた。全体の輪郭も、レンズの分厚さも、全て見えた。

ふと、里里は視線の先に必ずある丸い照準に気づいた。

「……そういえば、さっきから目の前をうるちよるするこの丸いものは、なに？」

照準を掴もうと手を伸ばす。だが、奥を探っても、手前を探っても、照準を掴めない。

ならば、もっと近かったりするのだろうか？

ゆっくり指を眼前に近づけ、照準を逃がさないように指先を伸ばす。視界全体に指が広がり、それがどんどん視界を埋め尽くしていく、コッソ、と固い感触と共に、指先が眼球に触れた。

「……………」

呆気にとられた里里は、無言のまま軽く指をくねらせる。指先のシワが力の方向に従って歪むのが見えた。

途端、視界左端に人型のシルエットが現れる。シルエットの顔の部分が拡大表示され、顔の各パーツが出てくると目の部分が点滅し、そこから矢印が伸びた。

矢印の先には『眼球に何かが触れています。至急、排除することを推奨します』と表示されていた。

表示された文章に従って指を離すと、目の部分の点滅が消えた。

矢印の先も文字が『排除完了』に変わった後、シルエットも消えた。

「……………」

右に、左に、瞳だけを動かす。丸い照準は、それに合わせて右に、左に動いた。

立ち上がって窓に向かい、カーテンを開ける。朝の日差しに一瞬目が眩んだが、すぐに治まった。

目を凝らし、遠くの方に意識を集中する。もっと遠くの、あの豆粒のようなマンシヨンの辺りを見つめる。

すぐさま四角い照準が豆粒のようなマンシヨンを囲む。囲んだ部分が視界一杯に広がり、マンシヨ各階のベランダの様子が見える

ようになった。

さらに意識を集中させると、ベランダの一つが四角い照準に囲まれる。四角い照準が視界一杯に広がり、干している洗濯物の種類まで分かるくらい鮮明に見えた。それどころか、その奥の網戸の向こう……家の中に居るお婆さんの姿まで見ることができた。

「……わゝお」

呆気にとられて集中を解くと、一気にベランダから遠ざかった。すぐに視界の端に見慣れた自室の窓枠が見えるようになった。

「……わゝお」

片手に持っていた眼鏡が手からこぼれ落ちた。

とりあえず、現実を受け入れよう。

里里は自室のドアを勢いよく後ろ手で閉めながら、そう結論した。里里の住む家は一軒家で、築30年のなかなかの年寄りである。そこもかしこも老朽化が進んできているが、里里にとっては、慣れればどうということはない程度のものである。自室のドアが老朽化して閉まりにくくなっているのなら、力ずくで閉めればいいのだ。踏むと素敵な軋み音を奏でる階段を下り、キッチン兼リビングに入った。

右には大きなソファが置かれ、その向かいにテレビが、その横には色んな物が入った棚が鎮座していた。

左を見ると、里里の母である、中山真理恵が、なかやま まり え台所で洗い物をしていた。おっとりした美人で、近所でも評判の美人奥様として有名な人だ。

左にキッチン、右にリビング、ある意味で機能性を重視しているというのが、母の弁だったのを、里里は覚えている。

真理恵は気配で気づいたのか、洗い物を中断し、振り返った。

「あら、おはよう」

見ているこちらが気恥ずかしくなってしまうくらい、ニッコリと

真理恵は綺麗な笑顔を浮かべた。見慣れた里里でさえ、即座に反応できなかったくらいだ。

「…お、おはよう、お父さんは？」

里里が挨拶を返すと、真理恵はさらに笑みを深めた。

「とつくに会社に行ったわ。もうお昼よ、ご飯どうする？ トーストくらいなら用意するけど？」

「あ、お願いします」

了承、と真理恵は答え、水道の蛇口を捻った。

特にすることもない里里は、とりあえず空いている椅子に座り、テーブルに肘を預けた。そのまま、真理恵の後姿を見つめた。四角い照準が真理恵の身体を囲った。

視線を下げると、ロングスカートに包まれた、母のむっちりとしたヒップが目飛び込んできた。

「……うん」

里里は首を傾げた。脳裏にさっきの真理恵の姿が甦ってくる。とてもではないが、年齢相応の姿ではない。里里の年齢から考えたら、どう見積もっても30を超えているのは確実なのだ。

「謎だ」

前に一緒にお風呂を強制されたときの真理恵の姿を思い出す。どう考えても20代の……下手すれば、現役高校生である自分よりも瑞々しいお肌を保っていた。

ときどき、この人は人間ではないのではないか、そう思ってしまうときもある。

「ねえ、母さん」

これまでに何度か尋ねてきた質問ではあるが、改めて尋ねることにした。

「ん、なに？」

真理恵は食パンをオーブントースターに入れながら、返事をした。

「母さんって、今年で何歳になったっけ？」

「あらやだ、私は永遠の20歳ですよ」

これまた、いつも通りの回答が帰ってきた。

ふう、とため息がこぼれる。

ああ、何時になったら年齢を覚えてくれるのかな、この人。

里里がそう考えた途端、視界上から一筋の青い線が現れ、それがゆっくり下がりはじめた。真理恵の頭を通過し、腰を通過し、足首を通過し、見えなくなつた。

……今度は何。

言葉には出さなかつた。不思議と里里は今の自分を受け入れていた。

視界左に、真理恵の後姿がそのまま映し出される。目の前で洗い物をしている母の姿と微妙に重なり、なんだか違和感が凄い。

「うーん、見難い」

自分が呼ばれたと思つたのか、真理恵は振り返つた。

「うん？ 今何が言つた？」

「言つてない、気のせいじゃない？」

適当に誤魔化して、意識を視界左に集中させる。

映像として映し出された真理恵が、ぐるぐると様々な回転する。

正面の顔、横顔、後ろ姿、上から、下から……あ、下着は紫か。

ピタリと回転が止まる。

途端、真理恵の身体から矢印が伸び、その下に次々と文章が表示され始めた。

ええつと……年齢は……39歳……だと！？ 身長……160c

m。体重……51kg。スリーサイズは……でかい！ 細い！ 大

きい！ 知らなかつた、大きいとは思つていたけど、お母さんつて

G……って、あれ？ これつてもしかしてお母さんのことなの！？

驚いて母に視線を向けると、母はフライパンを振っていた。ベークンの焼ける美味しそうな匂いが香ってくる。

里里は身を母から視線を外して、表示される文章を見た。母親の秘密を覗き見ている罪悪感があつたが、好奇心が勝つた。

血液型はA型。血圧は最高値が127、最低値が81。まあ、血

圧なんて見ても分からんけど。

各種筋肉の検査……若干の疲労の蓄積あり。各種内臓の検査……腰周辺の疲労の蓄積あり。各種骨格の検査……若干、腰椎部分に疲労の蓄積あり。

なんか嫌な予感を覚えた。見てしまったら後悔してしまいそうな、そんな予感。

結論、現時刻から24時間以内に、異性の誰かとせ。

「ほら、出来たわ」

ハッと、我に返ると、真理恵が笑顔で里里の前にトーストの乗った皿を置いた。その横に、美味しそうに焼けたベーコンと、ふっくらしたスクランブルエッグが乗せられた皿が置かれた。

「冷めないうちに食べなさい。私は洗濯物干しに行ってくるから」
そう言くと、母はそそくさとリビングを出て行った。

一人残された里里は、眼前のトーストを見つめた。うつすらと湯気が立ち上り、とても美味しそうだ。

けれども、食欲はかなり失せてしまった。

「そういえば昨日、お父さんが久しぶりに早く帰ってきたんだっけ」
学生時代、水泳部に所属し、水泳の貴公子として名を馳せたと自慢していた父。がっしりとした体形で、子供の頃はよく、おんぶされたものだ。

里里の脳裏に、怖いくらい微笑む母の姿が浮かぶ。

トーストを一口齧る。外はサクサク、中はモチモチ。絶妙な焼き具合だった。

「……よろしくしていたんだね、お母さん」

そのパンの美味しさが逆に辛かった。

人生の中で見たくない、知りたくないものベスト3に入る出来事を知ってしまった里里は、一人心中で涙を流した。

気まずい、気まずいことこの上ない。いや、知っているのはこちらだけなのだけれど、知ってしまった以上、果たして自分は普段どおり振舞えるだろうか。

無理に決まっている。

「見るんじゃないかった」

里里はヤケクソ気味に、ベーコンを口に放り込んだ。テレビを見ようと、リモコンを探す。

リモコンはすぐに見付かり、ソファアの上に置いてあった。

その距離3m。手を伸ばしても到底届かない距離で、取りに行くには近すぎる微妙な距離。

「こういうところまで面倒になるのは駄目なんだけども……びよーんと手が伸びて、リモコンが取れればいいのに」

モグモグとトーストを頬張りながら、愚痴をこぼした。母が見ていれば注意されていただろうが、今は洗濯物を干しに行っているので安心。

黙々と食事をするのも退屈なので、立ち上がる。お年寄りよろしく、どっこいしょ、の掛け声も忘れない。

リモコンを取ろうと右腕を伸ばす。そしたら、カチン、と金属的な音と共に、肘の関節の辺りから、四つの棒が生えた。

「へ？」

里里は呆気にとられ、自分の腕を見つめた。

四つの棒の先端が開き、黒い穴が見えた。穴の中は徐々に青白く光り始め、そこから小さく駆動音が漏れてくる。

あ、こういうの、見たことある。確か昔のアニメとかだと、こんな感じで腕が飛ぶんだよね……って、駄目じゃん！

「だ」

め、と言おうしたが、遅かった。

腹に響く衝撃が里里の中に広がる。腕は音もなく発射され、リモコン目指して加速していき、腕と腕の繋ぎ目から、半透明な紐が伸びていった。

そして、ソファアの上に置いてあったリモコンを掴んだ……感触が伝わる同時に、そのままの勢いでソファアを粉碎した。

「……………」

現実から目を背けなくなった。

残された腕を見ると、腕の繋ぎ目の部分から半透明の紐が伸び、それがソファーに突き刺さった腕に繋がっていた。

「有線なんだ」

いやいや、違う、そうじゃない。今重要なのはこの状況をどうするかだ。

意識を飛んでいった腕に集中する。開いて握って、しっかり掌にリモコンの感触が伝わってきた。おまけに綿の感触も伝わってきた。ソファーの中の、である。

なんとかしなくては、このままでは真理恵にどんな罰を受けるかわからない。

しかし、現実是非常だった。

里里が最も恐れた現実がすぐ側まで歩み寄ってきていた。

「里里、なんか変な音がしたけど、何かあったの？」

真理恵の声が、里里の耳に届く。今もつとも聞きたくない声だ。

「え、いや、って、腕が！」

ソファーに大穴を空けた腕は、ソファーに突き刺さったまま、その場で沈黙を保っている。動く気配も、戻る気配も見せない。

リビングを抜けた先の廊下から、悪魔の足音が近づいてくるのが分かった。

や、やばい、も、戻れ、早く戻れ！

「や、やばい、も、戻れ、早く戻れ！」

慌てて頭の中で、実際に声に出して、戻れコールを繰り返す。

すると、再び力チンと金属的な音と共に、腕の付け根辺りから駆動音が聞こえ始めた。

少し余りがあった半透明の紐がピンと張り、次いで勢いよくソファーから腕が抜け、凄まじい速度で戻ってきた。

飛んでいったときと同じくらい……下手すればそれ以上の高速で。「うおおお！」

激しい金属的な音と共に、飛んでいった腕と残された腕が合体し

た。衝撃で腕が後方に飛ばされそうになったが、椅子を掴んで耐えた。

飛び出した四つの棒も引っ込む。この間、わずか一秒にも満たない時間で、腕は元の姿になった。

その直後、リビングに入ってきた母は里里の姿を見て眉をしかめた。

「ちょっと、返事くらいしな……さい……」

母の注意は徐々に小さくなった。見ると、里里ではなく里里の横を見ていた。視線の先には、もちろん大穴が開いたソファがある。目を見開いて呆気に取りられている母を見て、里里は上手い言い訳を考えることにした。

それぞれの始まり：弓編

弓は心の底から憂鬱になっていた。気分は最低にまで落ち込んでいた。

顔を上げて、机の上に置いた時計を見る。もう早朝を通り越し、朝の時間になっていた。

いつもなら外に遊びに行くなり、下でテレビでも見るなりしているのだが、今はそうする訳にはいかない事情があった。

眼前の床に置かれたビニールの袋を見つめ、再び頭を抱えた。

「……………」

言葉無く項垂^{うなだ}れている姿は、とても悲壮感に溢れていた。さらに上はブラだけ、下は無いという、目のやりどころに困る姿になっていると、さらに凄^{しみ}かったりする。

ビニールの横にはコンビニで買った飲料水が並べられていて、塗装されたアルミ缶が、夏の日差しを受けて輝きを放っていた。

昨日のことは夢ではない。

弓は昨日の出来事を振り返り、そう結論付けた。

朝、自室のベッドで目覚めたとき、初めは夢だと思った。

だが、とても夢には思えなかった。実際、弓の心はあれを現実だと考えた。

そして、破けたＴシャツと色々入ったビニールの袋を見て、すぐに夢ではないことを確信した。

同時に、夢であってほしいと思った。

けれども、滴るくらい水分を吸収したジーンズからは、逃れられない。そのことが、今の弓の心に重く押し掛かった。

「……………この年になつて」

項垂れていた弓は再び顔を上げた。手を伸ばし、ビニールの袋を掴む。かすかに、アンモニアの臭いが袋から漂う。ギュッと握ったビニールの袋に、シワが出来た。

「この年になつて、お漏らしするとは……」

弓は涙を流したくなつた。けれども、涙は出てこなかつた。そのかわり、どこか遠くに行きたくなつた。

それが、心の底から憂鬱になる最大の原因。化け物に襲われたとか、不可抗力とか、弓にとつてはそんなことだ。

過ぎ去つたことは過ぎ去つたこと。自身が無事に生きているのなら、それ以上考える必要はない。弓はそう考えることにした。

それよりも、今考えなければならぬのは、アンモニアで濡れたジーンズだ。これは、現実として残っている。出来るならば、これも無事であつてほしかった。

それに、高校生にもなつて、お漏らししてしまったことが何より恥ずかしかつたのだ。

そして、そのことを家族に知られるわけにはいかない。

「どうにかして、どうにかしてこれらを処分しなくては」

だが、このとき、弓の頭は自身では気づいていなかったが、かなり混乱していた。

化け物との突然の遭遇。死んだと思ったら自室のベッドで目覚める。おまけにお漏らしと、黒い彗星もびつくりの三連コンボだ。

混乱しない方がどうかしている。

「そうだ、何か飲んで落ち着こう」

立ち上がると、机の上にあつた炭酸水が目に残まつた。それを掴み、ブルタブを開ける。開かれた飲み口を下にして、一気に中身を喉に流し込む。

炭酸特有のチクチクした後味、それが喉を通り、食道を通り、胃に入った。

「ぶはああ！」

それらを堪能するよりも早く、全て吐き出した。慣れない一気飲みをするべきではないことを、苦しみと共に痛感した。

吐き出した炭酸水が一部カーテンにかかり、カーテンを変色させた。咳き込みながらも、涙で濡れた瞳はそれらを捉えていた。

「ああ、カーテンが」

カーテンを乾かそう。その一心でカーテンを開けたり閉めたり、傍目にもおかしい行動を取る。だが、弓は真面目にそれを繰り返す続ける。

ふと、無視できないアンモニアの臭いをさらに意識する。

「ああ、どうしよう」

尿で濡れたジーンズとショーツが入ったビニールの袋を抱え、どうしようかと部屋を見回す。そのとき、悲劇が起きてしまった。

まだ混乱から立ち直っていない弓の耳に届いた、突然のノック音。「姉ちゃん、昼ご飯出来たって。起きている？ 起きてないなら入るよ」

次いでドアの向こうから聞こえてきたのは、弟の^{ともあき}智明の声。

立ち直っていない頭が、一気に混乱する。あたふた、あたふた、と部屋中へ意味も無く視線を向ける。

ここは素直に起きていると答えた後、ドアを開けると言えば良かったのだが、弓の頭にはそんな考えは無かった。

ドアのノブが回る。その光景を、弓は黙って見つめた。完全にノブが回りきり、智明が顔を覗かせた。

「姉ちゃん、そろそろ起きて……い……る……」

瞬間、姉弟の顔が引きつった。

普段はやんちゃざかりの生意気そうな顔が、はつきり凍りついたのが分かった。なぜなら、弓の頬はそれ以上に凍っていたからだ。

ただ濡れたジーンズと下着が入った袋を抱えているならば誤魔化せたかもしれない。

だが、部屋中に漂うアンモニアの臭いと、下半身裸という状況の前には、いかなる誤魔化しも通用するとは思えなかったし、恐らく無駄だっただろう。

数秒、無言の時間が流れる。

先に再起動を果たした智明は、全てが分かっていると云わんばかりの笑顔を浮かべた。

「ご飯、できているよ」

「あ、う、うん」

優しい笑顔を浮かべた智明の顔が引つ込み、また顔を出した。再び、姉弟の視線が交錯する。

「俺、誰にも言わないから」

それだけを姉に伝えた弟は、ドアを閉めて廊下の向こうに行ってしまった。

……うあああああああああああ！……！！

「うあああああああああああ——！！！！！」

弓は叫んだ。

ビニールの袋を閉めて、片手で掴む。窓を開け、網戸を開け放つ。できる限り振りかぶり、体中の力を片手に送る。そして、力いっぱい袋を投げた。

「うあああああああああああ——！！！！！」

袋は轟音と共に、空の彼方へ飛んでいき、豆粒になって見えなくなった。

それを見届けた弓は、網戸を閉めた。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

体中が熱い。心臓が激しく鼓動し、息が自然と荒くなる。全身から力が漲ってくるのが分かった。

「はあ、はあ、はあ……はあ？」

袋を掴んでいた手に視線を下ろす。途端、荒くなっていた弓の呼吸が止まった。それくらい、弓は驚いた。

「……なんだ、これ？」

なめらかで光沢のある黒い何かが、腕全体を覆うように広がっていた。それは指先まで広がっていて、二の腕、手の甲、爪、それらに何か鋭いものが生えていた。まるで腕に牙が生えたみたいだ。弓はそう思った。

……これは？ 弓は首を傾げた。

片手を伸ばして黒い部分をさする。黒い部分は見た目どおり、と

てもなめらかだった。擦られた黒い部分から、触られている感触が伝わってくる。まるで素肌を触っているような感触だ。

黒い部分を軽く摘んでみる。思いのほか硬いが、摘まれた感触が伝わってきた。さらに力を込めると、さらにはつきり伝わってきた。

「……もしかして、これは私の皮膚なのか？」

そうとは思えなかった。呟いたおかげで、さらにその考えの信憑性が高くなったような気がした。

黒くなった腕を眼前に持っていき、満遍なく観察する。鋭く尖った部分を見れば見るほど、動物の牙がそのまま生えているように見えた。

「いったいどうなって……ん？」

変化はあっという間だった。

腕に広がった黒い何かが瞬く間に薄く、欠けていき、数秒で見慣れた腕に戻った。

その腕で、頬を抓った。とても痛い。離すと、抓んだ頬が少し熱くなっていた。

「これは何の冗談だ？」

弓の独り言に答える人はいなかった。

それぞれの始まり：マリア編

マリアは額に載せていたタオルを外し、深く息を吐いた。体中の倦怠感も収まりをみせ始め、そろそろタオルも鬱陶しくなってきたからだ。

「ふう、そろそろ具合も落ち着いてきました」

太陽が沈み、部屋の照明が必要になってから数十分。具合も良くなってきたので、無理をしない程度に身体を起こす。

輝くような金髪が揺れ、フワリと艶やかな香りが広がった。

ベッド脇に置かれたテーブルの上にある時計を見ると、時刻は19時30分過ぎを越えていた。側には水が入ったコップが置かれていた。装飾がとても美しい。

かれこれ、一日中横になっていたのですね……皆には悪いことをしてしまいましたわ。

マリアは苦笑した。

「まさか貧血で倒れてしまうなんて……お恥ずかしい限りです」
最初に倒れていたマリアを見つけたメイドの悲鳴は、今も耳に残っている。朦朧としていた意識が一瞬で覚醒してしまうくらいの大声だった。

そのメイドの悲鳴を聞きつけた人達が、次々駆けつけてくるのもある意味爽快感はあったが、少し怖くもあった。

あつという間に十数人のメイドが集まり、全員の手でベッドに戻されると、すぐその後に関親が駆けつけてきて、泣くわ、騒ぐわ、大騒ぎ。常駐していた医師に飛びかかったときなど、思わずベッドの中でため息をこぼしてしまったものだ。

幸い、軽い貧血によるものと分かったものの、これが重病だったらどうなっていたのでしょうか。

クスツと、マリアは笑みを手で隠した。

恐らく、あの夢が原因なのでしょうね。

マリアはテーブルの上にあるコップを手に取り、ゆっくり飲んだ。思いのほか身体は水分を欲していて、あっという間に飲み干してしまった。

「ぶはぁ……全然飲み足りません……それにしても、嫌な夢でしたわ」

なんと言っても、体中の血を吸われる夢なのだ。それも肩を何者かに噛まれ、直接吸われるのだ。痛みは現実のようにありのままで、本当に現実かと思っってしまったくらいだ。

おかげで頭を乗せていた枕も、ベッドシートも、お気に入りのタオルケットも、全て寝汗でびしょ濡れにってしまった。

それが原因で、軽い脱水症状になってしまった。カーテンを開けて朝の日差しを浴びた途端、マリアは崩れ落ちるように倒れたのだ。たぶん、すぐその後助けてくれたのだろうね。

マリアは後で礼を言っておこうと思った。といっても、学生ではない自分が出来ることなど、言葉によるお礼しかないのだが。

……………ん？

ふと、マリアはパジャマの胸元を摘み、臭いを嗅いだ。寝汗で濡れてしまったので、今着ているのは別のパジャマだ。

「……けっこつ、臭いますね。シャワーくらいなら、許してもらえるかしら？」

空調がしっかり機能しているので、一度汗が引いてしまえば、最低限の量の汗しかかかない。なので、パジャマ自体は臭っていない。どちらかといえば、体の方が臭っていた。

もしかしたら、許してもらえないかもしれない。マリアの脳裏に、両親のことが過ぎった。

……許してもらえないかもしれません。

それでもシャワーくらいは浴びたいと思った。

どうにかして、許してもらえないでしょうか。

マリアはコップをテーブルに置き、出入り口のドアへ向かった。

結論、どうにかまりました。

そのかわり、お粥を食べてから1時間後という条件付きだった。正直、お粥よりも何か飲み物が欲しかったけれど、我慢してお粥を食べることにした。

自室のベッドに腰掛けて待っていると、控えめなノックが室内に響いた。

「どうぞ」

背筋を正し、入室を許可する。すぐさま、メイドが部屋に入ってきた。

「失礼致します」

メイドは一礼すると、すぐに踵をひるがえして、キャスターが付いた台を押して入ってきた。その上には大きな土鍋と小さな椀、水差しと汚れ一つないコップが置かれていた。水差しの表面には水滴が付いていて、傍目にもよく冷えていることが分かった。

ゴクリと喉が鳴った。そこで初めて、自分が思っていたより喉が渴いていることを、マリアは知った。

メイドは音を立てないように、それでいて足早にマリアの前まで来ると、再び一礼した。

土鍋の蓋が開けられる。途端、暖かい蒸気が天井まで上って消えた。一部始終を見つめていると、その間にメイドは椀にお粥をよそい、コップに水を注いだ。

マリアはコップを掴み、水を一気に飲みした。淑女として、はしたない行為と思いながらも、今は喉の渴きを潤したかった。

最後の一滴まで飲み干し、コップをテーブルに置く。素早くコップに注がれる水差しの水。水と水がぶつかり合う、心地よい音がマリアの耳に届く。

水差しとコップの水橋が途切れると、間髪を入れず、再び一気に飲みする。

ものの数秒でコップの水を飲み干し、ため息をこぼした。またコ

ツプに水が注がれるが、さすがに3回も手を付けると肝心のお粥が食べられなくなってしまいそうだ。

「いただきます」

両手を合わせ、いただきます。食事の際のマナーであり、作ってくれた農家への感謝の気持ちを表した素敵な言葉。マリアはこの『いただきます』という一言が好きだ。

スプーンを使って、椀に入ったお粥を口に運ぶ。人肌程度に温められたお粥は、ほんのり塩味が効いていて、なかなか美味しかった。顔を上げると、メイドの一人が不安そうに佇んでいた。

もしかしたら、私がまた具合が悪くなるのを心配しているのかしら？

そうだったら、彼女に申し訳ない。彼女にも残された仕事があるだろうし、なにより体調は快方に向かっている。これくらいのことなら、手を貸してもらおう必要はない。

「もう下がっていて結構ですよ。これくらいなら、一人で食べられますから」

そう言うのと、メイドはまだ不安そうにしながらも、一礼して部屋を後にした。

静かな沈黙が訪れた。お互い、会話らしい会話をしていなかったが、それでも一人になると、妙に寂しく感じた。

一人で食べるというのも、久しぶり……ああ、喉が渴いた。

口に含んだお粥を飲み込み、コップに手を伸ばす。喉を鳴らし、一気に飲み干す。

はあ、大きいため息を吐いて、テーブルにコップを置いた。

「どうしたのかしら、喉が渴いて仕方ないわ」

不思議に思いながらも、水差しからコップに水を注ぐ。もう、お粥を食べようとは思わない。今はただ、喉の渴きを潤したかった。

四杯目の水を口に含みながら、水差しに入った残りの水の量を見つめた。

受け入れる人、受け入れられない人：里里編

切掛けは、夜の公園での練習のときだった。

両親が寝静まった深夜、こっそり家を抜け出して公園に向かったときの話。

里里の密かな努力により、有線式ロケットパンチは1週間ばかり練習を繰り返すことで、ある程度使いこなせるようになった。同時に、このロケットパンチは思っていた以上に優れたものであることも分かった。

まず、威力の強弱を変化できる。玩具の豆鉄砲みたいな速度から、目にも止まらない速度で打ち出すことができた。しかも腕の強度はとてつもなく硬く、どんなに速く発射しても平気であった。

次に、軌道を変えることができる。発射された腕から伸びた四つの棒から、新たに青白い光を放つことで、軌道を自由に変えることができたのだ。何度か光に手をかざしてみたが、全く熱くなかったのは不思議だった。

最後に、射程距離が長い。里里は初め、部屋の中で測った。腕は取り外しが可能で、意識すれば考えるだけで勝手に腕が外れた。

そうやって測ってみると、これが長い。青白い紐は引っぱった分だけ伸び、とうとう部屋を紐で埋め尽くしても最後まで測りきれなかった。

そうやって使いこなしていくと、もっと上手に使いたいと思うのは、ある意味当然だった。もっと広いところで、もっと複雑な練習をしたいと思い、考えたのが深夜の公園を利用した練習であった。

といっても、たいしたことはしていない。適当な空き缶やらペットボトルやらを拾ってきて即席の的を作り、それをロケットパンチで打ち抜くという単純な練習である。

だが、里里はこれに夢中になった。毎日部屋の中で同じ作業をしていたので、たとえ単純な練習であっても、多少の変化が分かるこ

の練習は、とても楽しく思えた。

実際、練習を繰り返す度、ロケットパンチを使いこなせている、
そう実感できた。

「ありや、引っ掛かった」

いつものように空き缶をロケットパンチで打ち抜いていたとき、
そのうちの一つが偶然にも近くの木の方に飛ばされてしまった。枝
に引っかかってしまい、落ちてこなくなってしまった。

ロケットパンチで空き缶を取ろうにも、それでは木の枝を粉碎し
てしまう。かといって、見捨てておくには、どうも落ち着かない。
着ているジャージで引っ掛けて落とそうにも、高さが微妙に足りな
い。楽しかった気分が一転し、なかなか取れないもどかしさと、苛
々が募ってくる。

そして数十分が過ぎた頃、里里の苛々は頂点に達した。

「ああん、もう。ロケットパンチが付いているんだから、ロケット
ブースターがあってもいいじゃない！」

地団太を踏み、八つ当たりの意味を込めて、残った空き缶をロケ
ットパンチで打ち抜いた……直後、背中のジャージが破ける感触が
した。

瞬間、里里の頭から怒りが消えた。振り返るってみても、後ろに
は誰も居なかった。

「……あれ？ 何か破れたような……ああー！」

背中にも手を回すと、確かにジャージに穴が開いていた。しかも、
穴が開いているらしき中心部を探てみると、指先に何か硬い感触
を覚えた。

同時に、背中の一部から触られている感触が伝わってきた。

「……これって、もしかして……」

さらに探る。ツンツン、スリスリ、とにかく触る。

だが、だんだん腕が痛くなってきた。何かがある位置が、これま

た微妙に手が届きにくい場所で、指先が少し触れるか触れないかの絶妙な位置だった。

腕の痛みも限界に達した頃、里里は現実を受け入れることにした。「何か生えているよ!？」

里里は背中に何か生えていることを認識した。

同時に、里里の耳に効きなれた駆動音が届いた。そう、ロケットパンチを放つときと同じ駆動音が、背中から聞こえてきた。

瞬間、ソファアを壊したときの出来事が走馬灯のように頭に浮かんでくる。

「ちょ、ちよつと待って、これって、これってもしかして!？」

慌てて、頭の中で止まれと、強く念じた。

すると、背中の何かは里里の意思に応え、ゆっくり静かになった。

……あぶなかった。

突然の悲劇を未然に防げた里里は、思わず、その場に座り込んだ。

緊張が解けて、立っていられなかったのだ。

それにしても、これ……。

背中に腕を回す。指先に感じる硬い感触。

「ジャージ破っちゃった」

けっこう着心地良かったのに。

項垂れた里里の頭に、引っかかっていた空き缶が落ちてきたのは、すぐ後のことだった。

……羽? いや、どちらかというと、翼かな。

鏡に映った背中の何かを一言で表すと、そんな感じであった。

肩甲骨の辺りから飛び出した一対の翼。例えるなら翼を機械で再現したような外観であった。

骨組みとなる、への字に曲がった太い金属。連なる形で左右三つずつ噴射口のような砲身があり、体から一番遠い部分には一番大きな噴射口が取り付けられていて、計、四つの噴射口が翼の形にそっ

て、背中から生えていた。

「まるでロケットブースターの翼ね」

想像してみると、思いのほかイメージが似ていた。

試しに、戻れと念じてみる。

すると、翼の骨組みが一直線に伸び、つられて噴射口も一直線に重なる。スルスルと、音もなく、体の中に納まっていく。

完全に翼が体の中に埋まると、カチン、と固定された。すると、開いた穴の縁から皮膚が伸び、一瞬で穴が塞がれた。少し段差が出来たが、すぐに皮膚が浮き上がって平らな背中になった。まるでガレージみたいだな、と里里は思った。

「……なんか、皮膚が動くのって結構気持ち悪いわね」

今度は逆に背中の翼が出てくるようイメージする。

すると、さつき穴が開いていた場所が円形に凹む。カシュン、と乾いた音と共に開かれる。中から収納されていた翼が飛び出し、一瞬で翼の形を取った。

出すのは速いのか……これ、本当に飛べるのかな？

「……ちよつと試してみようか」

洗面所の電気を消し、足音を立てないように玄関に向かう。

途中、両親の様子を伺いに二人の寝室へ向か……おうと思ったが、止めた。今日は父が早く帰ってきた日だからだ。もう何度も嫌なことにランキングは体験したくない。

万が一靴を落つこととしてしまったら、下に居る人が危ないので、裸足のまま家を出る。

日中、熱せられたアスファルトも、夜半になるとひんやり冷たい。ペタペタと足跡を残しつつ、家から数歩の道路で立ち止まる。

目で、耳で、辺りの様子を窺う。時刻は深夜を回り、住宅街には虫の鳴き声しか聞こえない。人の気配は全くなかった。

よし！

里里は気合を入れて、翼に意識を集中させる。

途端、翼に付いている四つの噴射口から、青白い光が点る。かす

かな駆動音が里里の耳に届き、それがどんどん強くなっていく。

「里里、行きます」

冗談半分に里里は格好付けてみた。

刹那、里里の身体が浮き上がると同時に、里里は真っ黒な夜空の彼方へ向かって飛んだ。そして、瞬く間に夜の闇に姿を消した。

最初に感じたのは、全身を襲う凄まじい衝撃だった。

もしかしたら、ここで死ぬかもしれない。

眼前に広がる雲の平原を見て、里里は後悔した。

「うおおおおあああ——！！」

数秒で音速の壁を突き破り、衣服が衝撃波でズタボロになってしまった。気づいたときには、ジャージもブラもショーツも全て空の藻屑になっていた。

「ひやあああああ——！！」

雲を突き抜け、風を切り裂き、音の壁を余裕で追い越す速度で空を飛行していく。

月と星の輝きが、里里の裸身を照らした。

2次元から、3次元。前後と左右、そこに上下が追加されたため、初めは右に左に上下に、無茶苦茶に飛び回った。背中の翼へ意識を集中し、必死に翼を操縦する。

最初は右の翼を制御しなくちゃ！

右の翼に意識を集中。右の翼が前に回り、噴射口を前方に向け、青白い光を放出した。

途端、里里の身体は凄まじい速度で旋回した。

「うひひひひ——！！」

夜空に里里の悲鳴が木霊した。

体がバラバラになりそうだわ！ 次は左の翼を……。

遠心力で四肢が千切れそうなくらい引っ張られながらも、今度は左の翼に意識を集中。左の翼も、右と同じようにする。

同時に、右の翼の出力を押さえるよう指令を送る。一刻も早く旋回を止めないと、色々なものを放出してしまいそうだった。

里里の思惑は上手くいき、徐々に旋回は収まった。完全に静止した後、翼を下方に向けてから、そのまま出力を一定に保つ。

上手く制御できず、前方に移動しつつではあったが、不完全ながらもホバリング飛行することができた。

「な、なんとか……うおおえええ、目が……回る……ぎ、ぎばちわるい……」

だが、ダメージは大きく残った。里里は片手で口元を押さえて、必死に吐き気を堪えた。

はるか上空、雲よりも高い宇宙と空の間を、里里は漂っていた。いや、飛んでいた。

目を回したり、素っ裸になったり、様々なハプニングに見舞われながらも、里里は瞬間に飛行技術を習得していった。

落ち着いて飛行してみると、なんと身体を舐めていく風が心地よいことか。

里里は両手を広げ、風を感じながら思った。

だが、普通感覚からいえば、里里の飛行している場所を心地よいとは言える場所ではない。里里の飛行している場所は高度数千キロメートル近い場所である。

体感温度は余裕で氷点下を下回り、普通なら数分で命の危険が訪れてしまう程の極寒の世界なのだ。

里里も、高度が高くなり、気圧が低くなるにつれ気温が下がるのは知っている。普段から引きこもってネットサーフィンをしているのは伊達ではない。

けれども、里里はすぐに、まあ、気にしたって仕方ない、と考えることにした。

ふと、風の中に紛れた爆音が、里里の身体にぶつかってきた。耳を澄まし、辺りを探ると、すぐ下の方から聞こえてきたのが分かった。灰色の雲の中に、黒い影が見えた。

なんだろう？

首を傾げつつ、黒い影を見つめる。即座に四角い照準が黒い影を包み、拡大表示された。

「うわ……でか」

里里は驚きに呆けた。里里の目には、世界中を飛び回り、毎年数十万人から数百万人を乗せているという空の旅客機、通称ジェット機が映っていた。四つのジェットエンジンが爆音を空に轟かせていた。

ふと、里里は考えた。いったい自分はどれくらいの速度で飛行できるのか。

同時に、里里は思った。今の自分はジェット機より確実に速く空を飛んでいる。

事実、里里はこの図体が大きいジェット機よりも、数倍速く空を翔ることができていることを、感覚で知っていた。その気になれば音速を余裕でぶつちぎる里里にとって、ジェット機はあまりに遅く飛んでいるように見えた。

「最大スピードで飛ぶのはまだ無理があるけど、ジェット機より早く空を飛べれば十分だね。飛行技術を向上させることができたし、経過は上々」

眼下を飛行する大型ジェット機を見つめながら、里里はちよつと驚かしてやろうと思った。さっそく身体を曲げ、噴射口を上方へ向ける。

一瞬の溜めの後、青白い光を輝かせながら、里里の身体はジェット機へと加速した。その距離が200m、50m、10m……そして、ジェット機の上に静かに着地した。

出力をジェット機に合わせて、風に飛ばされないように補助する。

冷たいジェット機の装甲を感じながら、里里は叫んだ。

空を飛ぶって、素晴らしい！

「うっひよ——！ きつもちいいいい——！！！」

里里の絶叫が、夜空に広がった。

「すっごい！ これ、すっごい！ マジ最高だ——！！」。

ジェット機は灰色の雲に頭から突っ込み、雲の糸を引いて飛んで行く。雲を抜けると、星の淡い光が機体を照らし、幻想的な美しさを見せた。

翼の出力を上げ、機体から離れる。ジェット機と平行を保ちながら飛行し、衝撃を与えないよう優しくジェット機の左翼に着地した。横を見ると、ジェットエンジンが激しく燃料を内部で爆発させ、推進力を生み出していた。近くで見ると、とてつもない迫力がある。うーん、飛行機の中ってどうなっているんだろう？

一度も飛行機に乗ったことがない里里は、強い興味を覚えた。

ペタペタと素足の足跡を翼に残しつつ、ジェット機の窓に近づく。顔を近づけて中を確認すると、幼い女の子が寝ていた。奥に女の子の父と思われる男性が、その奥に母と思われる女性が寝ていた。

窓ガラスに頬をくっつけて、さらに中の様子を窺うが、暗くてよく見えない。すると、視界上から緑色の線が降りてきた。線が視界から消えた頃、飛行機の中は、まるで昼間のように明るく見えた。

「……望遠に暗視か、自分でもなんだけど、便利な目だ」

せっかく見えるようになったので、中を覗く。里里の側に3席、中央に5席、奥に3席といった具合に席が並び、それが縦にも並んでいた。

「思っていたよりも、飛行機の中って狭いのね……ん？」

視線を下げると、先ほどの女の子が目覚まし、里里をじっと見上げていた。眠気が取れていないらしく、何度も目を擦っている。

起こしては可哀想ね。

軽く手を振ってあげると、女の子も寝ぼけながら手を振り返した。窓から離れて翼の出力を上げる。里里の身体はあっさり空へ飛ん

だ。

そのまま一気に速度を上げて、ジェット機先端へ向かう。あつという間にジェット機を追い越すと、すぐさま反転。後ろ向きのまま並走する。

ガラス向こうのパイロット室が囲まれ、大きく拡大される。中には中年の男性と、年若い男性が運転していた。

さらに中を見ると、里里にはどれがどの計器なのか分からないくらい、様々な計器が所狭しに並べられていた。

なかなか、パイロットって大変な仕事なんだ……。

感激の思いで見つめていると、年若いパイロットと目が合った。

あ、やば。

年若い男は目を見開き、隣の中年男の肩を叩き、こちらを指差した。

里里とパイロット室との距離は30m程度。見ようと思えば余裕で見える距離だ。

最初は鬱陶しげにしていた中年男も、指差された方を見ると、目の色を変えた。

なんだか騒がしい事態になりそうなので、退散することにした。

「それじゃあね」

軽く手を振って、一気に加速して地上へ向かう。最後までパイロット二人はこちらの姿を凝視したままだった。

……………？

不思議に思いながらも、里里は家に帰った。

幸いにも家に到着したとき、まだ5時だったので、両親は起きていなかった。気づかれないよう二階の自室の窓から中に入り、中から家の鍵を閉める。

はあ、楽しかった……シャワーでも浴び……。

起きてくる前に、シャワーでも浴びようと、翼を収納した瞬間、

里里は気づいてしまった。というより、思い出してしまった。

ゆっくり、視線を下ろすと、膨らみかけの乳房と、なだらかなお腹が目映った。

「……そういえば私」

顔中……それからどこから、体中が燃えるように熱い。そして、それ以上に湧き上がってくる羞恥心。

「裸だったんだ……」

ということは、あの二人は裸の私に驚いたの！？

声無き悲鳴をあげて、自室に飛び込むと、そのまま崩れ落ちるようにベッドに倒れた。

結局里里は、お昼過ぎまでベッドから出てくることが出来なかった。

受け入れる人、受け入れられない人：弓偏

弓が図書館から帰ってきたとき、家には誰も居なかった。何か食べるものはないだろうか。

弓は空腹を訴える腹を撫でつつ、冷蔵庫を開けて、中を覗きこんだ。中には各種調味料、バター、マーガリン、漬物等その他、奥の方にヨーグルトが置いてあった。

ヨーグルトか……まあ、ないよりましか。

ヨーグルトを取り出し、冷蔵庫を閉める。フワリと冷気が舞った。スプーンを取り出しつつ、ヨーグルトの賞味期限を確認する。容器の底に、2週間前の期日が印字されていた。

……2週間か。微妙なレベルだな。

蓋を開けて臭いを嗅ぐ。鼻腔に、ヨーグルトの甘い香りが広がった。

「匂いは問題なし」

なみなみに満たされた白いヨーグルトの中に、スプーンを差し込む。一口分をすくい、おそろおそろ口に運んだ。

口腔に広がっていくヨーグルトの香り。特有の甘さと瑞々しさから押し寄せ、最後に申し訳程度に、酸味が届く……はずだった。実際は、甘さよりも、瑞々しさよりも、香りよりも先に、強い酸味が脳天を貫いた。

弓は速やかに腐ったヨーグルトを生ゴミ用の袋に入れ、洗面所に走った。

洗面所に辿り着くとすぐに栓を捻る。蛇口から大量の水が出てくるのに合わせて、口の中の液体を全て吐き出した。

「ごほ、ごほ、ごほ……んん……ぶはあ」

そのまま手で水をすくい、口の中をすすぐ。何度も何度もすすいだ後、水を含んだまま顔を上げて、うがいをする。一応、念のためだ。

はあ……痛んでいたか。

栓を閉め、水を止める。備え付けられているタオルで口元を拭い、台所へ向かう。

腹が盛大に食べ物求めて合唱した。弓は眉をしかめて、腹に手を当てた。気休め程度ではあるが、空腹が和らいだような気がした。「ちつくしょう……腹減ったな……」

ここ最近、妙に腹が空く。食べても食べても、すぐに空腹感が訪れる。少なくとも、家で一番食欲がある弟の倍近く食べているのだ。

もしかしたら、何かの病気か？

一瞬、そんな言葉が頭を過ぎったが、すぐにそれは違うと思った。「理由があるとすれば、これか」

右手に意識を集中させると、その手が変化を起こし始めた。

瞬く間に黒い皮膚が盛り上がり、元の白い肌を覆い隠していく。

一瞬で弓の右手は、鋭い爪が生えた異質なものになった。

さっきまで丸く整えられていた五つの爪は、黒い皮膚に覆われると、全て猛獣の牙のような鋭さを持ったものになり、手の甲にも幾つか小さな棘が飛び出していた。

さらに右腕、上半身、全身へと、意識を集中させる。

黒い皮膚は弓の意思に従い、全身へと広がり、着ている衣服も飲み込まれていく。

女性らしかった長い手足が凶器へ変わる。手足の爪が鉤爪のように鋭く研ぎ澄まされ、肘に、肩に、プロテクターのように鋭い突起が生えていく。

髪も銀色に変わり、お尻の辺りまで伸びる。お腹の一部や背中の一部、胸元から上を除く部分が黒い皮膚に包まれた。

その姿は、装飾を施された薄い黒鎧を着ているようにも見え、あの日の夜、弓の前に現れた獣の姿に似ていた。

「いったいこれは何だ？ 図書館で調べても、こんな病気は見付からなかったぞ」

気づいたら、いつのまにかこの姿に自由になれる自分が居た。人が自然と息を吸うように、眠いと思ったら欠伸をするように、自然とこの姿になることができた。

最初は、病気と思った。皮膚病に関する医学書はもちろんのこと、オカルト、ホラー、SF、果てはオーラパワーとかいう本まで読み漁っても、弓の知りたいことは書いていなかった。

結局、図書館では見つからなかった。

台所に足を踏み入れると、足音が重く台所に響いた。

視線を下ろすと凶悪な外観に変わり果てた両足があった。爪先がフローリングの床をわずかに傷つけていた。

胸の奥で、何かが蠢いた。

「――っ！ 違う、私はそうじゃない！」

慌てて頭を振って、心に湧き上がった思いを振り払う。

弓の体が再び変化を起こす。そのまま時間が戻されているように、さつきとは逆の順序で黒い皮膚が消え、欠けて、無くなっていく。ものの数秒で、弓は元の姿に戻った。着ていた衣服も、元通りになっ

ていた。深くため息を吐き、台所の椅子に腰掛け、テーブルに体重を預ける。ふと顔を上げると、テーブルに一冊の週刊誌が置いてあった。

『恐怖！ 空を飛ぶ少女の幽霊！？』

週刊誌の表紙には、そんな文字が大きく印字されていた。

恐らく、弓の父親が買ってきたのだろう。普段の弓なら読むとは思わなかったが、気分転換代わりに、弓はそれを手に取って表紙をめくった。

「なになに……パイロットは見た、高度6000キロメートルを飛ぶ、裸の少女……はあ？ なんだ、こりゃ？」

興味を引かれた弓は、さらに続きを読むことにした。

「なになに、成田行きの……」

なになに、成田行きのジェット機を操縦していたパイロット二人が、空を飛ぶ少女を見た。時刻は深夜四時52分の出来事だった。

件の少女はパイロット二人と目が合うと、フラッと姿を消した。少女は一切服を着ておらず、背中に翼のようなものを生やしていたとのことだ。

「まるで怪談のような話だ、パイロット二人は強いショックを受けて、カウセリングを受けている……」

ざっと最後まで読み通した弓は、そのまま週刊誌を閉じた。頭の中で、だいたいの内容を整理する。

始めは二人の話を聞いた人達も笑い飛ばしたらしく、少女の話はただの怪談話になるはずだったのだが、数人の乗客がその少女の姿を目撃していたらしく、苦情が届いた。

しかも、乗客の女の子がその少女と挨拶をしたらしく、嘘か真か、どうやら本当の可能性も出ているみたいだ。

ふと、気になった弓はリビングに向かい、テレビを点けた。そのままチャンネルを切り替え続ける。

5回目で、少女の特集をやっている特別番組を見つけた。

テレビの前に座って、観賞する。番組では司会者と専門家と特別ゲスト、なぜか漫画家の人が出ていて、その人達が熱く討論していた。

『おそらく、これは幽霊でしょうね』

評論家が、力強く言い放った。

『馬鹿な、飛んでいる飛行機の外ですよ。今まで海とか山とか廃墟とかなら、まだ聞いたことはあります。ですが、飛行機の幽霊話なんて聞いたことはありませんよ』

対して漫画家は、妙に力ない様子だ。

『それでは、貴方は幽霊の存在を信じないんですか？』

『そうは言っておりません。ですが、あまりに非常識的で……』

『それをいうなら、幽霊事態、ある意味非常識的でしょう。実際に見たという証言がある以上、少女の幽霊は実在すると思った方が無理です』

『でも、どうして飛行機に現れたのでしょうかね』

特別ゲストの女性が、専門家に尋ねた。

『自爆霊とか悪霊って、何か場所や物にとりつくって聞いたことがあるんですけど、この場合は飛行機でしょ？ 中に現れたのではなく、外に現れた場合は、何にとりついていたのでしょうか？』

特別ゲストの意見に、専門家は膝を叩いた。

『そこです、そこが唯一腑に落ちない点なのです。私も数々の心霊体験を聞き、時には自ら心霊体験を経験しました。私の経験から考えますと、もしかしたら彼女は浮遊霊かもしれません』

『浮遊霊、ですか？』

司会者が専門家の言葉を復唱する。専門家は頷いて、続きを話し始めた。

『浮遊霊とは、自縛霊とは違い、あらゆる場所、あらゆる時間帯に姿を現す幽霊です。もしかしたら、パイロットのお二人はその浮遊霊を、運悪く目撃してしまったのかもしれない』

くだらない。

弓は立ち上がってテレビの電源を切り、自室に向かった。

受け入れる人、受け入れられない人：マリア編

喉が、喉が渴く。誰か、この渴きを止めて！

ベッドの中で、マリアは枕に顔を埋めて、胸の内を叫んだ。

部屋の中は異様な雰囲気だった。照明は全て落とされ、全てのカーテンを閉めた部屋は、昼間だというのに、夜のように真っ暗だ。シーツの中から顔を出す。ベッド脇に置かれたワゴンには、空になったスープの皿と、空になった大量の水差しが置かれていた。

手を延ばし、水差しを一つ手に取る。軽く振っても、水が跳ねる音もしなかった。

ため息を吐いて、水差しを元に戻す。

再び枕に顔を埋める。その肩は小さく震え、静かな室内にマリアの嗚咽が響いた。

「私はどうなってしまったの？」

くぐもった声で、マリアは自問した。

体調を崩した日から、常に襲い掛かってくる強い渴き。始めは我慢していたマリアも、徐々に酷くなっていく渴きに我慢できず、家で、学校で、習い先の教室で、浴びるように水分を補給し続けた。

飲み物と名のつくものなら、何でも飲み干した。

それでも、マリアの渴きが治まることはなかった。そのことが両親の耳に届く頃には、一日に10リットル近い量の水分を取っていた。

このままでは何かしらの影響が現れ、命の危険がある。医者の診断を受けた両親はマリアを自室に軟禁したのは、すぐ後のことだった。

その日から、マリアの生活は一変した。隙あれば水を飲もうとするマリアに対する、苦肉の策であった。

病院へ入院させる手もあったが、それはマリアのためを思って止めた。外に行けば、喉の渴きを潤すものがいくらでも存在するから

だ。もちろん、飲ませるわけにはいかないが、生殺しをさせるのも心が痛む。そこで考えた手段が、軟禁であった。

必要なものは全て屈強なボディガードが運び、トイレやお風呂に向かうときも、最低二人の24時間態勢の監視の中で、マリアは日々を送っていた。

「喉が、喉が渴きます」

だが、それも限界を迎えようとしていた。

誰でもいい、誰でもいいから、水を！

マリアはベッドから抜け出し、足をもつれさせながらも出入り口のドアへ向かう。

倒れこむようにドアにしがみつくと、ドアを激しく叩いた。

「誰か、誰かいませんか！？」

「……お嬢様、何か御用でしょうか？」

ドアの向こうから聞こえた声に、マリアは喜んだ。少し掠れていて、年老いた男性の声……マリアが生まれたときからマリアの世話をしていた、召使の一人だったからだ。

忙しい両親に代わり、世話し続けてきた彼を、マリアはお爺さんのように思い、慕っていた。それは今も変わっていない。

彼なら、水をくれるかもしれない。マリアは期待を込めて彼に催促した。

「お願い、喉が渴いたの、水をください」

「……申し訳ありません、お嬢様、そればかりは……」

だが、彼はマリアの願いを受け入れなかった。

驚いたマリアは、ドアを強く叩き、再度水を催促した。

「お願いします、水を、水をください！」

「なりません、お嬢様」

「喉が渴くのです！ 渴いて、渴いて、頭がおかしくなりそう……コップ一杯、ううん、一口だけでもいいのです。水を飲ませてください！」

「……申し訳ありません、お嬢様。これはお嬢様のためなのです」

ドアの向こうでマリアの悲鳴を聞いていた本郷源一郎は、マリアの様子に人知れず、涙を流した。彼も辛かった。

長谷川家に仕えて四〇年。生涯独身を決め、誠心誠意を込めて長谷川家を支えてきた源一郎にとって、マリアは実の娘のような存在だ。

「お嬢様のためなのです」

ドアの向こうにいるマリアの悲鳴を聞きながら、源一郎はただ項垂れる。

目を閉じれば、幼い頃のマリアの姿が走馬灯のように広がる。

マリアが悪戯をして両親に叱られた後、こっそりお菓子を持っていたこと。

夜、両親が不在の寂しさに耐え切れず、枕を抱えて自室にやってきたこと。

ピアノのコンクールで優勝したときの優雅さと美しさに、何度涙を流したか。

自分の腰にも届かなかった幼子が、いつしか腹回りまで届くようになり、いまや肩口まで届いている。マリアとの日々は、源一郎にとって矢のように早く過ぎた日々であった。

マリアお嬢様のためならば、この源一郎、老骨に鞭打って盾となり、矛となる決意があります……ですが、ですが。

源一郎は涙を堪えることが出来なかった。一滴、また一滴、絨毯が敷き詰められた廊下に、涙が落ちていく。

助きたいのに、できるならば、その苦しみを代わってやりたいのに、何もできないもどかしさが、これ程に辛いとは！

「お願いします、お願いです、源一郎……ほんの少しだけでよいのです。ほんの少しだけで……お願いです……」

ドアを叩く力がなくなってきたのか、次第にドアのノック音がおさまっていく。声も掠れていて、力がなかった。

ドア一枚挟んだ先に、愛しい娘が助けを呼んでいる。しかし、答えるわけにはいかない。娘の苦しみを一時的に和らげるだけで、結

果的には娘の命を危険に晒してしまうから。

「……も、申し訳ありません、お嬢様……！」

源一郎はただ、頭を下げて謝ることしかできなかった。握り締めた拳から血がにじみ、絨毯に落ちていった。

血の匂いだわ！

鼻腔に香る濃厚な血の匂いに、マリアは一瞬意識を飛ばした。頭の中が真っ白になって、喉の渴きが最高潮に達する。

血だ、血の匂いだ、源一郎が血を流しているんだわ！

腕を振りかぶり、力を込める。途端、真っ暗な室内に、変化が現れた。

マリアの足元を中心に、真っ暗な室内より黒い影が広がる。それが瞬く間に部屋中を覆っていき、ドアの隙間から、廊下にいる源一郎のもとへ……。

——っ！？ 駄目！

「駄目！」

向かう途中で、マリアは我に帰った。部屋中に広がった影はマリアの下へ逆流し、室内に元の暗闇が戻った。

瞬間、マリアは全速でベッドに飛び込んだ。スプリングが悲鳴をあげ、枕が宙を舞ったが、マリアは構わずシーツの中に隠れた。

完全な暗闇の中で、マリアは自分の心臓の鼓動を聞いた。壊れてしまったのかと思うくらい、激しく鼓動し、全身に血液を運んでいる。

悪寒と共に噴出した冷や汗が、そんなマリアの心を凍りつかせた。

「……今……何を……？」

私は何をしようとしたの？

目を硬く瞑り、ひたすら今さっきの出来事を忘れようとするが、できなかった。

「私は……源一郎を……」

殺そうとしたの？

……いいえ、違う。

ゴクリと、喉が鳴った。途端、マリアに襲い掛かってくる強い渴き……いや、マリアはもう、この感覚が何なのか気づいていた。

これは、そう、これは……飢えだ。

「血を……飲みたいと思った？ 源一郎の血を？」

マリアの脳裏に、甘美な妄想が生まれる。

祖父のように思っている源一郎の首に噛み付き、血を飲み干す自分。

屋敷中に影を這わし、屋敷の住人を全員捕まえていく自分。

泣き叫んで命乞いするメイドの腕に噛み付き、抵抗するボディガードの心臓を貫く。血で濡れた手に舌を這わせる自分。

そして、驚愕の眼差しを向ける両親を捕まえ、ゆっくり首筋へ牙を……。

震える身体をなんとか押さえつけ、マリアはそつと口元に指を這わせる。軽く口を開き、八重歯がある部分をさする。

そこには、他の歯の倍以上に伸びた犬歯が……牙があった。

「違う！ こんな私じゃない！」

マリアは頭を振って、妄想を、現実を振り払った。だが、欲求はどんどん強く、大きくなっていく。

夢よ！ こんな悪夢、早く醒めて！

指を強く噛締め、必死に耐えて飢えを忘れようとする。

「ひゅふえ……ほへは、ひゅふえふあほ……」

牙となった犬歯が皮膚を貫き、肉を引き裂く。滴った血が、マリアの口の中に広がっていく。瞬間、マリアは本能的にその血を吸った。

……ゴクリ。マリアの喉が、小さく鳴った。途端、引いていく飢え。

これは夢、これは夢、明日になれば覚めてしまっわ。

……再び、マリアの喉が鳴る。さらに引いていく飢え。

そう、これは夢なの……。

マリアの喉が鳴る。さらに引いていく飢え。

自問自答して血を飲み込む。いつしか、マリアは寝息を立てていた。

ここ数日飢えて眠れなかったマリアは、久しぶりに訪れた平穏に、深く眠った。

指を咥えているマリアの顔は、幼子のように安らかで、世界中の幸せを独り占めしているみたいに微笑んでいた。

それぞれの日々：里里編

やばい、マジでやばい、本当にやばい、私がやばい、なんで、なぜ、それは、警官に、追われている、からさ、捕まったら、面倒、だからさ。

自問自答を繰り返しつつ、里里は走った。とにかく走った。人並み程度の運動神経を駆使して、両脚を動かした。はいているスカートがヒラヒラと風に揺れ、隠している部分をこれでもかと披露していると分かっていても、走るのを止めようとは思わない。

「待ちなさい、君！ こんな時間になにやっているんだ！」

背後から同じく走って里里を追いかける警察官達。幸いにも足はそんなに速くはないみたいで、なかなか里里との差は縮まらない。だが、なかなかというだけで、少しずつではあるが確実に距離が狭まっていた。

「こら、待ちなさい！」

待てと言われて素直に待つくらいなら、そもそも逃げません！

口に出すのも面倒なので、心の中でツツコミを入れる。

なぜ、このような事態になったか。それは、練習に夢中になるあまり、警官に見つかってしまったのだ。

いつもは、出来る限り物音を立てないようにしていた。少しでも人の気配を感じるものなら、すぐに隠れ、すぐに逃げた。

けれども、今回は迂闊だった。ロケットパンチの軌道操作の練習で、8の字ループなんてものを練習していたのがいけなかった。むきになるあまり、人の接近に気づかなかったのだから。

「待ちなさい！」

待たない！

振り返らずに走り続ける。同時に、数メートル後ろからこちらへ向かってくる足音も聞こえてくる。

せっかく両親に知られないように気をつけてきたのだ。仮に捕ま

つたら、まず外出していた理由を聞かれるだろう。けれども空を飛んで、ロケットパンチが放てるようになりましたので、ちよつと外で練習していました、などと言えるわけがない。

と、ふと、数十メートル先から、ポツリと光が見えた。

視界にある丸い照準を光へ向け、拡大表示。その光の正体がなんなのかを理解した瞬間、里里は自分の運を呪った。

「嘘、警官が二人も！」

慌てて方向転換、横道に入って路地裏を進む。後ろから感じていた懐中電灯の明かりは消えたが、まだ気配は消えていない。

「なんとかしないと、なんとかしないと……」

妙案が思いつくわけもなく、住宅地の隙間にある狭い路地を進んでいく。途中、野良猫やらペットボトルやらを避けて走る。

後ろを走る警官達は、何度かそれらの障害物に邪魔されて動きを止めているのが聞こえた。暗視機能がある自身の目のおかげで、明かりなしでも周りは明るく照らされた昼間のように見える。そのため、少しだけだが距離は稼げた。

逃げ切れる！

そう思った里里は、突き当たりを曲がって……。

「行き止まり！？」

そこには里里の身長より2倍以上高いコンクリートの塀があった。近寄って調べる。足をかけて登れそうな取っ掛けりも、隠れそうな隙間もなかった。

「どうしよう、空を飛んでいくにも万が一見られたら……ていうか裸まで見られたら嫌だし、でも見つかつてても嫌だし……」

必死に塀に足を引っ掛けようとするが、ツルツル滑って二秒も足を掛けていられない。

そうこうしている間にも、背後から声が聞こえてくる。

おい、どこ行った？

こっちしか道はないから、ここを曲がったのかもしれない。
真っ暗だな……。

こっちしか道はありませんし、急ぎましょう。

声が聞こえた。ドキリと、里里の心臓は嫌な悲鳴をあげる。足音も次第にはつきりと耳に入ってくる。

このままでは……見つかる！

せめてもの悪あがきに、塀の端に出来る限り身を寄せる。といっても、ただ通路の端っこに寄った程度でしかない。けれども、しいよりは安心する。

「……おい、行き止まりだ」

「なに、ほんとか？」

そしてついに、警官達が持つ懐中電灯が、里里のすぐ真横を照らした。

その光が徐々に里里の方へ近づいていき……里里を照らした。
「——っ！」

里里は両腕で顔を隠し、光の先、警官達を見据えた。

……里里にとっては何時間も時が流れたような無言の沈黙が続いた。警察官の視線と里里の視線が交錯する。

終わった……どんな言い訳をすれば納得してくれるかな。警察官の服って、夜でも結構目立つよね。あ、あの警察官、頬に絆創膏が……。そういえば、今日の夕飯なんだっけ。あれ、関係ないか。どこか麻痺した思考が、次々に色々な言葉を吐き出してくる。上手い言い訳を考えようにも、混乱した頭では何も浮かんでこない。そして、警察官はおもむろに口を開いた。

「……あの子、どこに行ったんだ？」

……一瞬、警察官の言葉が、里里には分からなかった。

「おい、そっちには居るか？」

警官の1人が、里里から少し離れた場所を探している警官に尋ねた。訪ねられた警官は首を横に振った。

「駄目だ……見当たらない。こっちには逃げていないみたいだ」

「どこ行っ たんですかね、ここまで一本道ですよ」

懐中電灯をぐるぐるあたりに向けている別の警官は、不思議そうに首を傾げた。

何度も、何度も、警官達が持つ懐中電灯の光が、里里を照らす。

だが、不思議なことに誰一人里里に気づいた様子はなく、すぐに他の所へ懐中電灯を向けた。

「もしかして、隠れてやり過ぎしたとか？」

「それはないと思いますよ……隠れそうな所は見当たらなかったですし」

警官の1人が、里里の背後……コンクリートの塀に懐中電灯を向けた。

「もしかして、ここを登ったとか？」

「無理だろ……ここに来るまでせいぜい数十秒だ……登りやすそうな取っ掛かりも無いみたいだし、そんな短時間で登れるような高さじゃない」

「ですよ……それじゃあ、いったいどこへ……」

互いに顔を見合わせて首を傾げる警官達を見て、里里は遅まきながら自分の状況を把握し始めた。

『もしかして……見えていないの？』

「――っ！ お、おい、今、女の子の声がしなかったか？」

「声？ 気のせいじゃないのか」

ポツリとこぼした声に、里里の近くに居た警官が肩を震わせた。

何度も首を振って声の出所を探しているが、里里の存在には気づいていない。

もしかして……見えていないの？

自身の両腕を見ても、よく分からない。見慣れた腕があるだけだ。……もしかして、これも翼と同じ要領なのかしら。

警官達のライトが当たらないように気をつけながら、腕が見えるように意識を集中させる。そこにきて里里はやっと理解した。

ああ、そうか、これでやっと見えるようになったんだ。

スーッと、腕の内部にあった何かの機能が停止したのが分かった。見ると、停止したのは腕の部分だけで、依然として身体や足、頭の部分にはその何かの機能している実感があつた。

光学迷彩。昔読んだ小説に、そんな言葉があつたのを、里里は記憶の片隅から引つ張り出した。今度は消えろと念じてみる。すると、腕の内部で何かの機能が動き出したのが分かり、腕が見えなくなつたのを理解した。依然として、里里の目には何も変わっていない腕が映っているが、今、確かに腕は見えなくなったということだけが分かった。

おそろおそろ、警官の1人に近寄つて、顔の前で手を振って見る。思ったとおり、気に留める様子はない。

ために、怯えている警官の袖をつまんでみる。特に異常は無い、大丈夫だ。

途端、袖を掴んだ警官の肩が一際大きく震えた。指先にしつかり警官服の感触が伝わってくる。どうやら、姿が見えていないだけで、触れることは出来るみたいだ。

そう考えていると突然、手を振り払われた。見上げると、青ざめた警官の瞳がこちらを見下ろしていた。

「い、今、袖を引つ張られた」

「今度は袖かよ……こっちまで怖くなってくるじゃないか」

「冗談はやめろよ」

「じよ、冗談なんかじゃない！ 本当に引つ張られたんだ！」

心配してしまつくらい青ざめた警官が、仲間の警官に訴えている。警官の1人は気味悪そうに辺りの様子をうかがい始めたが、もう1人の警官は鼻で笑った。

瞬間、里里の胸に悪戯したい欲求が生まれた。

「馬鹿馬鹿しい……どっかに隠れているんだろ……戻つて探すぞ」
そう言つて引き返そうとする警官にそつと近づき、囁くように言つた。

『ねえ……どこに行くの？』

ピタリと警官の足が止まった。

『ねえ……行っちゃうの?』

警官は物凄い勢いで背後に振り返った。もちろん、その視線の先に居るのは他の警官達だけ。青ざめた警官の様子に察しがついた他の警官達も、さらに青ざめる。

里里は吹き出しそうになるのを必死に我慢しつつ、さらに畳み掛けた。

「あ、分かった……鬼ごっこだね……」

両脚の光学迷彩を解除して、両脚だけ見えるようにする。そのま
ま、わざと足音を立てる。

「だ、誰だ！」

当然、警官達の懷中電灯が里里へ向けられる。けれども……

「う……うああ……」

「は……は……は……」

「足が……」

警官達は息を呑んだ。見えるのは太ももから、下だけ。正確にはスカートを抜かした膝から下の部分だけ。里里は口元を押さえて、そのまま警官達へ足を進めた。

「今度は私が鬼さんだね……ねえ、私が捕まえたら……」

カクカクと頼りなく両脚を振るわせる警官達。里里はさらに両腕を見えるようにした。

ゆらりと、懷中電灯に照らされた空間に、細い両腕が現れる。

そこまでが、警官達の限界だった。

「身体を頂戴！」

「うわあああああ——！！！！！」

「ぎゃあ ああああああ！」

「あああああ——！！！！」

「ひええええええええ！！！！！」

持っていた懐中電灯を捨てて、警官達は踵をひるがえし、脱兔の勢いで逃げていった。後には……。

『なんちゃって』

舌を出して笑う里里が残った。

それぞれの日々：弓編

「暑いが、思っていたより涼しいな…… キャンプをするやつらの気持ち理解できる」

額から流れる汗をタオルで拭きつつ、弓は緑溢れる山道を進んだ。背中に担いだキャンプ用具とリュックだけを見ると、ただキャンプをしに来た人にしか見えない。だが、その姿は、普通の人とは違っていた。

お尻の辺りまである銀色の髪、スラリと伸びた全身は黒い皮膚に覆われ、傍目には装飾が施された薄い黒鎧が何かを着ているように見える。肘や肩や膝などの関節部には、プロテクターのように鋭い突起が生えている。規則正しく振られる両手には、元の面影が想像できないくらい凶悪な爪が連なって生えていた。

あの化け物に襲われた日から、いつの間にかなることができたこの姿。最初は少し意識集中をしなければ、この姿になれなかったが、今では瞬きするより簡単になれるようにま で な っ た。

もしかして、私は元々この姿が本来の私なのでは……。

慌てて、弓は頭を振った。今は、考えているときではない。先に、今の自分を理解しなくてはならない。

そのために、弓は山へ向かっていた。誰にも見られることなく、誰にも知られることがない場所は、人里離れた山中くらいしか思い浮かばなかった。

そのために、弓は何度もプライドを捨てた。架空の想い人をでっち上げ、失恋旅行としてしばらく一人旅をしたいと両親に嘘をついた。家にあつたキャンプ用具一式を用意しているときの父の自棄酒が鬱陶しかった。選別として渡してくれた幾ばくかの金銭と、父の男泣きがとてつもなく恥ずかしかった。バットを持って飛び出そうとする弟をなだめるのも恥ずかしかった。

なにより、母がそつと手渡してくれたコンドームと妊娠検査薬が、

凄まじい恥辱となつて弓の心を粉碎した。ここに来るまで、何度羞恥心が限界に達したことだろうか、弓には理解しなくなかった。

そのまま十数分歩き続けて山道を進むと、人気の無い静かな川に出た。見ると、川から離れたところに生えている大きな大木の下に、雨風を防げそうな空間があつた。地面も平坦で、川の高さより少し高い場所にある。近くに川があるのは難点だが、テントを設置するには、まずまずの位置だ。

「……お、ここがいいかな」

大木の根元に向かい、荷物を下ろしてさっそくテントを張る。ここまで来た疲れは全く無い。この姿になれるようになってから、体力と身体能力の異常な上昇を感じていたことも、自分を探ろうとした理由の一つである。

テント用具やら着替えやらを入れた荷物は、総重量十数キロになる。弓が持ってきたのはせいぜい二人が入れる程度の小さなやつだが、それでもそれなりの重量になる。山歩きに慣れていないうえに、険しい山道を歩いてきたのだ。これといって運動部に所属したことがない人なら、その場に座り込んでもおかしくない。

しかも、弓は女の子。それなりに体力には自信はがあると自負している弓だが、あくまでそれなりだ。なのに、弓は汗を掻きながらも全く疲労の様子を見せない。弓自身、おかしいと感じていた。

「さて……テントを用意するか」

ほとんど意識することなく、肘から先が元の女の子らしい丸みを帯びた手に戻る。誤ってテントを爪で傷つけないためだ。

その手を見つめ、ため息を吐いた。いつの間にか、この姿になることに何の違和感も覚えなくなっている。なぜ、違和感を覚えていたのか。それすら分からなくなってきた。

また、弓は頭を振った。

「とりあえず、テントの取り扱い説明書を……と」

……気にしていても仕方ない……か。

リュックから説明書を取り出し、キャンプ用具をまとめていたロープをほどこいた。

「まず先に、グラウンドシートを敷くための場所を用意しましょう……地面の石を捨てて平らにしるということか」

よし、気合を入れた。大きそうな石は真っ先に掘り起こして捨てて、気になる石も捨てる。その後、軽く拳を打ちつけて掘り起こした土を叩いて平らにする。グラウンドシートとは床の役割を果たすシートのこと。

「次に、グラウンドシートの四隅をペグで固定する……ペグ？ ああ、これか」

テント用具の中からペグを取り出し、グラウンドシートを固定する。このときも金槌や石は使わず、素手で地面に打ち付ける。痛くはない。ペグとはテントなどを固定する杭のことで、しっかり固定しておかないと後々大変なことになる。

「ええつと、次は……前と後ろにポールを立てて、ロープを張る……これか……ふん！」

説明書に掛かっている図解を見て、作業を進める。入り口となる場所とその反対となる場所にポールを深く突き立てる。それぞれのポールにロープを差込み、ポールを固定。ポールとはテントを支える支柱のことで、これをおろそかにするとテントが倒れたりする。「ウォールを被せて、片方ずつ張っていく」

ウォールの四隅にある紐を使って、グラウンドシートと結ぶ。ウォールはテントの基礎的な屋根のこと。これもおろそかにすると、屋根が風に飛ばされたり、隙間風が流れ込んだりする。

「張り具合を調節した後、フライテントをウォールの上に被せるように掛けて固定する……うわぁ……思っていたより面倒だな、これ」

愚痴をこぼしつつ作業を続ける。フライテントをウォールの上に広げて固定する。フライシートとはウォールではカバーしきれない雨風や寒さを防ぐ役割がある。弓が言ったとおり、この部分は少し

面倒な部分だ。ウォールの位置と高さを考えて固定しないと、効果が半減したりするからだ。

「……よし、後は……うん、中にインナーマットとパーソナルマットを敷いて終わりか……長いな……」

支柱にぶつけないよう気をつけながら、中にインナーマットを敷き、上にパーソナルマットを敷く。インナーマットとパーソナルマットは地面の凸凹感を軽減し、断熱性と住居性を高める役割を持っている。

ちなみに、パーソナルマット、インナーマット、どちらかは絶対敷いておかなくてはならない。地面は思っている以上に凹凸が多く、グランドシート一枚だと、体温が地面に伝わって分散され、夏でも身体を冷やして風邪を引いてしまう危険性があるからだ。

作業を始めてから数十分。やっと、テントが完成した。

リュックの中から腕時計と携帯電話を取り出し、時間を見る。時刻は昼を回った辺りだった。両方同じ時間を表示していたが、電波が届いていないみたいで、電話は出来そうになかった。もっとも、電池式の充電器を持ってきていないので、電波が届いていたとしても、通話できるのは今から二日間が限度だが。

「山の中だし当然か……なんか気疲れした。ちょっと休もう……実験はその後に……」

弓の身体から黒い皮膚が消えるように無くなっていき、すぐに弓は元の人間の少女に戻った。そのまま、テント用具の中からシートを取り出し、横になった。

数分後、テントの中から静かな寝息が聞こえてきた。

第一回 『腹減った』 南川 弓 書す

滞在一日目。天の川がとても綺麗だった。

滞在中、何か書くことが出来たら日記に残すことにした。題名は、そのときの気分だ。

この日記がいったいどういう役目を果たすことになるかは分からないし、元来面倒くさがりなので、三日坊主になってしまいかもしれない。だが、記録は取っておいた方がいいと思ったので、記しておく。また、以後、変化した姿を、『変身した姿』と表記する。

（後々、この日記が役に立てればいいが……考えたところでしかたあるまい。さつそく、今日の実験結果を記しておこう）

かねてからなんとなく分かっていたことだが、今回の実験で確証を得られた。

どうやら変身した私は異常と言えるくらい、身体能力が向上していることが分かった。一回のジャンプで、おおよそ10メートル程度ジャンプすることができる瞬発力と、自分の身長と同じくらいの大岩に指をめり込ませて持ち上げる程度の腕力と握力を兼ね備えているみたいだ。

（メーター等で正確な数値を測ってはいないので、多少の誤差はあるだろう）

けれども、まだ私は全力を出してはいない。この肉体の頑丈さも知りたいが、先に私の力がどれほどのものか調べておきたい。

……余談だが、身体能力とは別に、異常な食欲を常に感じている。前々から食欲が増しているのは分かっていたが、どうやら変身するにより食欲が増すみたいだ。もしかしたら、変身は身体に負担をかけていて、それが、食欲となって表に現れているかもしれない。

第二回 『意外と順応している自分が居る』 南川 弓 書す

滞在三日目。三日も過ぎると、さすがにテント生活にも慣れてくる。

今日、調子に乗って飛び跳ねていたら、ハチの巣に頭を突っ込むことになってしまった。だが、そのおかげで自分の肉体の強度の一端を知ることが出来た。もう二度とやらない。

どうやら、変身した私の身体は、ハチの針程度では傷一つ付かな

いみたいだ。チクチクとくすぐったくて、笑いを堪えるのが大変だった。

そうそう、どうやら目も同じらしく、何度かハチの針が目に入っただが、全く痛くなかった。けど、ちょっと怖かった。

もう一つ、魚を獲った。動体視力と反射神経も軒並み向上しているらしく、簡単に魚を獲ることができた。持ってきた食料も少なくなってきたので、ありがたく食べよう。

途中、持ってきていた果物ナイフの刃が欠けてしまったが、なんとか魚を食べることができた。ちよつと生焼けになってしまい、生臭かったが美味かった。

……余談だが、ハチの巣にハチミツは入っていなかった。ちよつと期待したのに。

第3回 『びつくりだ』 南川 弓 書す

滞在5日目。そろそろ帰る用意をしなくてはならない。

今日は朝から雨が降っていた。川が増水する程のものでもないが、心構えくらいはしておこう。いざとなったら、木の上に逃げればいい。

雨が止む気配がないので、今日は一日中イメージトレーニングなんかを試してみた。

それによって、新しく分かったことが二つある。一つは私の右腕には凶悪な刃が収まっていたことだ。実際は棘の一種なのかもしれないが、棘というにはあまりに凶悪な外見なうえに大きいので、刃という方が正しいだろう。

私にもよく分からないが、普段は外から見えないように腕の中にある程度収納されていたみたいだ。気づいて分かったが、持ってきた手鏡を使って確認すると、収納されていてもそこにあるのが傍目に分かる。どうして気づかなかったのだろう。

一回そこにあると分かると、後は簡単で、出したり仕舞ったりが

自由にできるようになった。太さ2センチ弱。長さは70センチ強。分厚い日本刀をそのまま腕に取り付けた、と思えば、想像しやすいだろうか。

その刃は左腕にもあり、両腕に左右対称の形で腕に収まっているみたいだ。切れ味がどれほどのものかは分からない。明日、晴れたら適当な物をためしに切ってみよう。

それともう一つ。どうやら私の腕は空気を圧縮して閉じ込め、それを一気に放出することが出来るみたいだ。ふとした偶然から分かった。なんというか……普段使っていない部分の筋肉に力を入れたら、外部の空気を取り込んだ……というのが、一番近い。

力を抜くと取り込んだ空気が掌に出来た穴から排出されるのは分かったが、それ以上は……。

私は生物なのだろうか。私は本当に人間なのだろうか。私は本当に人間として生まれてきたのだろうか。それとも、この姿が私の本当の私なのだろうか。

私には、分からない。誰か、教えてほしい。

……余談だが、空気を取り込み続けていると腕がどんどん熱くなった。途中、怖くなって空気を排出したら物凄い火炎放射となって排出された。念のためテントの外に出ていてよかった。

第四回 『夜空が綺麗だ』 南川 弓 書す

滞在6日目。明日は朝から下山する。帰ったら日記を書くのが面倒になりそうだから、おそらくこの日記も今日までかもしれない。

また書きたいことが出来たら書こう。

昨日書いたとおり、枯れ枝や岩を試し切りしてみた。

驚いた。凄まじい切れ味だった。

枯れ枝はもちろんのこと、岩すら切り裂いてしまった。恐ろしい反面、少し楽しいと思ってしまった。私にはサディストの資質があるのだろうか。

そうそう、昨日雨が降ったおかげか、今日一日空が晴れ渡っていた。おかげで、天の川が良く見えた。

思えば、この夜空を見るのも今日が最後だ。そう思うところを離れるのが名残惜しいが、やっぱりちゃんとお風呂にも入りたいので帰る。

ここに来てからは、水に濡らしたタオルで身体を拭いたり、湧き水で髪を洗ったりしたぐらいなので、帰ったらゆっくりお風呂に入りたい。

……私は……なんでもない。私よ、忘れてくれ。

「ただいま」

思っていたよりも時間が掛かり、家に着いたのは夜遅くだった。玄関を通って中に入り、リビングに入ると、中に居た家族と目が合った。

「ただいま、父さん、母さん、智明」

弓は荷物を床に置いて肩を揉んだ。変身していないときでもある程度、身体能力が向上されているが、さすがに徒歩3時間、電車とバスを乗り継ぎ、家まで歩いて帰って来るのは疲れた。

ため息を吐いて肩を揉む姉の姿に、智明は首を傾げた。

「あれ……姉ちゃん、彼氏の家に泊まっていたんじゃないの？」

ピタリ、と弓の父である、みなみかわあゆみ南川優一の肩が動いた。

そのことに気づかない弓は、疲れたように頭を振った。

「だから、何でその話になる」

「だって、母さんが姉ちゃんはひと夏の思い出のために彼氏の家に泊まるって……え、違うの？」

弓は母に視線を向けた。視線の先に居た母、みなみかわあゆみ南川歩美は、弓を見ないようにそっぽを向いていた。

弓には分かった。こちらに後頭部を向けている母はきっと、口元を押さえて笑い出すのを堪えていることを。

「……母さん」

母からの返事は、途切れ途切れだった。

「……渡したや、くふふ……、役に、ぷぷぷ……立った？」

瞬間、弓の頬が茹で上がった。

「使わねーよ！」

「え、それじゃあ、生なの？」

驚いたように、母は振り向いた。その口元はピクピクと痙攣していた。

「駄目よ……ちゃんとセーフにしなきゃ。後悔してからじゃ、遅いのよ」

「だから違うつてば！」

「違うつて……まさか、後ろ！？ 駄目よ、いきなりそんなアダルトな方面に興味もっちゃ。最初はノーマルからよ」

「それでもねーよ！ ていうかそっち方方面面から離れる！」

「なあなあ、姉ちゃん。セーフとか後ろってなんだ？」

「智明にはまだ早いから黙っている！」

「……くそ……ちくしょう！ 可愛かった弓が、まさかそんな大人になっていたなんて！ 歩美、ビールを持ってきてくれ！」

赤ら顔になっていた優一は、鼻をすすって空になったビール瓶を振った。

「はいはい、お父さん。飲みすぎは駄目よ」

「いや、だから父さんまで信じるな！ ていうか酒臭い！？ 酔っている！？」

「ねえ、お父さん……弓も、いつのまにか大人の階段を登っていたのね」

「ぐずぐず、ああ……もうシンデレラじゃないんだな……」

「人の話し聞けよ！」

「なあなあ、姉ちゃん、シンデレラって」

「智明は黙っとけ！」

こうして、南川家の夜は更けていった。

それぞれの日々：マリア編

真つ暗な室内に真つ黒な蝙蝠が、時折小さくキイキイと鳴き声をあげて、静かに飛び回っている。その内の一匹が、群れから外れてマリアの周りを旋回する。

「……………」

無言のまま指を立てると、蝙蝠はスーッとその指に留まった。

軽くベッドの上で身じろぎすると、ベッドのスプリングが軋み、マリアの身体を優しく柔軟に受け止めた。

そのまま意識を集中する。暗闇なのに存在するマリアの影は、不規則に形を変えて蠢き始めた。その影から溶け出るように、ぬるりと小さな黒い塊が影から分離した。その塊はベッドから垂れたシーツを伝わってベッド上に登ると、そのままマリアの服をよじ登って進み、腕を伝って指先へ。

そして、指先に留まっている蝙蝠に触れた。途端、蝙蝠と黒い塊は溶け合うように一つの塊になった。そのまましばらく黒い塊はアメーバのように蠢いた後、再び形を取り始め……数秒後、さっきのより一回り大きくなった蝙蝠が、そこに居た。

フワリと羽ばたくと、蝙蝠の身体が浮く。そのまま何度も羽ばたいて、蝙蝠は部屋中を飛び回る蝙蝠の群れに戻っていった。

その群れをジッと見つめ続けていたマリアは、ふう、とため息を吐いた。

「お腹……空きました」

ぐう、マリアのお腹が可愛い声あげた。思わずお腹に手を当てると、少しだけ空腹が和らいだような気がした。

ぐにやり、と影が蠢き、平面から立体へ、マリアの指先に飛び出るように伸びた。先端に行くほど細くなっていくその影は、マリアには黒い刃に見えた。事実、それは刃だ。

先端に人差し指をくっつけ、横に引く。赤い一筋の線が指に出来

た。その赤い線から、じわり、じわりと赤い球体がにじみ出る……それは、血。

影を元に戻して、その指を口に含む。口腔に広がるまるやかな血の香りと、血の味。赤ん坊のように指を吸うと、傷口からの鋭い痛みと共に、血が喉を通っていった。

血が……血が飲みたい。こみ上げてくる欲求に、喉を鳴らした。血を飲むことに対しての嫌悪感は、もう無い。それどころか、恋の高鳴りにも似た高揚感すら覚えた。

だが、罪悪感だけは、今も強く感じている。

ベッドから降りて窓へ向かう。途中、足元の影が蠢いて分離し、たった今まで横になっていたベッドの上に移動した。そのまま影はふつくと膨らみ、人間の、女性の曲線を描き始める。にじみ出るように色が現れ始め、数秒もすればそこには目を瞑って寝ているマリアが居た。

振り返って不自然なところがないか、確認する。

「……もう駄目です、お腹が空いて我慢できません」

万が一、誰かがマリアの様子を見に来て、これなら誤魔化せる音を立てないように窓を開けた。

「……もって、三日……ですか」

マリアの呟きが、夜空に吞まれて消えた。

吸血衝動を自覚してから数日。マリアはもう、他人の血を飲まなくては平成を保てないようになっていた。血を飲む嫌悪感は、もう無い。だが、罪悪感が残っていて、出来ることなら血など飲みたくない。けれども、血を飲まなくてはいつか理性を失って無差別に人を襲うようになるかもしれない。

その考えから、マリアは、どうしても空腹を我慢できなくなったとき、本当に少しだけ、血を吸うことを自身に許容した。どれだけ罪悪感を覚えようと、血を飲まなくてはいけないから。

だから今日も、我慢の限界に達したマリアは外へ獲物を探しに向かう。貧血にもならない少量なら、一食抜いた程度の影響しか出な

い量なら、罪悪感に耐えられるから。

「これも……慣れないといけませんね……」

スーッと、マリアの身体が頭から黒色に染まっていく。完全に真っ黒になると、そこから小さな蝙蝠が顔を出して、空へと飛び立つ。その後すぐにもう一匹、さらにもう一匹と続き、瞬く間にマリアの身体は幾つもの蝙蝠となって、夜空に飛び立っていった。

家から離れ、隣町の上空に到着した蝙蝠達は、獲物を求めて四方八方に飛び立った。

蝙蝠となって空を飛ぶとき、いつもマリアは自分が数十匹に分裂したような錯覚を覚えた。一人が数十匹に、数十匹が一人になっている形容しがたい感覚。

蝙蝠となったマリアの元には、様々な情報が入ってくる。一瞬、目を回しそうになったが、すぐに持ち直した。

『危なかった……』

数十匹の蝙蝠が得る情報は、全てマリアの下へ送られてくる。全ての蝙蝠はマリアであるのだから、それも当然だ。

初めて身体の一部を蝙蝠に分けたとき、その蝙蝠を通じて入ってくる情報に混乱して目を回した。複数になると蝙蝠を制御できず、何匹も地面に墜落させてしまった。そうやって来る日も来る日も練習を重ね、最近になってやっとここまでになった。

今も、油断すると混乱してしまうが、集中すれば混乱しない程度には今の自分を把握し、制御できるようになった。ただ、絶えず送られてくる情報に気分を悪くしてしまうのは、今も変わらない。

『……ああ、気持ち悪い………』

公衆トイレの中、路地裏、誰も居なくなつたビル、公園、人気の無い道路、蝙蝠を通して、それらの景色が頭の中に流れ込む。一つ一つ、要らない情報として処理していく。

『……あ……あの人は……』

そうして獲物を探し続けること数分。市街地を飛び回っていた蝙蝠の視界に、トボトボと夜道を歩いている青年が映った。黒い眼鏡に猫背、黒いストライプの入ったTシャツを着た、おとなしそうな青年だ。

気づかれないようにしながら、青年の周囲数十メートルに蝙蝠を飛ばして、人が居ないかを確認する。

……誰も居ない。今なら！

町中を飛び回っていた蝙蝠達が、マリアの意思に従って音を立てることなく一箇所に集まっていく。その場所は、青年の真上。

集まると同時に蝙蝠は姿を無くして黒い塊に戻る。その塊はすぐさま形を変えて人型になり、色が戻り、瞬く間にマリアに戻った。長い金髪がフワリと風になびく。

ゆっくりと青年から少し離れた所に着地し、気配を消して背後へ近づく。

「ごめんなさい……ちょっとだけ、吸わせてください。」

マリアは大きく口を開いた。人間のものとは思えない鋭く伸びた犬歯が夜の闇に紛れる。食欲によって出てきた唾液が真っ赤な舌をぬめらせる。

青年のすぐ後ろまで近寄ると、優しく両肩に手を置いた。

「——っえ？」

振り返るより速く、素早く頭をどかし、首筋をさらして……。

「あ……」

首筋に噛み付いた。

強く、青年の身体が震えた。マリアは構わず青年の身体を背後から抱きしめて動きを封じた。

血管を傷つけないよう、気をつける。なんとなく、どこをどうすればより多く血が吸えるのかが分かる。なので、出来る限り血が出ないように、出来る限り早く治るように、出来る限り傷みがない位置を噛む。

「ごめんなさい……」。

犬歯が青年の柔らかい皮膚を突き破り、内部に達する。そして、突き破った犬歯と皮膚の間からにじみ出るように、青年の血液がにじみ出てきた。

舌で傷口を舐めないよう気をつけながら、マリアはそれを味わうように舐め取った。

ゴクリと、マリアの喉が鳴った。

——っ！ ああ、美味しい！

さらにもう一口、血を舐め取る。そのたびに、体中の疲れが吹き飛んでいく。燃えるような高揚感が全身を熱くさせる。

だが、それ以上にジクジクと胸が痛んだ。

「あ……あ……うあ……」

時折ポツリとうめき声をこぼす青年。位置の関係で顔が見えないので、痛がっている顔も、苦しんでいる顔も見ることはない。ただ、ビクビクと手足を痙攣させている様から、なにかしらの感覚を与えていることだけは分かった。

「あ……ああ……ああ……」

そして、ゆっくり動かなくなった。きっと痛みで気絶してしまったのだろう。そう思ったマリアは、悪いとは思いつつも、もう少しだけ、血を舐め取ることにした。

「……あれ？」

気づいたとき、自分がどこにいいのかよく分からなかった。

身体を起こして……そこにきて、僕は自分が横になっていたことを知った。どうりで身体の節々が痛むわけだ。

パキパキと鳴る関節に辟易しつつ、電柱によりかかって立ち上がる。ポケットから携帯電話を取り出して時間を確認する。最後に時間を確認してから数分くらいしか経っていなかった。

ふわあ、と大きな欠伸が出た。妙に痒い肩口を掻きながら、自分に起きている状況を把握してみた。

地面に横になっていた。寝ぼけている。時間が数分過ぎ去っている。これらから考えられることは……。

……もしかして、寝ていた？ 路上で？

「知らないうちに疲れていたのかな……最近バイト増やしたし、やっぱり前のままが良かったのかな」

まさか、路上で寝る日が来るとは……いや、考えなかったことはないが、前後の記憶があやふやになるようなことになるとは思わなかった。

もう一度、欠伸が出る。にじみ出た涙を拭っていると、今しがた見ていた人に話せない夢が脳裏に蘇ってきた。顔が熱くなるのを隠せなかった。

「うわぁ……なんであんな夢見たんだろう……しかも路上で」

鮮明に蘇ってくる記憶。人に話せない夢くらい、今まで何度も見てきたが、今回はその中でも特に話せない内容だった。

よりにもよって、血を吸われる夢だから。しかも、血を座れることを気持ちよく感じる夢なのだ。

うわ、僕って変態だ。

落ち込みそうになるのを堪えながら、僕は足早に家へと走った。

青年は気づかなかった。自分を見つめる、一匹の蝙蝠の姿を。青年が足早に去っていくのを見届けた蝙蝠は、夜空に消えていった。

朝、マリアはドアのノックに起こされた。ベッドから身体を起こして、目尻を擦った。コンコン、と再び入り口のドアがノックされた。

「お嬢様、そろそろ朝食の用意ができます。お入りしてよろしいでしょうか？」

ドアから、源一郎の声が聞こえた。窓の方に視線をやると、カー

テンの隙間から日の光がのぞいていた。

「入ってくださって結構です」

返事をする、失礼します、の一言と共に、源一郎が部屋の中に入ってきた。

そして両手でドアを閉めると、再びマリアへ一礼し、足早に窓へ向かった。

手早く部屋のカーテンを開けていく源一郎を見て、マリアはふと思った。

もし、源一郎が今の自分の現状を知ったとき、どう思うだろうか。化け物だと恐れるのだろうか。

吸血鬼だと恐れるのだろうか。

何を今更！

マリアは内心、自分を笑った。

他者の血を吸って、蝙蝠に姿を変えて、空を飛ぶ。

これを吸血鬼と言わずして何と言いますか！

血を吸った翌日は身体が軽いではないですか！

血を吸わない翌日は身体が重いではないですか！

いつまで現実から目を逸らし続けるおつもりですか、長谷川マリ
ア！

マリアは大きく深呼吸をした。朝の清々しい空気が体内に取り込まれていく。ゆっくり吐くと、今まで無視してきた何かが、出て行くような気がした。

そして、しっかり前を見据えた。

「源一郎」

ピタリと、源一郎の肩が震えた。マリアへ振り向いた顔は、にこやかな笑顔だった。

チクリと、マリアの胸が痛んだ。その笑顔の向こうで、悲しみに覆われている素顔があるのを知っている。心配させないようにしていることを、心を痛めないようにしていることを、マリアは知っている。

「なんでございましょう」

見慣れた笑顔がマリアへ向けられる。

「お腹が空きました。朝食を持って来てくれませんか？」

「かしこまりました……お飲み物は、どうなさいますか？ 新鮮なオレンジが届きましたので、オレンジジュースがお勧めでございます」

「……そうね、それじゃあ、オレンジジュースをお願いします」

「かしこまりました。少々、お待ちください」

一礼して、踵をひるがえす源一郎。彼が部屋のドアに手をかけたとき、マリアは彼の後姿に声をかけた。

「源一郎、水差しは一つでいいですから」

その言葉に、源一郎は振り返った。驚きに見開かれた瞳と、マリアの穏やかな瞳が見つめ合った。

「喉が渴いておりますから、あんなに出されても飲めません。ですから、水差しは一つで結構です」

なぜ、あれほどの量の水分を取ろうとしたのか、現在の自分を受け入れたマリアは、今なら理解出来る。血への飢えを、別の物で代用しようとしていたのだ。

だが、代用した物は、あくまで代用した物でしかない。飲んでも一時的に飢えがしのげるだけで、本物を欲しくなるのは当然なのだろう。

だが、今のマリアは違う。自分が何を求めていたのかを理解し、少量ながらも本物で腹を満たした。自身を受け入れたことで、マリアは久しぶりに飢えを、渴きを、抑えることが出来た。そして本物を知った今、もう、別の物で代用する気は無かった。

呆けて無言のまま立っている源一郎に、マリアは首を傾げた。

「……………」

「……源一郎、どうかなさいましたか？」

ハッと源一郎は我に返った。慌てて、深く頭を下げた。

そのとき、源一郎の足元に数滴、涙がこぼれ落ちたのを、マリア

は見逃さなかった。

「申し訳ありません……一つですね、分かりました」

そう言い残し、源一郎は足早に部屋を出て行った。

おそらく、両親に報告しに行くのだろう。

「戻りたい……けれども、仕方ありません」

もう、受け入れよう。ちよつとずつだけど、今の自分を。

顔を上げて、カーテンが開かれた窓を見る。その向こうに広がる景色を見て、マリアは流れる涙を止めることが出来なかった。頬を伝って、顎に伝って、シャツにこぼれ落ちても、マリアは止めることが出来なかった。

謎のクマちゃん：里里編

里里の目の前に、クマの人形が浮いていた。いわゆる、テディベアと呼ばれるタイプの人形に近かった。

「……………」

里里は浮いているクマを、黙って見つめた。お風呂から出て、汗を拭きながら部屋に入ると、人形はそこに居た。

もちろん、里里には見覚えのない人形である。元来、人形と呼ばれるものには興味が湧かない性質なのだ。

あるはずのない物が自分の部屋で堂々としているという事態に、里里は思わず人形から離れた。なんていったって、浮いているのだ。そりゃ、私だってバンバン空飛んじゃうけど、人形まで空飛ぶことないじゃない。

「……………あのく、そのクマさん」

とりあえず、片手に握っていたブラとショーツを身に付け、Ｔシャツを着てから人形に声を掛ける。

「……………」

だが、人形は黙ったままだった。予想外の出来事に見舞われたとき、人が取れる行動は意外と限られているものだ。

現実を受け入れるか、折り合いをつけて受け入れるか、受け入れないか、最初から無かったことにするか、だ。

里里が選択したのは、受け入れないことだった。

片手を人形へ向け、意識を集中させる。腕から四つの噴射口が飛び出し、先端の穴から駆動音が聞こえてくる。

狙いは未確認浮遊人形。

「目標、謎のクマ、速やかに破壊」

「ま、待て！」

謎のクマ人形が悲鳴をあげた。クマは素早くベッドに着地すると、

どこから出したのか、小さな白旗を振って降参した。

里里はとりあえず、ロケットパンチの発射を中止し、腕を下ろした。まだ、四つの噴射口は出たままだ。用心のため、いつでも放てる用意である。

まさかいきなり攻撃されそうになるとは、とブツブツ呟いているクマに、尋ねた。

「あんた、何者？」

「何って、私が分からないのか？」

人形の体が動き、首を傾げる動きを取る。人間みたいに自然な仕草だった。

「分からないから聞いているんでしようが」

里里の返答を聞いたクマは、つぶらなプラスチックの目を見開いた……ように、里里は思った。

「そうか……一番適応しているようだが、やはり完全に適応することはないのか」

「……ていうか、あんた誰よ」

半眼でクマを見下ろす。クマは膝を叩いて里里を見上げた。

「ふむ……簡単に言くと、お前にメッセージを送った者だ。届いただろう、『地球を守りますか？』というメッセージが」

里里は驚きに目を見開いた。

「え、あ、あれ！？あのメッセージ、クマさんが送ったの！？」

「誰がクマさんだ！」

「どっから見てもクマ以外の何者でもないでしょうが！それで、結局クマさんは何者？」

里里は腰に手を当て、とりあえず偉そうに胸を張った。

クマはふう、とため息をこぼした。

そして顔を上げた。

瞬間、里里は両足を揃えてひざまずいていた。

自分が何時ひざまずいたのか分からなかった。

気づいたとき、見下ろしていたクマを見上げていた。

「……はえ？」

何が起きたのか分からず、瞬きする。

呆気にとられている里里に、クマは厳かに言った。

「一言で言つと……私は地球だ」

「……はあ？」

「まあ、普通はそんな反応を示すだろうな」

クマはやれやれと呟きつつ、ベッドから足を放り出した。といっても、足がはみ出ているという表現が近いのだが。

「ほれ、とりあえず座れ。話はそれからだ」

自分の隣を叩き、座るよう催促するクマ。里里は首を傾げながらも立ち上がり、促されるまま、クマの隣に腰を下ろす。里里の体重でマットが沈み、ベッドのスプリングが軋んだ。

「ところで、その腕も戻してくれないか？　話がしにくい」

「え、あ、うん」

意識を集中させると、駆動音と共に腕に生えた四つの噴射口が、カシュン、と腕の中に納まった。

「あのさ……」

先に口を開いたのは里里からだ。隣のクマを見下ろしつつ、疑問を口にした。

「……地球って、どういう意味？」

クマも、里里を見上げた。お互いの視線が、交錯した。

「そのままの意味だ。私は地球さ。正確に例えるなら、地球の意思と思ってくれればいい。なんせ本体は、はるか地下だからな」

「地下？」

「そう、地下だ。地球の中心に、私の本体があるのだ。今この姿をしているのは、仮の姿。本体で地上に行くわけにもいかないし、意思だけを飛ばしても、地上では長く活動できない。ものの数分で力尽きてしまうからな」

里里は首を傾げた。どうしてクマなのだろうか？

「クマの人形になっているのは、他意があるわけではない。たまた

ま地上に出たとき、この人形が近くにあったからだ」

里里の疑問を察していたのかクマは、先に答えた。そして、じつと里里を見つめた。里里は首を竦めて、縮こまった。

「……な、なによ……」

「いや、驚いていないのが不思議に思っ……あるいは、白けた眼差しを向けられるかと思っていた」

「……そりゃあ、驚いているわよ。驚いているけど、自分の体がこなくなったときの方がびっくりしたわよ」

いきなりロケットパンチ出せばね。心の中で呟いた。

その言葉に、クマは啞然とした表情で、里里を見上げた。

「……そうか、だからお前に届いたのか」

ポツリと、クマは言葉をこぼした。

「はあ？ 何か言った？」

耳に手を当て、里里はクマの口元へ、耳を近づける。

なんでもない。クマはそう答え、フワリと宙に浮いた。反射的に手を伸ばすが、クマは里里の手からスルリと逃れた。

「ちょ、ちよつと!？」

「明日の夜、2時にここへ向かえ」

クマの眼前に光が点り、それが里里の胸に吸い込まれる。

途端、里里の脳裏に映像が映された。

人気の無い深夜の道。辺りはどんどん寂れていき、一軒のビルに辿り着く。ビルは廃墟とっていい状態で、窓ガラスは一つ残らず外され、外壁も所々碎けてコンクリートが露出していた。

ここって、町外れの廃墟？

「そこに、お前の仲間となる二人も連れて行く。遅れるなよ……それと、必ず力を使って行きなさい。その方が説明も楽だ」

それだけを言い残すと、クマは消えるように姿を消した。

一人しか居なくなつた里里の部屋に、再び沈黙が訪れた。

「……二人って、誰さ……結局、説明らしい説明してないし……」

面倒な事にならないければいいのだけれど。

里里はパソコンの電源を入れて、日課のネットサーフィンをする
ことにした。

謎のクマちゃん：弓編

「ちょ、ちよつと待て！ タイム！ ストップ！」

黒い獣の姿になった弓に踏まれたクマは、硬いフローリングの床に擦られて悲鳴をあげた。その姿は女王様と下僕の構図に似ていた。弓は、鋭い爪が生えた両手を握り締め、さらにクマを踏みつけている足に力を込める。サラリと、長い銀髪が揺れた。

凄まじく怒気の籠った目で、クマを見下ろしていた。

「それで、結局のところ、私は元に戻るのか？ 戻れないのか？ そこをはっきりしてもらおうか」

少し、クマの背中に乗せられた弓の足に体重が掛かる。

「だ、だから、さつきから何度も言っているが、元に戻せないのだ！」

少し、クマの背中に乗せられた弓の足に体重が掛かる。わずかながら、足の爪がクマの頬に引っかった。

クマはさらに手足をばたつかせるが、全く効果が無かった。

「なんかさつきから背中に感じる痛みが強くなってきたのだが！？ それに、本当に元に戻せないのだ！」

さらに力が……。

「本当に無理なんだ！」

「……そうか」

クマから足を退ける。瞬間に黒い皮膚は薄く、消えていき、弓は元のTシャツとジーンズの姿に戻った。

危うく本体に戻されるところだったと、ぼやいているクマに手を差し伸べた。

「ほら、手を貸すよ」

床に寝そべったまま、クマは弓を見上げた。

人狼の力を受け継いでなお、理性を保っているか……やはり、この子を選んで良かった。

クマは胸の内にある驚愕を表に出すことなく、弓の手を借りて立ち上がった。同時に腕を引かれ、そのままベッドの上に座らされた。「さて、話を再開しようか」

弓はその場に腰を下ろし、クマと弓の視線の高さが同じになった。「さつきは何の話していたっけ……ああ、そうだ。お前が私にメールを送って、私はもう元に戻れないという辺りだったな。クマ、私の身体は結局のところ、どうなってしまったんだ？ 本当にどうにもならないのか？」

悲痛な思いで、弓はクマに尋ねる。

「……すまないが、一度そうなってしまったら、もう戻れん」

クマは決して弓から視線を外さなかった。

「……そうか。だったら、どうして私の身体をこんなふうにしてしまった？ そして、本当に地球がお前であるなら、どうして私に接触した？ もっと他にもいるだろう……例えば、総理大臣とか、専門家とか」

「……これは、お前達にしか頼めないことなのだ」

お前達？ 私以外にもいるのか。

「私達にしか頼めない？ 私以外にもいるのか？ それに、どうして私達なんだ？」

「お前を除けば、あと二人居る。一人は人間が生み出した機械の生命体、いわゆるアンドロイド。一人はかつて夜の一族とも呼ばれた、吸血鬼の力を受け継いだ者だ」

アンドロイドに吸血鬼、まるでSFかファンタジーだな。

弓は心の中で毒づいた。だが、自分も似たり寄ったりだということに気づき、すぐに考えを改めた。

「よし、お前、これを見ろ」

クマは見た目どりの小さな両手を、可愛らしく叩いた。途端、弓の眼前に光球が出現した。その光球は、音もなく弓の胸に吸い込まれた。

瞬間、弓の脳裏に映像が映し出された。

人気の無い深夜の道。辺りはどんどん寂れていき、一軒のビルに辿り着く。ビルは廃墟とっていい状態で、窓ガラスは一つ残らず外され、外壁も所々碎けてコンクリートが露出していた。

何処だ、ここは？

弓は視線で問いかけた。

「明日の夜二時に、そこへ向かえ。場所はお前の脳に送ったから、後は体が知っている。残りの二人も連れて行くから……そうそう、変身していけよ、その方が説明も早い」

その言葉に、弓はクマを睨み付けた。

「勝手に決めるな！」

「そこでお前をなぜその姿に変えたのかも説明する。知りたいならとりあえずは従ってくれ。全員一度の方が、説明も早く終わる」

フワリと、クマの体が宙に浮く。弓はその様子を黙って見つめたまま、背中に回した右手を変質させ、黒い腕に変える。

さつきから随分とはぐらかした言い方するな、このクマ。結局、私をこの姿にした理由も、目的も説明しやがらないし、少し無理やりにも……。

研ぎ澄まされた刃となった右手を、軽く握る。

瞬間、チラリと、クマが弓へ視線を向けた。視線が交錯した瞬間、弓の背筋に悪寒が走った。

「背中に回したその刃で、私を殺すか？」

強く、弓の心臓が鼓動した。にじみ出てきた汗が目に入って、少し痛かった。

弓が右手を繰り出そうか悩んでいると、クマは落ち着いた様子で弓を見下ろした。

「本当にすまないと思っている。だが、事態はもう私の力ではどうにもならないところまで来ている。どうにかして奴らに対抗する手段を手に入れなければならなかったのだ」

「奴ら？ 奴らって」

だが、クマは弓の疑問に答えることなく、煙のように消えた。弓

はその様子を、混乱した頭で見送った。

謎のクマちゃん：マリア編

「こんばんは」

突然声をかけられ、マリアは伏せていた顔を、そっと上げた。涙を拭って、声の出所に視線をやった。

そこには、テディベアのクマ人形が宙を漂っていた。

マリアはなんだか泣きたくなった。

あああ、ついに幻覚まで見るようになってしまったんですね。ごめんなさい、お母様、お父様、わたくしはもう、このまま消えてしまった方が良くもしれません。

再び、こみ上げてくる涙を堪える。だが、涙の防波堤が決壊するよりも前にクマ人形が続けて言い放った言葉に、マリアは目を見開いた。

「吸血鬼になった気分はどうだ」

「……………え？」

一瞬、マリアは何を言われたのか分からなかった。ゆっくり言葉の内容を頭に染み込ませていく。驚きのあまり、涙は止まった。

目元に流れる涙の跡を見て、クマは内心、罪悪感を覚えた。

まだ、吸血衝動に耐えているか……………他の人間だったら、とうの昔に理性が崩壊していたかもしれんな。

「『地球を守りたいですか？』……………あの手紙を送ったのは、私だ」キョトン、と呆けていたマリアの目に理解の色が広がっていく。

同時に、怒りの色も濃くなっていた。

「あなたの……………」

次第に、怒りが膨れ上がっていく。普通でなくなった原因が、目の前に居るのだ。たとえ今の自分を受け入れているとしても、元々なりたくてなったわけではない。

今、マリアは溜め込んでいた怒りの矛先が見つかったのだ。

「あなたの……………！」

そして、怒りが爆発した。

「あなたのせいか!!」

刹那、マリアの足元から一気に真っ黒な影が広がってクマを囲んだ。マリアは瞬時にクマの身体を掴むと、そのまま首に指を回した。クマの手足から綿が飛び出し、プラスチックの目が弾けたが、マリアは構わず顔を近づけた。その青い瞳は暗い室内の中でも爛々と輝いていた。

「……わたくしが何を言おうとしているか、それくらいは分かりますね?」

「何が、だ?」

「とばけないでください! わたくしを、元の人間に戻しなさい!」

「残念だが、それは無理だ」

望んでいない返答に、マリアの手に力が入る。

「どうして!？」

「一度力を受け継いでしまったら、もうどうにもならん。吸血鬼として、生きていくしかないのだ」

グニヤリと影が床から数本にじみ出て、クマの回りを円形に囲む。それらが鋭い刃となり、クマの身体に触れた。

「……………お願いです」

ゴクリと、マリアの喉が鳴った。最後に血を吸ってから三日。もうそろそろ、血を飲まなくてはいけない。血で潤う必要がある。心が、身体が、血を求めている。

現実を見据えた。前を見据えた。だからこそ、マリアは人間に戻りたかった。

「ねえ、お願いだから、私を元に戻して。普通にお父様とお母様と一緒に過ごしたい。普通に源一郎とまたお話ししたい。ねえ、お願いだから……」

ジワリと涙がにじみ、マリアの目からこぼれた涙が、頬を伝って床にこぼれ落ちて行く。

「お願いだから、私を人間に戻して……お願いだから……」

こうしている今も、マリアは感じ、聞き取っていた。

動物の体内を駆け巡っている血の音。

それらを循環させる心臓の音。

かぐわしき、生命の香り。

同時に、マリアは胸を痛めていた。

血をほとんど吸わないことで体調を崩す自分を心配する両親の悲痛な声。

陰で泣いて、いつも心配してくれている源一郎の堪えるようなうめき声。

それら全て、マリアの耳に届いていた。

どうして聞こえてしまうのか、今のマリアには分かる。なぜなら、自分は人間ではないから。人間なら聞こえない音でも、人間以外なら、聞こえるから。

「もう嫌……血を吸うのも、それを喜ぶのも、それを嫌がるのも、もう、嫌……」

マリアは俯いた。それでも、クマは話を続けた。

「仮に人間に戻ったとしたら、お前は両親を見殺しにしてしまうことになるかもしれないが、それでもよいのか？」

「え？」

見殺し、の言葉に、マリアは手の力を抜いてしまい、その隙にクマは脱出した。

「み、見殺し！？ どういう意味ですか！？」

先ほどの剣幕が嘘のように、マリアは口元に手を当てて動揺している。

「事情は後ほど説明する。だが、もしお前がその力を捨てて普通の人間に戻るというのなら、お前の好きな人達が死ぬ可能性を増やすことになるが、それでもいいのか？」

「……その言葉を信じる根拠があると思いますか？」

疑わしげに、クマを睨むマリア。いつものマリアなら、それは可愛らしいものだったが、憔悴した彼女の表情には、不思議な迫力が

あつた。

「信じるも何も、お前は既に信じているのだろう?」

「——っ!」

事実だった。

マリアは目の前にいるクマの人形の言葉を、どうしても否定することができなかった。胸の奥でざわめいている自分の心が、目の前の人形を信頼していた。

「……貴方は何者ですか? どうして私にこんなことを……」

部屋中を覆っていた影を戻し、頬に流れた涙を拭う。

「一言で言えば地球だ。地球そのもの……この星の意思と違ってくれればいい」

「この星の……地球の、意思?」

「そうだ。そして、お前がその力を得たのにも理由がある。それはこの星を守るためには、とても重大なことだ……尋ねただろう?」

『地球を守りますか?』と」

「あ……」

その言葉に、マリアはあの手紙のことを思い出した。

フワリとクマの体が宙に浮く。すると、マリアの眼前に光球が現れ、マリアの胸に吸い込まれた。

瞬間、マリアの脳裏に映像が映し出される。

人気の無い深夜の道。辺りはどんどん寂れていき、一軒のビルに辿り着く。ビルは廃墟と叫んでいる状態、窓ガラスは一つ残らず外され、外壁も所々砕けてコンクリートが露出していた。

これは、ビル?

ここは確か数年前、開発目途がつかなくなり、放置されていたはずでは……。

「明日の夜の2時、ここへ来い。ただし、吸血鬼の力を使って……もう、使い方は理解しているのだろう? 考える時間とコントロールする時間はたくさんあったからな」

スーッと、音もなくクマの姿が透けていく。

「待って、まだ聞きたいことが！」
慌てて手を伸ばすも、マリアの手は虚空を掠めて終わった。

そして三人は出会った

夜中の二時。昔は丑三つ時とも呼ばれ、草木も眠る時間帯とも呼ばれていた時刻。

ただでさえ人気のない時間帯なのに、さらに人気がない町外れの廃墟ビルの屋上で、弓は指定された時間より少し早くに来た。というより、待っていた。

背中や胸元などの一部を除いた部分が黒い皮膚に覆われ、長い銀髪に鋭い目つき、男性並みの長身と、傍目には美女といってもいい姿だったが、暇そうにむき出しになった鉄骨に背中を預けている様子は、どこか幼く見えた。

まだ誰も来ていないのか……本当に来るのか？

後15分待つてこなかったら帰ろう。そう思い、暇つぶしにビルの中を探索してみようかと、壁から背中を離れたとき、弓の耳にかすかな異音が届いた。

虫の声でもなく、下の道路を走っている車の走行音でもなく、ましてや人の声でもない。

ある種の独特の駆動音を前に、弓はこの音の主が、二人の内の人であることに思い至った。

なんだろうか……どこから聞こえてくる？

辺りを見渡し、下を見下ろしても、それらしいものは見付からない。

それならば……上か！？

弓は夜空を見上げた。ジッと目を凝らしていると、小さな青白い光が突如、雲の間から現れ、それはどんどん近づいて来る。

目を凝らして見つめた……ところで、弓は自分の目を疑った。

……お、女の子！？

弓は空から来る者が年端もいかない少女であることに、啞然とした。

……うわ、美人な人だ！

同時に、眼下に佇む弓の姿を確認した里里も、驚いた。クマから二人いると聞いて、あれこれ想像はしていたが、まさかこれほどの美人とは思わなかったからだ。

瞬く間に里里は弓の側まで来ると、ゆっくりとひび割れたコンクリートの床に着地した。フワリと砂埃が舞う。カチン、と機械的な音と共に、翼が折りたたまれ、体内に収納された。

「……………」

「……………」

完全に収納が完了したのを確認した里里は、黙って自分を見つめる弓の前に、どうしていいかを考えた。元来、友達がいない里里にとって、同年代の人と正面から対面すること事態久しぶりだ。さらに、獣の姿になった弓の姿は、傍目にはとても怖く、美人であったため、まともに挨拶することが出来なかった。

弓の方も、空を飛んできた里里の前に、どうしていいか分からなかった。自分がこんな姿をしているので、他の二人もそれなりのものなのだろうと思っていたが、まさか空を飛んでくるとは思っていなかった。

しかも弓にとって、それ以上に気になることがあった。

決して里里の目を見ないようにしつつ、弓は尋ねることにした。

「……………なんで、裸なんだ」

「聞かないでください！」

里里は両手で乳房を隠し、弓の視線から逃れるように、その場にしゃがみ込んだ。

そう、里里は裸だった。服も、下着も何もない、生まれたままの姿だった。

「い、いや、別に咎めているつもりはない。ただ、どうして裸なのかな……………」と思っただけで……………他意はないんだ」

慌てて、弓は里里に背を向けた。いくら同性であっても、気恥ずかしいものはあると思ったからだ。

「あ、べ、別に露出とかそういう趣味はありませんよ！　ただ、空を飛ぶとどうしても素っ裸にならざるをえない事情がありまして…

…」

「……できるなら、その事情を教えてくださいませんか？　こちらとしても、どう対処すればいいか分かん。あと、敬語も無しにしてくれ。こっちも敬語は使わんから」

「え、は、はい、分かりまし……分かった。それじゃあ、ちょっとこっち向いてくれない？」

お許しが出たので、弓は振り返った。そこには、背中を向けた里里が仁王立ちしていた。

若干女性らしさが感じられるお尻も、若干細くなっている腰周りも隠すことなく、あまりに堂々とした姿だった。

こいつは変わった奴だな。

弓は目の前の少女を、そう判断した。

変わり者と判断されたとは知らない里里は、振り返り、弓が自分を見ていることを確認した。そして、意識を集中させて、背中 of 翼を出した。

カシユンと肩甲骨辺りの皮膚が凹み、スライドする。中から折りたたまれた翼が飛び出し、あっという間に先ほどの形に戻った。

一部始終見ていた弓は、彼女がアンドロイドだということを、今更ながらに理解した。

「分かります？」

「……何が？」

背中 of 翼を指差す里里に、弓は聞き返した。

「服を着ていると、この翼が穴開けちゃうんですよ。もう見事なくらい大きな穴を」

「……言われてみれば、確かにそうなるな」

想像してみる……確かに、大きな穴を開けてしまっただろう。

「しかも場所が場所だから、ブラジャーも巻き込まれてしまい、場合によっては紐が千切れてしまうのです……なので、上を着ること

ができない」

毎回復を破いていたら、着るものなくなるから。

里里は、そう切実にこぼした。

そうか、大変なんだな。

一瞬納得しかけた弓だが、すぐに下を履いていない理由にはならないことに気づいた。

弓の顔色から、下のことに思い至ったことを察した里里は、皮肉げに遠い目をした。

「ちなみに、雲の中を飛ぶと水蒸気でズボンがずぶ濡れになってしまっただけでなく、瞬時に凍り付いちゃうんだ。三回も飛べば見る影もないくらいズタボロになってしまっただよ……いや、あの時は泣いた、泣いた。お気に入りズのズボンが瞬時に駄目になったんだからね……」

なんと声を掛ければ良いのか、弓には分からなかった。何か良い言葉を捜そうにも、当然のごとく、弓の貧相な語彙の中に上手い言葉はなかった。

「しかも、パンツなんて風圧で一気に吹き飛んでしまうからね……ちゃんと固定していないと、ズボンも例外なく飛んでいくから、最近では履かないようにしているんだ……」

「……そいつはご愁傷様」

うん、ありがとう。そう呟いた里里は、どこか涙を流しているように見えた。

ふと、前にテレビでやっていた空飛ぶ少女の話を思い出した。もしかしたら、と思い、弓は落ち込んでいる里里に尋ねた。

「うん、それ私だよ」

帰ってきた答えは、肯定だった。振り返ったせいで隠すべきところも披露されているが、里里は気にする様子もなかった。

「初めて空を飛んだとき、嬉しくて嬉しくて、丁度鉢合わせた飛行機に挨拶したんだ。最近はニュースになったりしているから、空を飛ぶのを遠慮しているけどね」

ほう、そうなのか。弓は納得した。

そこで思い出したのか、里里が弓から視線を逸らしつつ、独り言のように呟いた。

「そういえば、自己紹介していなかったわね」

言われてみればそうだな。内心、弓も同意した。

里里は再び仁王立ちになると、弓に右手を差し伸べた。

「私、中山里里っていうの、宜しく」

一瞬、手を差し出して握手しようと思ったが、止めた。

獣の姿になった弓の手は、牙のように鋭い爪を持ち、手の甲にもいくらかの棘が生えているため、握手すると相手の手を傷つけてしまうと思ったからだ。

迷いを見せている弓の手元を見た里里は、事情を悟った。確かに、あれでは握手を躊躇してしまうのも分かる。

だったら、握手じゃなくてもいいじゃない！

「それじゃあ、ハイタッチ」

「え？」

呆けた様子で、里里の顔を見る。里里は満面の笑顔を浮かべて、右手を高く上げていた。

……そうだな、そういう手もあるか。

こみ上げてくる笑みを堪えつつ、里里の手の高さに合わせて掌を向ける。身長差があるため、片方は手を高く上げ、片方は掌を前に差し出す不恰好な体勢になったが、二人は気にしないことにした。

「私、中山里里、よろしく。好きな方で呼んで」

「南川弓だ、よろしく。名前で呼ぶから、私のことも名前で呼んでくれ」

2人の掌が合わさり、乾いた音が高らかに鳴った。

2人は互いに照れくさそうに頬を染めた。

「そういえば、里里がここに來たっていうことは、あのクマ人形が

らここに向かえって言われたのか？」

里里はコクリと、頷いた。

「そついう弓さんも、クマさんに呼ばれたんでしょ？ 私は他の二人を連れて行くって聞いていたけど、弓さんも？」

「私は、この姿になった理由を説明すると聞いたが……それにしても、最後の一人が遅いな……けつこつ、時間も過ぎているんじゃないか？」

携帯電話を探ろうと腰の辺りをさする。だが、今は獣の姿になっているため、携帯電話が取り出せなかった。というより、携帯電話がどこにあるのか分からない。携帯電話が入っていたポケットの辺りは、既に黒い皮膚で覆われて見えなくなっていた。

頭を振ってため息を吐く。

「なあ、今の時間分かるか？」

「今の時間？ 今なら、2時17分22秒を過ぎた辺り……今、25秒になった」

里里は時計を見る素振りも見せず、始めから知っているかのように答えた。

「……今、お前時計見たか？」

「ううん、見ていないよ。見なくても分かるの。私の体の中に幾つかの計器があつて、そのなかの一つに時計があるの。それが時間を教えてくれるんだ」

慣れれば便利だよ。

里里は楽しそうに笑顔を見せた……瞬間、表情が引き締まった。

里里の視界に『未確認生体反応の存在を確認』と大きく表示され、その後に『視覚センサーを索敵モードに移行し、その後、戦闘モードに移行します』と表示されたからだ。

里里の額に光が集まり、一瞬後には、額から後頭部までを覆い隠すプロテクターが装着されていた。全体が青を基準としたカラーリングになっていて、慌てて手を当てて確認すると、耳の後ろ辺りに直接取り付けられていることが分かった。

呆氣に取られている里里に構わず、プロテクターがかすかな空気の排出と共に下がり、目の辺り全体を覆う。

一瞬里里の視界は暗闇に包まれたが、すぐに『カメラ起動します』の文字と共に、見えるようになった。

ど、どうしたんだ！？

弓は里里にそう尋ねようと口を開。

「近くに誰か居る」

こうとして、口を噤んだ。

弓は慌てて辺りを警戒し、少しの物音も逃がさないよう神経を集めた。だが、里里の言う、誰かが、どこに居るのか、検討も付かなかった。

反面、里里はもう相手を見つける用意に入っていた。

たった今新しく発見した能力ではあるが、いきなり発動するのは、もう三回目なので、もう慣れてる。

里里の視界に『どれくらいの範囲の索敵を行いますか？』と表示される。里里は心の中で、このビルの中と答えた。

一瞬の沈黙の後、視界左にビルの見取り図が表示された。そこには里里を示す光点の一つ、弓を示す光点の一つ、離れたところにある貯水庫の陰に一つあった。

そこか！

見取り図の上に『武器選択』という文字が表示され、『イナイフ・ハンドガン』、『バン・ガトリング』、『レーザーブレード』の文字が表示された。

ハンドガン……なんて使ったことないし、ブレードもないし、数打ちや当たれのガトリングにしよう！

決断は速かった。『バン・ガトリング』の文字が点滅し、消えた。里里の右手に光が集まり、瞬く間に武器を形成していく。わずか数秒後には、里里の太もも程ある巨大なガトリングが存在していた。細い銃口から伸びた銀色が水色のガトリング本体に繋がり、右腕全体がそのまま銃器になっていた。腕が軸として固定されており、

胴体の水色が輝いていた。

そして、支柱の陰に向けて構えた。弓も支柱へ視線を向けた。

「動くな、というより動かないで、銃なんて撃ったことないから」

「……そういうことだ。とりあえず何もするつもりはないから出てきてくれ……というより、いきなり銃を構えるやつがいるか、普通？ それにどつから出したんだ、それ？」

とりあえず、弓も構える。格闘技なんて習ったこともないので、喧嘩するときと同じように右腕を少し後ろに引く。弓の意思に呼応して、右腕から大きな刃が一枚飛び出した。太さ2センチ弱、長さにして70センチ強。棘とは到底思えない、凶悪な刃だ。

「……………」

「……………」

沈黙が流れる。だが、その沈黙は思いのほか早く破られた。

スーッと、音もなく貯水庫の陰から、1人の女性が姿を現した。

黒い長袖のシャツに黒いスカート、そして黒い帽子と、全身を黒一色で固めていた。だが、帽子の下に見える女性の顔は対照的に白くて美しかった。

フワリと、黒いスカートが夜風に揺れ、長い金髪が月の光に煌いた。

「……あの」

先に口を開いたのは金髪の女性だった。

「わたくし、長谷川マリアと言います……クマさんに言われて来たのですけれど、ここでよろしかったのでしょうか？」

金髪の女性……長谷川マリアは、ニコリと微笑んだ。

弓と里里は互いの顔を見合わせて、苦笑して構えを解いた。里里の武器から光が拡散し、一瞬後には武器は粒子となって消えた。

「よく考えたら、最後の一人に決まっているのに、私ら何ピリピリしているんだろ」

「言っな、私だって今そう考えていたところだ。それに、今の私達を、他の誰かに知られるわけにはいかないから……おっと、すま

ない。私は南川弓、名前で呼んでくれ」

爪を素早く腕の中に引っ込めて、隠す。

「私は中山里里、好きな方で呼んでください」

里里の視界に『戦闘モード解除』の文字が表示され、プロテクターが光と共に拡散した。

マリアは軽くスカートの裾を摘み、緩やかにお辞儀した。

「改めまして、長谷川マリアです。わたくしのことは、マリア、とお呼びください」

こうして、三人は出会った。

そして、三人は始めて非日常に触れた日のことを話し合った。互いの力による失敗談の話や、それによる弊害の話、そして地球の意思……クマが来たときの話しをした。

いつしか、時刻は三時を回った頃、三人がイラつき始めたとき、人形は、やって来た。

レゴン

「やあ、遅くなつてすまぶぎゃ」

約束の時間から一時間近く遅くやってきた地球ふんするクマさん人形。そんなクマを歓迎したのは、里里が放った有線式ロケットパンチであつた。

弾丸と化した拳が寸分の狂いもなくクマの頬に突き刺さる。クマは数メートル程、埃を撒き散らして止まつた。

「……………うはあ！ いきなり何するんだ！」

数秒の沈黙の後、クマは何事もなく立ち上がつて、里里に怒鳴つた。

小さな駆動音と共に、里里の腕が巻き取られて、飛んでいった腕が一つに繋がる。飛び出ていた四つの噴射口が腕の中に納まるのを確認してから、里里はクマを睨んだ。

「遅い！」

「遅いな」

里里だけでなく、弓も加勢してクマを睨んだ。二人のあまりの眼光に、クマは一步たじろいだ。少し気の毒に思ったマリアは、とりあえず場の仲裁の意味も込めて、話を切り出した。

「わたくしも遅れてしまった身ですので、お尋ねにくいのですが、どうして遅くなったのか理由を教えてくださいませんか？ もしかして何かトラブルでもあつたのですか？」

マリアは膝を曲げて、クマと視線の位置を合わせた。

「うーん……私が地球の意思であることは、お前達も理解しているな？」

三人は小さく頷いた。

「意思の大本である本体は地球の中心地……つまり、マントルの中にある。本体から地上へ向けて意志を飛ばしているのだが、その途中に色々と障害がある……地盤の影響や、電磁波の影響で、それな

りに時間が掛かるのだ」

分かったか。クマの言葉に、里里は申し訳なさそうに頭を掻いた。「ごめんね、クマさん。そうとは知らずに怒っちゃって……大変な思いして来ていたんだね、ご苦労様」

「分かってくれればそれで……待て、前もそうだが、なぜ私のことをクマさんと呼ぶ？」

「え？　だってクマさんでしょ。地球の意思とか、地球とかだと語呂が悪いし、言いにくいもの。クマさんの方が可愛いしね」

「まあ、確かに可愛いですわね」

マリアも地球の意思のあだ名を気に入ったのか、ニコニコと愛らしい笑みを浮かべた。その横で、弓が小さな声で、クマさんと呟いた。

……まあ、いいか。定着しているなら、それで。

オホンと一息、間を入れる。クマは全員の顔を順々に見上げた。

「分かった。それなら私のことはクマと呼んでくれ……さて、お前達を集めたのは他にもない、お前達に力を与えた理由等を説明するために呼んだのだ」

先ほどとは違った雰囲気を見せるクマ。自然と、三人も気を引き締めた。

里里が、弓が、マリアが、眼下のクマを真剣に見つめる。

「まず、お前達に力を与えた理由。それは、お前達に奴らと戦って欲しいのだ」

「奴らって？」

里里は片手を挙げて、クマに質問した。

「……その前に、少し昔話なるが聞いてほしい。お前達は、この地球以外の惑星を見たことはあるか？　写真でも映像でも予想図でも何でもよい」

地球以外？　というと、火星とか木星みたいなことか？

弓の脳裏に、真っ赤な惑星と、ドーナツが特徴の大きな惑星が、くるくる回る。質問しようと考えたが、先にマリアが口を開いた。

「地球以外とは、火星や彗星、土星や木星のことですか？ それでしたら、イラストでみたことはありますけど」

「私もあるよ」

「私も教科書で見たことある」

「そうか、それだったら話は早い……むん！」

突然、クマが気合を入れて両手を叩いた。大きな光球が突如クマの頭上に出現し、それが三つに分かれた。

それらは音もなく三人の額を通過し、中に消えた。

途端、三人の世界は一変した。

先ほどまであった屋上や、そこから見える風景が一変し、真っ暗な闇だけになった。足下も、空も、全てが黒い。

「うわわ、あぶな！」

「うお！」

「きゃあ！」

三人は突然の事態にバランスを崩し、思わず足を滑らせた。

里里は慌てて翼を使って空中にホバリングすると、すぐに横の二人の手を取った。そのままゆっくり上昇し、二人を持ち上げた。

弓とマリアも、必死に里里の手を掴み……弓は里里の手を傷つけないよう気をつけながら、真っ暗な世界に落ちないよう踏ん張った。その様子を見たクマは、さも可笑しそうに笑った。

「これ、怖がることはない。ただの映像だ。実際はまだ屋上だから、心配することはない」

「……え？ 映像なの、これ」

「マジかよ」

「まあ……」

三人は驚きの眼差しを真っ黒な地面に向けた。だが、地面が見えないので、ちゃんと足を置くことができるのかが不安だった。

「……まあ、いきなり言われても無理だろうな。とりあえず、里里に捕まったままで話を聞いてくれ。里里、お前はそれで大丈夫か？」

里里は首を傾げた後、頷いた。

「私は平気だけど……ところでクマさん、私の名前って言ったっけ？」

「それくらい知っている。私を誰だと思っているのだ、全てとは言わないが、たいていのことは知っているぞ」

ああ、そういえばクマさんは地球の意思でしたね。

マリアはふと、そのことに思い至った。

よくよく考えれば、地球上に生息する生物は全て、彼の上で生活しているのだ。自分の体の上で生活している人達のことなど、ある程度把握していて当然なのかもしれない。

「さて、話を戻すぞ、まずこれを見てくれ」

クマの言葉と共に、暗闇の奥から小さな光が近づいてくる。

三人は目を凝らした。

光は瞬く間に大きくなり、分裂し、模様が入った幾つかの丸に分かれた。一つの大きな赤い丸を中心に、等間隔で並んでいた。それらの形は、一つ一つが微妙に違っているが、だいたいは似たり寄ったりだった。

クマはそれらを順々に指差した。

「これが、今から1億年以上前の太陽系の姿だ」

「え？　嘘？」

マリアは驚きに目を見開いた。なぜならば、彼女の知っている太陽系の図とは全然違っていたからだ。彼女の知っている太陽系は、地球を除き、とても生命が住んでいそうなようには思えないものであった。太陽を中心に行っているのは同じだが、距離まで同じではない。

だが、これらはどうだろう。

多少の違いはあるものの、全てに海を現している水色があり、木々をしめす緑色があり、大地を示す茶色があった。それは、地球と同じような環境であることを物語っていた。

等間隔であるということは、太陽から送られてくるエネルギーも同じ量だ。つまり、生物の進化の過程も類似している可能性もある

のだ。

だが、果たしてこれは……。

「これらは、全て、レゴンが現れる前の映像だ」

ハッと、マリアは我に帰った。里里は首を傾げて、クマに尋ねた。

「あのさ、クマさん。その、レゴン、っていうのは、なんなの？」

レゴ、なら知っているんだけど」

「それは玩具だろ」

弓のツツコミに、里里は頭を掻いた。

「レゴンとは、私達の間で使われている宇宙からやってきたエネルギー生命体だ。姿、形を持たず、あらゆるものに化けられる」

「……それが、わたくし達のことと、どういった関係が？」

数秒、クマは沈黙を続けた後、おもむろに口を開いた。

「……恐竜が滅んだ原因を知っているか？」

「恐竜ですか？ それでしたら、わたくしは巨大隕石の衝突が原因だと聞いております」

「そう、巨大隕石が原因で絶滅したと、お前達は考えている。だが、実際は違うのだ」

「違うの？ 痛っ」

「里里は少し静かにしている」

弓は里里の足を叩いて、横槍を黙らせた。クマは苦笑した後、話を続けた。

「巨大隕石の衝突ではない。実際は、数百万を超えるレゴン達の襲撃によって死んだのだ」

「……レゴン、ですか？」

うむ、クマは頷いた。

「ほとんどのレゴンは大気圏の摩擦熱と、地表との激突によって消滅した。だが、一部のレゴンは、傷を負いながらも地下深く潜り込み、長い年月をかけて傷を癒していった……今、そのレゴンが地表に出ようとしているのだ。そして、その結果が、地球を除いた他の惑星だ」

「他の惑星？」

「奴らは地上の食糧を食べ尽くすと、溜め込んだエネルギーを使つて、また別の惑星を目指す。その際、大爆発が起きてしまい、結果あのような惑星になってしまうのだ」

眼前に浮かんでいる惑星が、次々に変色し、大きく太陽から離れたり、近づいたりする。数秒もすれば、見慣れた太陽系の姿になった。

「ここまでで、何か質問があるか？」

ポン、とクマが手を叩く。瞬間、真っ黒だった世界に色が戻り、三人は元の屋上、床上30センチメートルの辺りを浮いていた。

里里の腕にしがみ付いていた二人は、一言お礼を言ってから、飛び降りた。里里もゆっくり着地すると、背中の翼を収納した。

クマの言葉に、誰もが言葉を返せなかった。スケールが大きすぎて、想像もつかなかったのだ。

その中で、マリアはおそるおそる、クマへ質問した。

「……レゴンは、何を食糧にしているのですか？」

お願い、違っていて。

ギュツと、マリアは歯を噛み締めた。最悪の答えが、脳裏を過ぎった。里里と弓も、神妙な面持ちで、クマを見つめた。

「やつらはエネルギーそのものが意思を持った生物。姿形も様々で、生きているものなら、全てが奴らの餌だ。植物、動物、電気、熱、水、無機物、奴らは何でも食糧にする……人間も、やつらにとって食料の一つにすぎない」

ああ、やつぱり。最悪の答えが的中してしまったマリアは、軽い立ちくらみを感じていた。

「……それで、私達はレゴンと戦えばいいのか？」

弓が、一步クマに近寄り、膝をついた。30センチ程度しかないクマを見つめる。

「そうだ」

「で、でも、どうやって戦うのさ！？ 私、ロケットパンチくらい

しか……それに、こういうことは軍隊とかに任せた方が……」

「それでは倒せないと判断したから、私達に力を与えた、そうだろう、クマ」

「うむ、察しが早くて助かる。里里、まず落ち着け」

クマの言葉に、里里は唸りながらも従った。少し唇を尖らしている姿は、どこか可愛らしいものであった。

「エネルギー生命体である奴らは、電気そのものや熱そのものが肉眼では捉えることができないと同様に、通常では触れることも出来ない。だが、奴らはエネルギーそのものなので、影響力だけはある」
「……つまり、こちらから接触は出来なくても、レゴンの方からは一方的に接触できる、ということですよ」

マリアは思わず息を呑んだ。

それは恐ろしい事実であった。

触れることも出来ないということは、人間が知恵を合わせて作り上げた力がほとんど通じないということだ。熱や衝撃波等によって対象を破壊する兵器は存在するが、それらはあまりにデメリットが大きい。

火炎放射器や衝撃波等の特殊な爆弾を覗けば、後は物理的に外傷を与える兵器しか残っていない。エネルギー体である以上、銃器は効かないということなのだ。

「そうならないために、私がお前達に力を与えたのだ。皆、自分の力は大よそ理解したか？」

三人は互いを見合わせた後、自信なさげに目を逸らした。

「いや、けっこう慣れてはきているけど、まだ全部は把握していないかな……さっき武器が出せること知ったし」

「私も、里里と同じだ。肉体の使い方は練習して慣れてはいるが、全力を出したことはないの、よく分らん」

「……わたくしはこの力の存在を受け入れるのに時間が掛かりましたから、まだ……精々、影を操って兵隊を作るか、身体を沢山の蝙蝠に分割して飛ぶくらいです……」

それも、まだ慣れてなくて、上手く飛べないんです。

そう言って、マリアは恥ずかしそうに俯いた。里里は慰めの意味も込めて、背中を軽く叩いた。

クマは三人の状態を聞くと、再び話を続けた。

「奴らに対抗するには、奴らと同じエネルギー体になるしかない。人間の虚弱な身体では、エネルギー体になったときの衝撃に耐え切れないのだ。強靱な肉体を持った生物……私の記憶にある、太古の生物達の力を与えるしか、耐える方法がなかったのだ」

ふと、弓の脳裏に古代の世界が甦ってくる。

……ん？　ということは、昔はこんな奴らがいたのか？　あの獣のような姿をしたやつが、荒野を、草原を、駆け回っている姿を……

…うお、怖！

弓は自然と背筋が震えてくるのを、抑えきれなかった。

弓とは別に里里は湧き上がってきた疑問に何度か首を傾げた。

「ん、ねえ、いくつか聞いていい？」

弓とマリアが、里里を見つめる。クマは目です承の意図を伝えた。「私達三人の力って、過去に実在した生物が関係しているんだよね？　いつの時代に生きていたの？」

「ふむ、順に説明しよう。人狼は、かつて恐竜を捕食していた最強の野生動物だ。サルよりもはるかに高い知能を持ち、一部は人間と同程度の知能を持つ者も居たくらいだ。吸血鬼は夜の一族と言われた者達だ。あらゆる超能力を操り、物理法則を超越した存在だ」

「へ……あれ、でも、そんな凄い人達がなんで滅んだの？」

里里は首を傾げた。どう考えても、滅びそうな要因が無さそうだったからだ。

「二つの種族は同じ原因で滅んだ。子を成す力が極端に弱いという、共通の弱点でな。始めの内はほぼ横ばいだったが、少しずつ数を減らしていった、最後は子を成すための雌、及び雄がいなくなって終わりだ」

「ふーん、種無しになってしまったのね」

「……まあ、そんなところだ。共に食物連鎖の頂点に立っていた存在だよ。ただ、連鎖の高い存在にあるやつ同様、雌が一生に子を成すのは0か1か2だからな。自然と数も減るさ」

「……それで、私のようなアンドロイドも居たの？ 思いっきりハイテクな体になっているんだけど……」

「居たからお前の体がそうになっているのだろうが」

「……野生のが？」

「人工のだ」

「……それって、古代文明ってやつ？」

「そうだ。もつとも、その技術力のせいで、滅んでしまったが……いわゆる文明の暴走というやつだ。今よりもはるかに高度な文明を築いていたことが、結局は……」

なんとなく、里里は猫型ロボットののような世界を想像した。あながち、間違いではないのかもしれない。

「もう一つ、どうして私達なの？」

ピクリと、弓とマリアの肩が震えた。

「こう言っちゃなんだけど、私って滅茶苦茶弱いよ。軍人みたいに訓練も積んでいないし、マンガにあるような超能力も持っていない、普通の女の子だよ。下手したら普通よりも弱っちい私を、どうして選んだの？」

「それは、私も聞きたいと思っていた」

「わたくしもです」

三人の質問に、クマは大きく頷くと、フワリと宙に浮き上がった。小さな手をポンと叩くと、突然三人の前に一枚ずつ紙が現れた。

紙には『地球を守りますか？』という一文だけ書かれていた。

三人は、思わず身体を緊張させた。マリアだけ、特別強く身体を硬くした。

「実は、この手紙にはある仕掛けがある。ここに書かれている『地球を守りますか？』の一文を読むと、無意識に恐怖を感じるようになっていくのだ。どうだ、ただの文章なのに、とても怖いだろ。弓

には音声、という形を取っていたが、効果は同じだ」

それか。三人は納得した。

文章を読んだときの奇妙な感覚を思い出す。勝手に心臓が悲鳴を上げ、今すぐどこかに逃げ隠れなくなる奇妙な感覚。あれは、全てクマが仕組んだことであつたのだ。

クマがもう一度手を叩くと、紙は溶けるように消えていった。途端、三人は見えない重圧から開放され、ホッと息をついた。

「しかも、少しでも恐怖に屈したり、邪な考えを持っていたりしたら、無意識に守らない選択を選ぶようにしてある。恐怖を乗り越えたものだけが、守る選択を選ぶようになっていくのだ」

どうだ、なかなか良い考えだろう。

自信満々に胸を張るクマを見て、図らずも、三人の思いは一致した。

もう少し穏便な方法を取れ、と。

三人の視線の剣呑さに気づいたのか、クマは慌てて説明を補足した。

「言っておくが、お前達だけに送ったわけではない。文字通り、世界中の人間に信号を送つたのだ。手紙だったり、インターネットだったり、夢だったり、色々な方法を使った。結果、耐えることができたのが、お前達三人だけだったのだ」

「……それって、そんなに凄いものなのか？ 確かに怖かったけど、そこまでではなかったと思うが」

弓の質問に、クマは分かっているか？と首を振った。

「屈強な大男が、泣き叫んで逃げ出すのだぞ。お前達は自分では気づいていないが、恐怖を乗り越える心の強さを潜在的に持っている。それは誇ってもいいことだ」

そこまで言われると、なんだか胸がくすぐつたい。

照れくさくなった三人は、明後日の方向を向いた。丁度雲の隙間から降りそそいだ月の光に照らされた三人の頬は、うつすら赤くなっているようだった。

「そ、そういえば、エネルギー体になるにはどうしたらいいんだよ！？　今のままじゃ、触れることも出来ないんだろ！」

照れくささに耐え切れなくなった弓の質問は、誤魔化しの意味もあつてか、自然と声が大きくなった。

「もう既になつている。守ると選択したときから、お前達の体はエネルギー体だ」

「え、そうなの！？」

里里はペタペタと体中を触る。膨らみかけの乳や少しくびれがある腰周り、女性の片鱗を見せ始めているお尻がクネクネ揺れる。とてもではないが、年頃の少女がしている行動ではなかった。

弓はその姿を見て苦笑した。だが、見上げていたクマはポツリと言った。

「そういえば、お前は どうして裸になつて いるのだ？」

「あ、それわたくしも 氣になつて ありました」

クマとマリアの邪氣のない質問に、里里の体がピタリと硬直する。不思議そうに眉をしかめていた里里の頬が引きつり、額に冷や汗が浮かんでいる。

弓は目も当てなれないとばかりに、頭を振った。

あつちやゝ、ついに聞かれたか……マリアも空気を呼んで何も聞かなかつたのに、クマ野郎め。お前が聞いたら、マリアも聞ける理由が出来るじゃないか。

弓の思惑どおり、里里は膝を抱えて落ち込んでしまった。

「聞かないでください……翼がいけないんです。便利だけど、便利じゃないんです……決してそういう趣味があるわけではございません。神に誓つても私は服を着ている方が好きなんです」

里里の悲壮感溢れる悲鳴が夜空に響いていった。

そう、里里は外で裸になるのが好きなわけでも、見られるのが好きなわけでもない。ただ、これ以上服が駄目にならないようにと試行錯誤を繰り返し、辿り着いたのがこのフリーマンスタイルである。別名、自由な人。

空を飛ぶのを封印するか服を着るのを封印するか。二者択一の結果、里里が選んだ一つの答えであった。誰も、彼女を責めることは出来ないだろう。

「そ、そうか、何だか分からんが、頑張れ」

「……気を落とさないでください」

どういつ対応を取ればいいか悩んでいるクマを尻目に、マリアはおおよその事情を察した。おそらく、彼女が今後同じ質問をすることはない。

あの翼の位置ですと、上は何も着けられせんわね……あら？でも、それでしたら下を履かないのはどうしてでしょうか？

新たに浮かんだ疑問を尋ねようか悩んでいると、弓が優しくマリアの肩を叩いた。振り返ると、そこには弓の悲痛な眼差しがあった。

「……聞くな。下も駄目になってしまうそうさ」

「……そうですか、それはお気の毒に……」

二人はそつと、目を伏せた。

一人は落ち込んで床に『の』字を書き続け、一体の人形はどうしていいか分からず右往左往し、残った二人は、落ち込んでいる人を慰めの意味を込めて肩を叩く。

なぜ、そこまで落ち込んでいるのか分からないクマには分からない。服を着るといふ、現代の一般常識は理解しているが、それはあくまで知っているとというレベルだ。正直、クマにとって、服を着る、着ない、などどうでも良いことなのだ。

だが、それでも里里があまりに落ち込んでいることは理解できた。

「仕方ないな」

両手をポンツと、叩く。すると、光が里里の身体を包んだ。

「うえ、は、はい？」

落ち込んでいた里里が突然の事態に、あわてて頭を上げる。

しかし、それよりも早く光が収束し、拡散する。後には、奇妙な形をしたレオタードに包まれた里里が残った。

レオタードには、白と青色の二色が複雑な装飾が施されている。

さらに問題の背中の部分に穴が開いていて、翼を出しても大丈夫なようになっていた。

何度か瞬きを繰り返して、自分の身体を見下ろした里里は、クマを見つめた。

「これで、裸ではなくなった。私の力で、お前と同じアンドロイドが装備していた特殊スーツを再現した。翼を出すのと同様に、自動的に光に拡散、体内に収納される。あらかじめ服を着ておいて、空を飛ぶときにその格好になればよい。着ていた服も自動的に光に拡散して体内に収納しておくようになっていてみたいなので、破いてしまうこともないだろう」

里里は今クマに言われたことを、頭の中で反芻した。

つまり、これからは服の在庫に悩むことも、なくなった……。

「……クマさん、ありがとう！」

嬉しさのあまり、里里はクマを力いっぱい抱きしめた。両腕の中からギアが回転する音が聞こえ、クマの体を万力のように締め上げた。

常人なら一瞬で圧死してしまう程の圧力であったが、幸いにもクマはデイベアの人形。中身は綿なので、いくら締め付けても大丈夫だった。

「……とりあえず、離してくれ。後、その力で誰かを抱きし」

「ありがとう！ 本当ありがとう！」

全く聞いていなかった。クマは人知れず、ため息を吐いた。

その後、離してくれ、ありがとう、の応酬が続き、我慢の限界に達した弓が里里の頭を叩くまで、一人と一体は抱き合い続けた。マリアはその様子を笑顔で見ていた。

最初の勇気

「そろそろ私は戻らなければいけないので、この辺りで失礼する」
少し締め跡が残っているクマは、全員の顔を見上げて、言った。
里里は寂しそくに瞳を曇らせた。

「もう行っちゃうの？ もう少し話したいことがあるのに……」

「すまない、あまり長く本体と離れることは出来ないから……これでも精一杯なんだ」

「え、あ、気にしなくていいよ、クマさん、無理して来ているんだから」

深々と頭を下げるクマに、里里は慌てふためいた。まだ話したいことがあったのは事実だが、クマの事情も理解しているので、別段、クマを責めるつもりはないのだ。

「里里の言うとおり、そこまで真剣に受け取らなくていいと思うが」
「そうですね、クマさん、頭をお上げください」

里里の困り顔に、弓とマリアも手を貸した。だが、クマは一向に頭を上げる様子はなかった。

……クマさん？

三人は首を傾げた。

「申し訳ないと思っている」

ポツリと、クマは頭を下げたまま言った。それは、クマが、地球が、ずっと考えていたことであつた。

「本来なら私がどうにかしなければならなことだ……だが、私にはどうすることもできん。奴らを打ち払う力が、私にはないのだ。本当にすまないことをしたと思っている。特殊な生まれでもない、訓練を積んだわけでもない、普通の女の子であるお前達に、いきなりこのような道を選ばせてしまって、本当に申し訳ない」

そう、クマはずっと後悔していた。このまま時が過ぎれば、いずれレゴン達が自身の身体をボロボロにしてしまうのは明白だ。だが、

それも仕方ないとも、思っている。

数十億年も生きたのだ。死を恐れる気持ちがないとは言えないが、人間よりはよっぽど覚悟を決めていた。

ただ、黙ってやられるのだけは我慢出来なかった。戦う人間を探した理由は、それだけだった。

黙ってクマの独白を聞き続けたマリアが、最後に一つだけ、と小さく呟いた。

「なんだ？」

「どうして、命令しないのですか？」

「……どういう意味だ？」

クマは困惑した様子で、首を傾げた。

「貴方は地球の意思であり、地球そのものなのでしょう？　でしたら、地球に住む私達は、貴方の上で生活させてもらっているということです。私達にそこまで下出にならなくても、よろしいのでは、と思うのです」

「それに、私達もそうだけど、人間って地球に悪いことかなりしていると思うぞ」

「力いっぱい地球環境破壊しているしね。命令されこそすれ、謝られる立場じゃないと思うな、私」

ねえ、と三人は顔を見合わせた。三人の意見は最もであった。

人間は古代から木を切り倒し、山を削り、水を汚し、あらゆる方法で地球を虐め続けてきた。より多くを、より多くをと、人間は満足することなく求め続けてきたのだ。それこそ地球にとっては、人間などガン細胞と思われるも仕方がないのかもしれない。

「……いや、それは違う」

だが、クマは静かに長考した後、三人の意見を否定した。

「確かに、お前達人間は、私の身体を傷つけてきた。だが、それと言うなら大なり小なり他の生物も地球を痛めつけている。それがただ、人間の方の割合が大きいだけだ」

「……そういう、ものなのでしょうか？」

「そういうものだ。それにな……私はこれでも、人間というものを気に入っている」

フワリと、クマの体が浮き上がる。同時に少しずつ空気に溶けるようにして、体が透けていく。

「里里、弓、マリア」

「え、あ、はい」

「なんだ」

「なんでございますか」

突然名前を呼ばれた三人は、慌てて返事をした。といっても、慌てたのは一人だけだが。

クマは全員の顔を順々に見つめた。

「地球上に住む生物の中で、人間だけが行えることとは何か分かるか？」

その質問に、三人は思い思いに頭を悩ませた後、各自の考えを述べた。

「うーん、自信がないけど、理性があることかな」

「……先人の知恵を積み重ねて、新しい物を生み出せることだと思う」

「……わたくしも、弓さんと同意見ですわ」

弓とマリアの答えに、里里は身体を硬直させた。

ええ、嘘、二人とも同じなの！？ 何か私だけ間違っているみたいだよ！ というより、二人とも、とっても大人の意見だ、大人だよ。

人知れず、里里は落ち込んだ。弓とマリアは、里里の様子に頭を傾げて不思議に思ったが、クマだけは里里の肩を叩いて慰めた。

大丈夫、答えは一つではない。それこそ無限にあるといっても過言ではないし、逆に答えは存在しないとも言えるのだ。

……そ、そうなの？

そつだとも。だから、恥じることなど何一つないのだ。

……うん、ありがとう、クマさん。

里里は立ち上がって、胸を張った。レオタード姿な分、裸よりはマシだった。クマは里里の姿に苦笑した後、私の考えでは、と述べた上で。

「他の生物とは違って唯一、人間だけが他の生物のために行動することができる。それが、人間が人間であるがゆえの、一番優れた部分なのだ」

と一言だけ言い残し、溶けるように姿を消した。

屋上には年若い三人の少女だけが残された。

三人は夜間の間に少し冷えた空気に身体を晒しつつ、屋上から町並みを見下ろした。住宅街からも、都市からも離れているため、辺りに人が居る気配はない。

閑散とした静かな屋上にて、三人は屋上の縁に腰を下ろしていた。フエンスも無く、両足を投げ出しているため、傍目にはとても危なく映る。少し前に身体を倒せば、そのまま地上まで一直線だ。

足をブラブラと遊ばせていた里里は、眼下の地上を見下ろしていた。

「……レゴンってさ」

「……んん？」

床に寝そべっていた弓が、そのままの体勢で返事をした。行儀が悪いが、咎める人は居ない。

「生きているものなら、何でも食べちゃうんだよね？」

「……まあ、あのクマの言葉が本当ならな。それがどうかしたのか？」

弓が身体を起こして里里を見つめると、言い難いのか、里里は目を伏せて黙り込んだ。何となく、弓は里里の言おうとしていることが分かった。

だが、それを問い質そうとは思わなかった。出来れば、知らないままでもいいおきたかったからだ。弓は再び仰向けになった。

「……きつと、わたくし達、同じことを考えているのかもしれないね」

ふと、黙っていたマリアが誰に言うでもなく呟いた。弓は気だるそうに振り向いた。

「どうしてそう思うんだ？」

幾分、ぶっきらぼうになっていたのかもしれない。若干語気が強くなってしまったのを、弓は言い終わってから気づいた。

ふふふ、とマリアは微笑んだ。美女がすることは何でも似合うものだな、と弓は思った。

「だって、弓さん……さつきから眉間にシワが寄っていますよ」

眉間に手を当てて、始めた気がついた。

「……そうなのかもな」

やれやれ、出会ってから一時間ちよつとだが、どうもこの人には負ける。なんというか、こうホワホワしたオーラが出ているというか……。

ふと、目を伏せていた里里が、顔を上げた。

「……クマさん……地球ってさ、けっこう弱ってきているんだね」

弓とマリアは互いを見合わせ、里里へ視線を向けた。

「考えてみれば、当然だよな。何でも食べちゃう奴らが、ずっと自分の体の中にいたんだもの。いくら大きな地球だって、体の中を食べられたら堪らないよね」

マリアは深く頷き、里里の言葉に同意した。

「わたくし達人間も原因の一端を担っていますわ。植物、動物、電気、熱、水、無機物、さらには死骸すら利用しますもの。いうなれば、わたくし達も、レゴンとそう変わらないのかもしれない」

「……ま、今ここでアレコレ考えていても、意味はないさ。ただ、クマが弱っていることは確かだろうな」

両足を胴体に引き寄せ、一気に上に伸ばす。その反動を利用して一回転して起き上がると、縁から眼下を見下ろした。

「なんせ、真下に居るやつらに気づかなかつたんだ。こっちはここ

に来る前から気配を感じていたのに」

弓の視線の先、そこには異形の化け物が出てこようとしていた。何時の間に開けられたのか、地面には直径5メートル程度の穴が出来ていて、そこから化け物達は何体も顔を覗かせていた。キョロキョロと辺りを見渡し、様子を探っている。ふと、そいつらは顔を上げた。

「あ、こっち見た」

弓の漏らした言葉に、里里とマリアもならって覗く。

三人と化け物の視線が交錯する。化け物達は生物の範疇を大きく超えていた。

窪んで空洞になった目、鼻、口には、本来そこにあるべきものが無かった。頭部には、幾重にも張り巡らされた血管のようなものが見える。小学生が作った粘土細工のように不思議な形と言われた方が、しっくりくる。非常に嫌悪を誘い、グロテスクな形相であった。両腕には束なった触手が辺りを探り、触手の先端から何かを噴出していた。

里里は縁から下を覗き込み、異形の化け物を捕捉する。

化け物の内の一体が里里の視界に拡大表示されると、視界上から一筋の青い線が降りてきて、視界下へ流れていった。

写し取られた化け物の姿がグルグルと回転して止まると、化け物の映像から矢印が幾つも伸びる。矢印の先端から、そいつについての情報が表示され始めた。

その情報を目で追っていた里里は、苦々しく口を曲げた。

「弓ちゃん、マリアさん、あいつらの正体が分かったよ」

「本当か？ どうやって……いや、いい、だいたい予想は付く」

「お2人から聞いておりましたけど、考えると便利ですね、その目」

弓は頭を振り、マリアは羨ましそうに里里を見つめた。里里は恥ずかしそうに頭を掻くと、表情を引き締めた。

「あいつ、レゴンで間違いない。名前はダンタロス。生き物でも無

機物でも、触手の先から消化液を出して、溶かして食べちゃうみたい」

ほら見て。弓とマリアは、里里が指し示す先を見る。

レゴン……ダントロスが伸ばした触手の先端からは、黄色い液体が噴出していた。液体が廃ビルのコンクリートに触れると、コンクリートは白い湯気を立てて溶け出していき、中の鉄骨すら溶かしていた。

ダントロス達は、流れていく液体に我先に群がり、身体に浴びせるように蠢いていた。

「溶かした液体は、下半身の口から体内に吸収しているようね。あのナメクジみたいな部分が下半身で、細胞レベルの極小の口が連なってる構成されているの」

確かに、里里が示す通り、ナメクジのような下半身が蠢く度に、液体が減少していつている。どうやら蠅のように、液体を吸って体内に取り入れているようだ。しかも、蛙のように液体を取り入れているわけではない為、一度口を閉じれば、体表から体外に流れていくこともない。まさに生物の範疇を超えた化け物であった。

「ふん……そうか、それで？」

弓の銀色の髪が、風とは逆に波立つ。両腕から鋭い刃が飛び出し、両手の爪もさらに鋭くなる。既に爪とは言えず、もはや刃と言っていいものだった。縁に足を掛けると、重圧に負けて縁にひびが入った。

「あいつらの弱点とかあるか？」

「なんか、頭が弱点っぽい。ていうか、それ以外の部分はいくらやっても直ぐに傷が治っちゃうみたい。頭しか狙うところがないね」

「……お2人とも、とても勇ましいですわ……私とは大違い」

フワリと、マリアも縁に立つ。

マリアの影が複雑にざわめく。影から一本の棒が……影が飛び出して蠢くと、そこには人間の輪郭を持った者が立っていた。それが次々に影から生まれ出て、あっという間に影の数は5人になった。

マリアは唇を震わせつつ、気丈にも眼下のダンタロスを見据えた。
「この力を手に入れたときから、ずっと考えていますの。どうして私なの、どうして私がこんなことしないといけないの、って。お二人を見ていますと、自分を恥じ入りたくなります」

マリアの独白を聞いた里里と弓は互いを見合わせた。そして、呆れた様のため息を吐いた。マリアは二人の様子に、首を傾げた。

「いや、それ私達も同じ。泣き出したいくらい怖いよ」

「ああ……正直言つて、今すぐ家に飛んで帰って布団の中に隠れたいくらいだ」

ほら、これ見てよ。

里里が片手をマリアに差し出す。その腕は気の毒に思えるくらい激しく震えていた。

私の足を見る。

弓がそつと一歩マリアに足を向ける。その足は細かく震え、武者震いから来るものではないことが容易に分かった。

その姿を見て、マリアは悟った。

二人は決して勇敢な戦士でもなければ、それだけの心構えが出来るわけでもない。表面ではどれだけ気丈に振舞っていても、中は自分とそう変わらない、普通の女の子なのだということを。

それが分かったマリアは、それでも2人のように立ち向かえそうに思えなかった。

目を伏せて今にも膝を抱えそうなマリアを見て、里里はおもむろにマリアの胸を掴んだ。

「……？」

さらに、右に左に、ぐにぐに引つ張る。マリアの大きな胸は、里里の手に従って大きく形を変えた。

「……きゃあ！」

同性とはいえ、胸を激しく揉まれていることに思い至ったマリアは、慌てて里里の手を振り払った。両手で胸を隠し、羞恥に頬を赤く染めた。

「な、なにするんですか!？」

でけー、と自分で揉んでおいて呆然としていた里里は、マリアに怒られて我に帰った。

「いやー、あんまり緊張していた様子だったので、緊張をほぐす意味を込めてやったのですが……逆効果だったね」

「なにやってんだ、お前は」

弓は呆れて、ため息を吐いた。そして、マリアを見つめた。

「でもさ、どれだけ怖くたってさ、逃げるわけにはいかないだろう？」

マリアは答えなかった。ただ、黙って里里と弓から視線を逸らした。

「私もさ、マリアさんの気持ち、凄く分かる。正直言って、私も逃げ出したい。こんなところさっさと逃げ出して、普通の日常に帰りたい」

「……どうして、そうしないんですか？」

マリアの継るような質問に、里里は頭を悩ませた。

「うーん……昔さ、何かの哲学の本を気まぐれに読んだことがあるの。そこにさ、こう書いてあったんだ。『人間とは元々逃げ出す生き物であり、逃げることは恥ではない。だが、逃げてはいけない時に逃げ出すことは恥である』ってね。これってさ、まんま今の状況に当てはまると思わない？」

里里は自分の胸に手を当てた。

「思えば、私達人間って、色んなことから逃げてきた。温暖化、環境破壊、水質汚染、それこそ自分達の都合の悪いこと全てから目を逸らしてきた」

里里の額に光が集まり、一瞬後には額から後頭部まで覆い隠すプロテクターが装着されていた。空気の排出音と共にプロテクターが下がり、目を守る。『視界センサーを戦闘モードに移行します』の文字と共に、鮮明に視界が解放たれる。

里里の両腕に光が収束し、光が武器を形作っていく。

『武器選択』から『バン・ガトリング』を選択する。数秒後には、両腕が巨大なガトリングに姿を変えていた。

翼を排出して、飛行体制に入る。翼の噴射口からわずかな駆動音が響くと、フワリと、里里の体が宙に浮いた。

「怖いけどさ……逃げ出したいけどさ……こればかりは逃げ出しちゃいけないことなんだ……この戦いから逃げ出すわけにはいかないと、私は思っているよ！」

里里は宙に身体を投げ出す。

一瞬の空白の後、里里は凄まじいスピードで空中を旋回し、地上のダントロスへ向かって突撃していった。

数秒後、凄まじい爆音とダントロスの咆哮と共にガトリングの射撃音がマリアの耳に届いた。

慌てて、マリアは里里の行方を……追おうとして、弓の腕が目の前を遮った。

驚きに満ちた瞳を、弓に向ける。帰ってきたのは優しい眼差しだった。その眼差しが辛くて、マリアは視線を逸らした。

「どうして止めますの？」

「……無理して戦う必要はない。私も里里も、あんたが逃げてても軽蔑することもなければ、恨むこともない」

「……弓さんと里里さんは仲がよろしいですね。少し、羨ましいですわ」

里里、ねえ。

弓の脳裏に、ここに来てからの一時間弱の時間が甦ってくる。同時に、目の前のマリアの笑顔も浮かんだ。

遮っていた腕を下ろす。だが、マリアはもう歩みを止めていた。「そうさな、仲が良いかどうかは分らん。ただ、気を張る必要がないというか、素の自分を見せてもいいと思えるだけだ。不思議と、あいつとは仲良くやっていけそうなんだ……それはマリア、お前にも言えることだ」

その言葉に、マリアは目を見開いた。

「何だか、お前ら二人とは何年も前から付き合ってきたみたいな感覚だよ。実際は会って半日も経っていないのにな……私は里里と違って、哲学の本なんてこれっぽっちも読まない。だけど、これだけは言える」

弓はゆっくり腰を落とし、体中に力を溜める。両腕の刃が鈍い光を放った。

「今まで散々地球に甘えてきたんだ。たまには地球に甘えられるのも、いいと思わないか？」

弓は空中に躍り出た。重力にしたがって、すぐにマリアの視界から弓の背中が見えなくなった。

急いで縁から見下ろすと、弓が体ごとダントロスに突っ込んでいたところだった。内部からダントロスの内臓を、頭を、切り裂いていた。

「……すっー………はぁー……」

大きく、深く、深呼吸した。それに合わせて影が蠢き、一部が分離する。マリアの思いに呼応し、影の者達の身体も変化する。より強く、より鋭く、レゴンを殺すための身体に変化していく。

影達の体に変化していくのを見たマリアは、苦笑した。ある意味、この影達は自分より正直だ。

「……そうですね、今まで甘えてきたんですものね。たまには親孝行をするのも、子供の務めというものでしょうね」

フワリと、スカートが風に揺れる。影がマリアの背中に集まり、黒い翼を形作った。

羽ばたくと、突風が身体をすり抜けて眼前に抜けていった。翼は力強く風を捉えていた。

そうですね……私も……いや、そうではありません。そんな小難しい理由ではなくて……要は。

「これから仲良くやっていけそうな友達を、ここで見捨ててなんてできませんもの」

ニコリと、マリアは微笑んだ。一瞬後、マリアは2人にならって

空に躍り出た。

さあ、戦いだ！

爆音が里里の身体を揺さぶる。急激な方向転換によって生まれた慣性を見捨て、一気に加速する。体がバラバラに四散するような感覚を味わいながらも、里里は無我夢中で空を飛びまわっていた。

視界がグルグル回り、今まで使い方が分からなかった丸い照準が、右に左に踊り、ダンタロスを捕捉する。

里里は今、自分が何をしているのか分からなかった。どこか遠くから自分を眺めているような、現実感のうすれた頭で敵を葬っていた。

「――！！」

叫んでいるのか、泣いているのか、里里には分からない。ただ、自分が声にならない悲鳴をあげていることだけは理解できた。

両腕のガトリングに意識を集中させると、頭の中で引き金が引かれて、弾丸が放たれる。普通の実弾とは違い、ダンタロスの身体に命中するとわずかに爆発、四散し、弾丸は消失した。後に残るのは、肉体を抉られたダンタロスだけ。

だが、それでは効果が無かった。

瞬く間に抉られた部分に肉が盛り上がり、修復される。一瞬で完全に治癒を終えると、ダンタロスは奇声を上げて触手を振るった。

凄まじい速度で触手が里里目掛けて伸びていく。数十本、数百本という触手の雨を紙一重で避けつつ、里里は左腕に意識を集中させる。

『レーザーブレード』の文字が視界の隅に表示され、瞬時に左腕のガトリングが光の粒子に変わり、別の武器へと変質していく。

翼の噴射口から青白い光が噴射され、里里は再び閃光になる。

触手の雨を掻い潜り、通り過ぎざまにレーザーブレードで触手を切り落としていく。そして、一体のダンタロスの首を掻く攫うように左腕を振り払った。

ダントロスの無くなった首から、大量の体液が噴出す。それは紫色で、とても不気味だった。

「たりやああああ!!」

そのまま上空に飛び、反転。右腕のガトリングを下方に向けた。

「そのまま死んでいろ——!!」

ガトリングの銃口から、毎分数百発の弾丸が放たれる。文字通り、弾丸の雨がダントロスの身体を貫いた。

ダントロスの断末魔の悲鳴を耳にしつつ、さらに弾丸を打ち続ける。

そのまま腕を横に振るい、別のダントロスも打ち抜く……と、視界の端に見過ごせない事態を捉えた。

「弓ちゃん!」

今にも弓の命を奪おうとしているダントロスに銃口を向けて、引き金を引いた。

弓は自分が獣になったような錯覚を覚えていた。

体中の血が沸騰しているような、不思議な高揚感。それと同時に、体中の血が凍りつくような、不思議な恐怖感。相対する二つの感覚に戸惑いながらも、弓は戦っていた。

右腕の刃を振るえばダントロスの触手が切り裂かれて吹っ飛んでいく。左腕を突き出せば、容易にダントロスの腹を貫いた。

そのまま身体を押し込み、腕に力を込めて、一気に引き上げる。腕の刃が内臓を引き裂き、心臓を引き裂き、頭を引き裂いた。流れるように身体を反転させ、さらに右腕を横に一閃。頭は四分割された。

だが、ダントロスは一体ではない。開いた穴から次から次へと這い出てくる。一体が弓の背後から、消化液を撒き散らしながら威嚇した。

「ぎゅああああああ!!!!」

普通の人間が聞けば、発狂してしまいそうなくらいおぞましい咆哮。本来なら、そこで決着が付いていた。

だが、今の弓は人間ではない。古代の生物、恐竜を捕食していた最強の狩人の力を受け継いだ元人間だ。そのため、ダントロスの咆哮に耐えることが出来た。

「ぎゅあああー!!」

疾風のように放たれたダントロスの触手が、弓のわき腹を打ち抜く。あまりの衝撃に、弓の体が、くの字に曲がった。

「ぐおおー!!」

堪らず、呼吸を乱す。そこに雪崩のごとく触手の乱撃が降りそそぎ、弓の身体を滅多打ちにして吹っ飛ばした。

地面を削りながら弓は転がるように滑っていく。そのまま廃ビルの壁にぶつかり、コンクリートを粉砕して、止まった。

ダントロス達が一斉に触手を弓に向けると、黄色い消化液を自分目掛けて噴射した。

コンクリートを、地面を、鉄骨を、弓の身体を、消化液が無差別に溶かしていく。泥のように解けていくあらゆる物を見て、ダントロスは歓喜の声を上げた……途端、弾丸の雨がレゴンらに降りそそいだ。

「ぎゅうおおああー!!」

ダントロス達は消化された液体を吸収するのを後回しにして、空を飛ぶ里里を打ち落とそうと触手を伸ばし、向かっていった。だが、全部ではない。そのうちの何体かは、消化された餌を食べようと、下半身を蠢かせる。

その考えが、彼らの命取りだった。

「おいおい、こんなときに食事か？ 随分と余裕じゃないか」

何時の間にか、ダントロスの直ぐ側まで弓が接近していた。そのことにダントロスが気づくよりも早く、両腕を二体のダントロスに伸ばす。一気に刃が伸び、二体の首が地面に落ちる。そのまま腕を振るい、落ちた頭を真二つにした。

唯一残ったダントロスが、消化液を弓に浴びせる。黄色い液体が弓の身体に降りそそぎ、黒い皮膚を黄色く染めた。白い湯気が立ち、弓の足元が溶けていく……が、弓は平然とダントロスを見据えた。頭を振り、髪に付着した消化液を振り払う。後には、全く影響を受けていない、元のままの銀髪があった。

ふうーっと、高ぶった熱を口から放出する。

「効かないな……そんな攻撃じゃ、私を倒せないぞ。たくさん生えた触手は見掛け倒しか？ その消化液は、パイプの汚れ落としか？」
一歩、消化液の水溜りを踏みしめる。もう、湯気は出ていなかった。

さらに一歩、踏み出す。

すると、ダントロスは怯えたように後退した。

弓は笑った。その笑顔は捕食者特有の、勝ち誇った笑みだった。

弓の右腕の皮膚が、盛り上がる。肘の辺りに小さな空洞が出来る。そこに大量の空気を吸い込み始めた。

「逃げるつもりか？ 残念だが、それは許されない話だ……元々、この戦いを挑んだのはお前達なんだからな」

右手が変形し、大きな穴が掌に出来る。瞬く間に右腕が高熱を持ち始めて膨張し、黒い皮膚が赤く輝き始める。肘から体内に取り入れた空気を圧縮しているために起きる現象だ。

逃げられないと判断したダントロスは一転、押しつぶそうと弓に飛び掛る。巨体からは想像もできないくらい高く飛び、弓の眼前に粘液で濡れるダントロスの下半身が迫ってくる。推定体重2トン。高さから考えれば、衝撃は軽く数十トンから数百トンに達するだろう。

それほどの質量を持った一撃を止めることなど、不可能に近い……はずだった。

「ふん！」

だが、弓は止めた。数十トンの、数百トンの衝撃を。

「くらえ！」

限界まで空気を取り込んで膨張した右腕を、そのままダントロス
の腹に向ける。掌に開かれた穴から、数千度にも達する高熱球が放
たれた。

高熱の弾丸がダントロスの下半身を焼き尽くす。

「ぎゅあああああ！！！」

ダントロスは断末魔の悲鳴を上げた。胴体を焼き尽くし、触手を
焼き尽くし、頭を焼き尽くした炎は止まることなく、辺り一面の消
化液を瞬時に蒸発させた。

大量の空気をわずか数センチ立方メートルにまで圧縮すると、そ
こには膨大な熱エネルギーが発生する。右腕全体を圧縮機に使い、
筋肉を使ってポンプのように大量の空気を体内に取り入れ、圧縮す
る。弓はその圧縮された熱エネルギーを弾丸のように打ち出したの
だ。

煙を吐く掌の穴を塞ぎ、盛り上がった皮膚が元に戻る。右腕の刃
を、用心のためさつきと同じように伸ばした。

「……ふう、結構疲れるな、これ」

右腕を軽く振りつつ、炭どころか塵となってしまったダントロス
の成れの果てを見て、弓はこの力を使う場面を考えようと思った。

「でも、まあ、まさかコレが、ここまで威力があるとはね……」

本気で使わなくて良かった。弓はため息を吐いた。

この力は元々、偶然から発見した能力。人狼の力に慣れるという
名目の元、多少は練習を重ねた。それでもまともに放てる自信は全
くなかったし、なによりこれほどの空気を圧縮したことも無かった。
そのことを、ダントロスは知る由も無いだろう。

そういえば、どこかに向かった残りの奴らはどうしているのだろ
うか？

辺りを見回すと、すぐに見付かった。里里の放った弾丸が残った
ダントロスの頭を吹き飛ばしていた。

ジッと様子を見ていると、里里と目が合った。こちらに向かって
飛んできたので、手を振った。

もしかして、さつき援護してくれたのは里里なのか……借りが出来たな。

里里は弓の側に着地すると、素早く背中の中翼を収納した。顔半分を覆うプロテクターで目元は見えないが、口元は弧を描いていた。

「大丈夫だった？ 何か危なそうだったから援護したんだけど、もしかして邪魔だった？」

左腕のブレードを腕に戻し、里里は申し訳なさそうに頬を掻いた。「いや、助かったよ。初めて力を使って戦ってみたけど、やはりそれなりに得手不得手があるみたいだ。一対一なら遅れを取ることはないんだが、複数になると……里里みたいにガトリングとかも使えないし、一度に複数を攻撃できないのが私の難点だな」

「そうかな？ けれど、とても身体が頑丈みたいだね。弓ちゃんが攻撃受けたとき、本当に駄目かと思ったもん。私なんて、一発わき腹に食らっただけっ……！」

話の途中で、里里は左脇を押さえて蹲った。慌てて弓も膝をついて里里を気遣う。優しくレオタードに包まれた脇に指を這わすと、若干膨らんだ感触が指に伝わった。

これは……内出血か？

空気の排出音と共に、プロテクターが上がる。脂汗がにじんだ顔が、弓の眼前に晒された。顔全体が血の気を失ったように青白くなっていた。

光が右腕に収束し、元の腕に戻る。弓は辺りを警戒しつつ、里里を見つめた。

「大丈夫か？ わき腹を怪我したか？」

里里は首を縦に振った。

「触手がわき腹に直撃してね……自分の身体を検査してみたけど、肋骨の役割になっている強化合金にヒビが入っているみたい。血管も裂傷して、軽い内出血を起こしているわ」

重症だな……あれ、待てよ。

「血管？ 里里、お前の身体って、いったいどういう構造になって

いるんだ？ アンドロイドだし、オイルか何かじゃないのか？」

弓の指摘に、里里は首を傾げた。

「ああ、そのこと。弓の思っている通りだよ。ただ、私の身体の中に流れているのって普通の血液じゃなくて、血液に似せた擬似オイルみたいなものが流れているから」

「……そんなことも分かるのか。それって、血と何か違うのか？」

「厳密に言えば違うけど、ほとんど同じようなものと思っていいよ。輸血とかには使えないけどね」

「まあ、オイルだしな」

「ああ、そういう意味じゃなくて」

パタパタと里里は両手を振った。途端、痛みにうずくまった。慌てて、弓は里里の肩に手を置いた。もちろん、棘が当たらないようにしながら。

「おい、大丈夫か？」

「うゝ、痛い……」

「病院……100%閉まっていると思うが、とりあえず行くか？」

里里は首を横に振った。

「大丈夫、心配しないで。傷自体は命に別状はないみたいだし、体内のナノマシンが機能しているから、一週間程度で完治するわ」

さすがに夜間外出して怪我して帰ったらどんな事態になるか……。

里里は面倒な事態になりそうな未来を想像して、痛みとは別の、苦悶の表情を浮かべた。

「……そうか、良かった。ところで、その診断も体内の計器が何かで知ったのか？」

里里は首を縦に振った。どうやら、喋ると傷が痛むらしく、必要なこと意外は口を開きたくないみたいだ。

まあ、マリアも戦っているし、今ここを離れるわけにはいかないか……そういえば、マリアはどうしているのだろうか？

「里里、ちょっと待っている」

頷くのを確認してから、ダントロスが出てきた地面の穴へ向かつ

た。

何度が振り返って里里の近くにダンタロスが接近していないことを確認しつつ、穴の縁に立った。

……近くで見ると大きいな。

直径5メートル程度の穴を見下ろし、弓はそんなことを思った。よく見ると周辺の地面が濡れている。ダンタロスが出した粘液で、地面がぬかるんでいるようだ。

穴の中を覗いてみるが、暗くてよく分からない。ただの穴なのだが、ダンタロスが出てきた穴だと思つと、薄気味悪く思えた。いったどれくらいの深さがあるのだろうか？

考えたところで答えが出るわけがない。弓は踵を翻して、里里の元へ向かった。

弓は背中に担いだ里里に振動がいかないよう細心の注意を払いつつ、マリアの行方を追った。廃ビル自体、それほど大きな建物ではないが、それなりの面積はある。ビル裏から聞こえてくるダンタロスの悲鳴を頼りに、ゆっくり歩を進めた。

里里は銀髪に埋めていた顔を上げた。

「私なら大丈夫だから、もっと急いでいいよ」

言外に、マリアが心配だという思いを込めて。

その言葉に弓は立ち止まった。確認を取らないで、担いでいる里里の身体を抱えなおした。一瞬、里里の体が浮き、弓の背中に深く納まった。

軽い衝撃だが、効果は抜群であった。わき腹から全身に伝わる激痛に、里里は歯を食いしばった。全身の痺れと共に、脂汗が頬を流れていく。

「怪我人は黙っている。大丈夫、あいつも私達と同じだ。そう簡単にくたばったりはしないさ」

痛みに唸っている里里に構わず、再びゆっくり歩を進めた。

痛みを長時間感じていると、だんだん痺れが全身に伝わり、思うように体が動かなくなること、里里は始めて知った。

骨折ではないと侮っていたけど、ヒビが入っただけでこれだけ痛いなんて……健康って、とっても素晴らしいことなんだね。

里里は弓の背中に身体を預けつつ、そんなことを思っていた……と、里里の脳裏に疑問が生まれた。気になった里里は、弓に尋ねようと思った。

「ねえ、弓ちゃん」

「ん、何だ？」

「私みたいなアンドロイドがいた古代ってさ、どうしてこんな凄いものが作れるのに滅んだんだろうって？」

「……クマも言っていただろ、その凄いものの使い方を間違えたのさ」

「なるほど」

妙に、納得できた。

弓の足が止まった。

どうしたのかと弓を見ると、弓は神妙な横顔を見せた。顎で、前方の曲がり角を示す。その先から、なにやらダンタロスの悲鳴が聞こえてきた。

「そこを曲がったらビルの裏だ。里里、少し揺れると思うが、我慢してくれ」

「うっ……うん、分かった」

弓の首に手を回し、腰に足を絡める。しっかり捕まったのを確認した弓は、おそろおそろ曲がり角から、顔を出した。

そして、硬直した。

「……ん、ねえ、どうしたの？」

いつまで経っても動こうとしない弓を不思議に思い、里里も身体を伸ばして横から覗き込む。そして、弓と同じく硬直した。

二人の視線の先……そこには、一方的な虐殺が行われていた。

マリアはレンガの塀の上に腰を下ろして、戦況を観戦していた。

「えーい、影さん達、頑張ってくださいーい」

マリアの気の抜けた声援が場違いに響く。だが、それを咎める人はいない。

「ぎゅああああー!!」

一体のダントロスが奇声を上げて、マリアに触手を伸ばす。だが、その触手がマリアに届くよりも早く、影の者達が俊敏に触手を粉みじんに切り裂いた。そのまま流れるように数人の影がダントロスになだれ込み、瞬く間に頭を切り落として、身体を切り裂いた。

その様子を見ていた弓は、ポツリと呟いた。

「……増えているな」

「……うん、確か五人くらいだったよね」

視線の先には、影達の集団がダントロスに戦いを挑んでいた。その数は多く、今や20人を超えた影達は、連携してダントロスを撃破していた。

あるものは身体を巨大な斧に変えて、あるものは巨大な剣に変えて、ダントロスを切り刻んでいく。

ダントロス達も負けてはいない。消化液を噴射したり、触手をなぎ払ったりして抵抗するが、影達の性能の前には無意味に等しかった。

一体のダントロスの触手が、一体の影の腸を貫く。そのまま触手を鞭のようにしならせ、影の身体を二つに千切った。地面に崩れ落ちる影……その外形がドロリと崩れ、蠢く影に戻る。それが一箇所に集まっていき、数秒後には人間の外形を持つ影の者が復活していた。

先ほど真つ二つにされたことなど気づいていないかのごとく、果敢にダントロスに戦いを挑む影。よく見ると、他にも何体か負傷している影が居たが、すぐに形崩れ、集まり、元の姿に復活していた。業を煮やしたダントロスが、マリアめがけて消化液を飛ばす。だが、すぐさま数人の影達マリアの前に立ちはだかり、盾となった。

影の体からこぼれ落ちた消化液が、地面の土を消化し、液体に変

えていく。白い湯気が立ち上るが、影は何処吹く風と言わんばかりに、消化液を飛ばしたダントロスに突撃していった。いくら形作って触れることができていても影は影。空気を溶かすことが出来ない同様、影を溶かすことなど出来ないのだろう。

もはやビル裏は、影達によるダントロスのリンチ開場と化していた。

弓は背後の里里へ振り返った。

「なあ、あいつ力に慣れていないっていつていたよな？」

里里は力強く頷いた。

「うん、兵隊を作るのと空を飛ぶことしか出来ないって」

「……あの影、反則だと思わないか？ 無限一アップを決めたマリオより酷いぞ」

「うん、チート使っているね。倒しても復活する敵とか、数分で投げ出したくなる糞ゲーとかにありそうだよ……」

チート、という言葉の意味は弓には分からなかったが、おおその意味は悟れた。

「……始めからあいつ一人に任せても良かったのかもしれないな」

「……それは、さすがに……ねえ」

2人は互いに顔を見合わせ、深々とため息を吐いた。この後5分程度、最後のダントロスが影達に仕留められるまで、二人はそつと遠くから観戦することにした。

影の者を、自分の影に戻しているマリアに、弓と担がれているマリアは足早に近づいた。

ふと、マリアの視線が二人を捕らえる。フワリと彼女は綺麗な笑みを浮かべ、手を振った。弓は振り返せないで、代わりに里里が手を振った。

マリアの側まで歩み寄る。最初に口を開いたのは、マリアだった。「ご苦労様です……お二人とも、お怪我は……ああ、里里さん、ど

うしたんですか?!」

心配そうに里里を見つめる。里里は、手を振って安心の意味を伝えた。

「あはは、大丈夫。ちょっと肋骨にヒビが入った程度だから……それにしても、マリアちゃん凄かったね。あの影さん達、無敵のソルジャーだね」

「そんな……お褒めになることでもありません」

「そっかな?」

「そうですよ」

にこやかに会話する二人。弓は自然と半眼になるのを抑えられなかった。

いや、真つ二つにされても復活する兵隊は凄いと思うのだが……。だが、口には出さなかった。空気くらい、ある程度読めるつもりだからだ。

「ところでさ!」

そんな弓の内心に気づいていない里里が、突如声を張り上げた。

弓はあまりの音量に、思わず首を竦めた。

「五月蠅い、耳元で大声出すな!」

あ……ごめん。里里は申し訳なさそうに頭を掻いた。今度は幾分声を抑えてから話し出した。

「ところで、倒したレゴン達ってどうなるのかな? ほっといたら大騒ぎになると思うんだけど」

そういえば、そうだ。弓とマリアは動かなくなったダンタロスの死骸を見つめた。

里里の疑問は最もであった。自然界の範疇から外れた生命体。どう考えても生物の常識を根本から覆す死体なのだ。これがもし、表ざたになれば、それこそ事態は三人の收拾の付かない事態になる。それこそ、レゴン狩りを始めてもしたら、いったいどれほどの被害が出るのか、三人には想像も付かない。

なにせ、レゴン達は普通の武器では倒せないのだ。それこそ、偶

然にでもレゴンと接触したら最後、対抗する術がない。つまり、レゴン達に大量の餌を自分から与えるのと同じことなのだ。

三人が思い思いに頭を悩ませていると、ふと、マリアが死骸の異変に気づいた。

「あ、皆さん、あれを見てください」

2人はマリアが指差す先、ダンタロスの死骸を見て、驚愕した。ダンタロスの死骸から、大量の蒸気が噴出し、瞬く間に姿を消していったのだ。それも一体だけではない。次から次へと、他の死骸からも蒸気が噴出し、空気に溶けるように姿を消していく。

「うわ……何か消えていつているけど、なんで？　もしかして、乾燥すると消えるの？」

里里は気味悪そうに死骸を見つめる。マリアは何度か首を傾げた。「いえ……これが彼らの普通なのかもしれません」

「どういうことだ？」

弓の問いかけに、マリアは自信なく瞳を彷徨わせた後、憶測ですが、と付け加えた上で、仮説を述べた。

「クマさんの話だと、レゴン達は総じてエネルギー体です。本来は肉体を持たない彼らは、意思の力で肉体を保っていた。ならば、死ぬことで意思を失ってしまったら、残るのはエネルギーだけ……それが蒸気という形になって、消失していつているのではないでしょうか」

あくまで、憶測ですけど。と、マリアはポツリと言い残した。

弓はマリアの憶測を何度か頭の中で反芻させた。

「……まあ、実際はどうか分かんが、勝手に消えてくれるなら手間も省けるし、他の人の目に留まることもなくなるから、私としてはどっちでもいいかな」

「うーん、そういうもんかな？」

「おそらく、そういうことでよろしいかと」

そうなんだ……それじゃ、今回はこれで終わり？

戦いが終わった。その一言が現実として里里の中をぐるぐると回

る。知らないうちに張り詰めていた体中の緊張がほぐれていった。

だが、それとは別に、負傷したわき腹からの激痛もより強く、はつきり感じるようになった。ズキ、ズキ、と痛むたび、高鳴っていた鼓動が治まり、冷や汗がにじみ出てくるのが分かった。

尋常じゃない里りの様子に、マリアは顔をしかめた。

「里里さん、さっきから苦しそうですけど、どうかしましたか？」

「うう、ちよっとわき腹をやられて……怪我自体、一週間もあれば治る程度だから」

マリアの顔が里りのわき腹に近づく。こんなときではあるが、里りは同性とはいえ、自分の体をまじまじと見つめられることに軽い羞恥心を覚えた。

「実際、病院も全部閉まっているだろうし、救急車を呼ぶにも、理由がな……下手に突っ込まれても困る」

弓の補足に、里里もうなずいた。そう、実際に面倒なのだ。例外があるものの、普通、日本の病院はたいてい予約制だ。もちろん、予約無しでも大丈夫なのだが、予約なしの外来だと予約が入っていない時間にしか医師も診察できないので、長時間待たされてしまう。病院の診察時間が終わった後でも機能している救急医療というものもあるが、これはよほどのことでない限り利用するべきではない。これは、突然の事故などによって緊急医療が必要な人を対象としたもので、そういったところを利用すると確実に家族か親類の方に連絡が入る。しかも、緊急医療の方は通常医療よりも治療代が掛かるようになっているので、なおさら行くのを躊躇ってしまう。

「まあ、痛み止めくらいは飲んでいた方がいいと思うがな」

「分かっているよ、それくらい」

「本当か？」

「それくらいするよ」

里里と弓の掛け合いに、マリアはクスリと笑った。

「お二人とも、本当に仲がよろしいですね。実は前から友達だった、とか？」

「いや、今日始めて会ったぞ」

「私も、なんか馬が合うというか」

「ちくわの友というか」

「それを言うなら竹馬の友、ですわ」

「ふひひ、間違えてやんの」

弓の頭に指をぐりぐりと押し付ける。弓は無言で里里を抱えなおした。苦悶の表情で黙ってしまふ里里を見て、マリアは口元に手を当てて笑った。それを見た弓もおかしそうに笑い、里里も時折唇の端を引きつらせながらも、笑った。

ひとしきり笑うと、弓は背後の里里へと首を向けた。

「それじゃあ、今日のところは帰るが……里里はどうする？ このままおぶってもいいぞ」

「うーん、それもいいけど……。里里は首を傾げた。

「やっぱり空飛んで帰るよ。空も白くなり始めたし……。ちよつと待って」

意識を集中させる。里里の視界の端に数字が表示された。

「えーっと……。うわ、もう5時回っているじゃない」

「……お前の身体、けっこう便利な機能がいっぱいだな」

ちよつと羨ましい。弓は素直に思った。

「もう5時なのですね……。なんだか、とても慌しい夜でした」

「慌しい夜……。ゴクリ。なんだか背徳的な響きが……」

「ねーよ」

ペチン、と弓は里里の頭を軽く叩いた。それが思いのほか傷に響いたのか、里里は息を呑んで呻いた。

「い、痛い……。弓ちゃん、さっきは優しくかったのに……」

目を細めて弓を見つめる。だが、弓はあさつての方向を見ていた。おまけに口笛まで吹いていた。

「そんだけ元気なら大丈夫だ。心配する必要はない」

「うっ、酷い……。マリアさん、痛いよー」

里里の哀願に、マリアは瞳を伏せた。そして、黙って両腕を広げ

ると、里里を優しく抱きしめた。マリアの平均を大きく上回る二つの塊が、里里の顔を左右から挟みこむ。ああ、身長差。黒いシャツは見た目より薄く、マリア自身の体温を、弾力性を、ほとんどダイレクトに里里に伝える。

まさか抱きしめられるとは思ってなかった里里は呆然とされるがまま。弓はなにをしているのだといわんばかりにため息を吐いた。

「……おいマリア、お前、里里を抱きしめて何してんだ？」

だって……マリアは消え入るような声で弓に返事をした。涙で濡れた瞳が弓を見つめる。

思わず、弓はマリアに謝りそうになってしまった。寸前、なんとか耐えることはできたのだけど。

「おい！？　なんでいきなり泣いているんだよ！」

「え？　泣いているの？　マリアさん？」

二つの塊が邪魔して、里里にはマリアの顔色を伺うことができない。仕方なく顔を上げるが、それでも見えなかった。これが生まれ持った実力の差か。里里の心に虚しさにも似た切望感を覚えた。

グス、グス、と鼻を噉ると、マリアは口を開いた。

「よ、よく考えたら……」

「よく考えたら？」

「一週間って、すごい大怪我じゃないですか！？」

「……いや、たしかに大怪我だけど、そこまで気に留めるほどの大怪我ってわけでも……」

「何を言っているんですか！　昔、私が捻挫したとき、病院に3週間も入院しました！」

「それ捻挫だよな！？」

弓の質問に、マリアは力強く頷いた。

「ええ、捻挫です。医師からは全治3週間と言われました。父と母が大事を取って、少し入院を伸ばしたんです」

「なんで3週間に伸ばすんだよ……捻挫なんて長くて2日だろ？　私が捻挫したときは1時間休んだただぞ。どんだけ過保護なんだ

よ……」

「……過保護かどうかは置いて、里里さん。捻挫ですら完治に3週間も掛かってしまうときがあるんです。もしかしたら、里里さんの怪我也、実は……」

「は、ほへははひ」

胸に顔を埋めたまま、里里が尋ねる。二つの塊の圧力から漏れた空気がマリアを震わした。

「やん、里里さん、くすぐったいですわ」

「ほへん」

「……とにかく、里里の怪我はそこまでたいしたことじゃない……らしい。里里が嘘についていなければの話だが……」

両腕を伸ばし、マリアの優しい包囲から逃れる。ぷは、里里は一息入れた。

「嘘じゃないって。マリアさんも心配してくれるのは嬉しいけど、私は平気だよ」

そうですか……無理はしないでくださいね。そう言って、マリアは里里から離れる。ふう、と里里はため息を吐いた。

「……」

「……」

「……」

……しばらく、無音の空気が流れる。特に気まずいというものではない。気の置けない友達との会話に時折できる、心地よい間だ。その沈黙を破ったのは里里だった。

「それじゃ、解散といきますか」

その案に、他の二人も同意した。

「だな。ここに居ても始まらない。多分、クマも戻ってこないだろうし」

「わたくしも、そろそろ帰らないと……源一郎が心配するわ」

「源一郎……とな」

里里の瞳が怪しく光る。弓は慣れたのか、もう何も言わなかった。

「そいつはマリアさんの……これ？」

里里は弧を描く口元を片手で隠しつつ、もう片方の手で小指を立てた。それを見て、マリアは首を傾げると、自分も小指を立てた。

「すみません……これは、どういった意味なのでしょう？」

「むう……知らないの？」

「はい……お恥ずかしながら」

「うーん、そうか……つまり、恋人ってこと。小指を立てて、その源一郎っていう人は、マリアさんの恋人かって聞いているの」

「……恋人？ 源一郎が？」

「それ以外に誰が居るの？」

マリアの脳裏に、自分と源一郎が中むつまじくしている光景が浮かぶ。だが、どう考えてもそれは恋人というより、お爺ちゃんと孫娘だ。それ以上でもそれ以下でもない。

そう考えると、マリアはとてもおかしく思い、クスリと笑った。

源一郎のことを知らない里里は、もしや本丸か、と息を荒げた。ちよっと、興味を引かれた弓も、聞き耳を立てた。

「おお、もしかして図星ですかい、奥さん」

「うふふ、私は奥さんではありません。まだ結婚していませんもの……源一郎は、家で働いている執事ですわ。年齢は、そうですね……今年で70歳だったかしら」

なぐんだ。里里はつまらなそうに唇を尖らせた。聞き耳を立てていた弓も、もう答えが分かったので事の成り行きを右から左に聞き流すことにした。

「うーん、年上好きっていう線は？」

「ありません」

「老いらくの恋？」

「それもあります」

「お爺ちゃんと孫？」

「それが一番正しいかと」

「その源一郎って、どんな人？」

「とても遅しいご老人、というのが一番分かりやすいでしょうか？」
「拳で地震止めたりできる？」

「それは出来ないと思います。ただ、空手5段、柔道5段、剣道四段、合気道3段の腕前ですので、そこらの若者には負けないと、この前話してくれました。」

「……なんというパワフル爺ちゃんだ。彼氏なんか作った日には殺されるかもね、その爺ちゃんに」

「それは……いくら源一郎でも、そこまでは……」

「あ、目を逸らした」

何やら、無駄話が続いている。このままでは、日が昇ってから気づくかもしれない。そう思った弓は、両手を叩いた。その音に、里とマリアは弓の方に視線をやった。

「おしゃべりするのはいいが、もうそろそろ本気でやばいぞ。私はもう帰るが、二人はどうする？」

「あ、やばい」

本当にギリギリの時間であることに思い至った里里は、慌てて翼を出す。四つの噴射口に青白い光が点ると、里里の身体はふわりと空中に浮かんだ。

「それじゃ、弓、マリアさん、多分、また会えそうだから、ばいばい、とは言わないよ……またね！」

それだけを言うと、里里は返事を聞かないで空の彼方へ飛んでいった。遠くの空に青白い閃光がきらめき、消えた。

慌しく去っていった里里の姿に、二人はお互いに苦笑した。

「マリアはどうする？」

「私は来たときと同じように、蝙蝠に化けて帰ります。弓さんは？」
弓は両手の掌を上にして、肩をすくめた。わざとらしい態度だが、銀色の長い髪と、美人の外見からか、妙に似合っていた。

「あいにく、私にはそんな便利な能力はないから、歩いて帰るしかない。もちろん、変身はしないで、この姿でな」

意識を集中する。弓の身体から黒い皮膚が瞬く間に消えていき、

元の肌色に戻っていく。ほんの数秒で、弓は普通の女性になった。

「ちつとばかり、遠出の散歩になりそうだ」

「まあ、それでしたら、私が送ってあげましょうか？」

ぐにやり、と、マリアの影が蠢く。弓は慌てて断った。両手を前に突き出し、パタパタと手首を振る。

「いいよ。ダイエット代わりだ」

「……そう、ですか。それでしたら、私はこれで」

マリアは、ふわりと上品に頭を下げる。一瞬の、その立ち振る舞いから、彼女の育ちの良さが見て取れた。スーッと、マリアの身体が頭から黒色に染まっていく。完全に真っ黒になると、そこから小さな蝙蝠が顔を出して、空へと飛び立つ。その後すぐにもう一匹、さらにもう一匹と続き、瞬く間にマリアの身体は幾つもの蝙蝠となつて、明け方の空へ消えていった。

弓は蝙蝠たちを見送った後、大きく伸びをした。筋肉がほぐされていくと同時に、体中の疲れが外へ逃げていく感覚に酔いしれる。それが終わると、大きく深呼吸。手足を回す。屈伸もおまけに。

最後に、はあっ、とため息を吐いて、顔をあげる。

「さ、帰りますか」

そして、弓は廃墟を後にした。

戦いの後で：里里編

あの日から二週間が過ぎた。なんとか両親に気づかれることなく怪我也治り、手付かずだった宿題の処理に追われている里里の前に、クマは現れた。

クマはふわりとベッドに腰を下ろした。だが、里里は机の上に並べられている参考書と宿題から全く目を離さない。パソコン本体は机の端に置かれ、キーボードは机の下に立て掛けられている。そのキーボードは、どこか哀愁を誘っていた。とりあえず、クマは声を掛けてみた。

「……………あ……………もしもし……………」

返事は返ってこなかった。ふわりと宙に浮き、気づかれないように、そーっと、そーっと、里里の横顔を伺う。

そして、ちよつと後悔した。

鬼気迫る形相、という言葉が一番合うのかもしれない。それほど、里里の形相は凄まじかった。頬はこけ、顔色も青白く、瞳の白目には幾重にも血管が浮き出っていて、ウサギのように真っ赤に充血していた。よく見ると髪も手入れしていないのか、何本もの黒髪が明後日の方向に飛び出している。文字通り、寝る間も惜しんで、お風呂に入るのも惜しんで、宿題をやっているのかもしれない。黙々と風を送り続けている扇風機の音が、なぜか妙に怖かった。

だが、クマにもそれなりに事情がある。この後、弓とマリアにも話さなければならぬことなので、あまり夜遅く行くのは気が引けるからだ。

「……………もしもし……………里里……………」

「……………挫けないで、もう一度。」

「……………すいませーん、もしもし、聞こえますか？」

「……………」

「ちょっとでいいから、話を聞いてくれ」

「……………」

「ちょっと、心が折れる音を、クマは確かに聞いた。

「あの……里里さん……ちょっとでいいから……」

「……………後1時間」

「え？」

ポツリと呟くように囁いた里里の言葉に、クマは耳を澄ませた。

里里は続けてポツリ、ポツリと呟く。

「後……1時間くらいで終わる……話ならその後にして……」

「え、あ、ああ、分かった。一時間だな」

「……うん。ごめんね、我俣言って……」

「いや、いいんだ。お前達にも事情はあるだろうし、先に他の二人に話をしておくよ」

「……うん、ありがとう」

それっきり里里は黙々とシャーペンを走らせ続けた。クマは数秒、里里の後姿を見つめた後、ポン、と両手を叩く。スーッと、クマの身体は空気に溶けるように消えた。

戦いの後で：弓編

ああ、くそ暑い。暑すぎて苛々してきた。シーツもべたつくし、蒸し暑いし、どうにかならんのか。

ぴくりとも反応しないカーテンを見て、弓は忌々しく舌打ちをした。今日は熱帯夜なうえに、ほとんど無風なので、窓を開けてもほとんど効果がない。蒸し風呂の中という言葉が、しっくりくる状態だ。ベッドの上で涼しくなるのを待ってはいるが、いっこうに涼しくなる気配が感じられない。

扇風機の風に当たりつつ、うちわでパタパタと扇ぐ。温い風が弓の身体を舐めていくが、熱さが和らぐ気配は皆無だった。

布団はもちろんのこと、着ていたシャツとブラジャーはとうに脱ぎ捨てられ、部屋の隅で丸まっている。それでも耐えられなくなり、履いていたホットパンツもそこへ脱ぎ捨てたのはつい数分前。

そして今さつき、最後の皆も衣服の山に追加された。また一段、山が高くなったのを横目に、弓は額に張り付く前髪を払った。

「暑い……マジで暑い……暑すぎる……」

全身から汗が噴出す。普段は気にしていない平均以上の二つの塊が、このときばかりは憎い。色々と汗で蒸れるのがいただけない。というより、全身がいただけない。自分が骸骨だったなら、この暑さも鼻歌交じりでやり過ごせただろうか、とバカな考えも浮かんでくる。

ゴロリと横向きになり、扇風機を正面に見据える。温い風だが、あるとないたでは雲泥の差だ。谷間に流れた汗が気化して、体温を少し下げていく。少し、楽になった。

今なら眠れるかもしれない。弓はゆっくり目を閉じた。

「……………」

気が楽になったせいか、様々な音が弓の頭に入ってきた。

窓の向こうから聞こえてくる車の走行音。数十秒それが聞こえた

と思つたら、数十秒間、虫の鳴き声と、蛙の五月蠅い合唱が弓の頭に届く。そして、時折混じる風鈴の音。

ああ、なんかいいな、こういうの。

それらが一定のリズムで繰り返され、弓の意識を眠りへと誘う。少しずつ、考えることが億劫になっていく。いつしか、暑さも気にならなくなってきた。

明後日で夏休みも終わりが……早かったな。

もう寝よう。弓は睡魔に逆らうことなく、意識を手放し。

「ちよつといいか？」

たと思つた瞬間、声をかけられた。それは里里の元を離れたクマだったのだが、目を閉じている弓に分かるはずもない。重要なのは今、自分が生まれたままの姿でいることで、近くに知らないやつがいるということ。それはもしかして……。

そこまですを想像すると同時に、ほとんど無意識に放たれた拳が、クマの顔面に突き刺さった。

あれ？ やけに柔らかい。

弓はそう思つた。素早くベッドから起き上がって目を開けると、顔の辺りが凹んだクマの人形が、遠ざかっていくというシユールな光景が飛び込んできた。

あれ？ 何か怒らせるようなことしたか？

クマはそう思つた。遠ざかっていく弓を見つめつつ、クマは壁にぶち当たって床の上を転がった。痛覚なんてものはないので痛くはない。

「……………」

「……………」

クマの人形と裸の少女。文字にすればなにやらインモラルな想像を掻き立てられるのだが、この空間の空気にはインモラルのイの字も存在しない。それどころか、どうしようもない気まずさだけがあった。

「……………クマ、か？」

気まずさに耐え切れなくなった弓が、先に口を開いた。

「……ああ、そうだ」

ムクリと起き上がり、顔を上げる。それを見た弓は、慌てて口元を押さえた。彼女の両肩は何かを堪えているかのように震えていた。

「……なぜ笑うのを我慢している？」

「……い、いや、がまぶふ、我慢……くふふ……」

我慢していた。弓は力いっぱい我慢していた。理由は簡単。夜中に爆笑して怒鳴られるのが嫌なのと、原因は自分であること。それなのに笑ってしまうのはあまりに酷いと思ったからだ。

「……笑えばいいだろう？ 私は別に気にはしないが……」

「そういうわぶふ、くくくく、わけじゃない、くふふふ」

頼む、そんな顔で大人の対応するのは止めてくれ。見た目は愛らしいクマの人形なのに、言っていることは大人とか、今は駄目。顔が凹んでいる姿で渋い対応取らされてもこっちが困る。

「とりあえず、服を着たらどうだ？ 人間はたしか、家族間が繁殖行為のときにしか、他人に裸を見せないのだろう？」

もう、限界だった。服をきたらどうだ、で弓は倒れこむように枕に顔を埋める。家族間へ見せない、のあたりで吹き出した。

それからしばらくの間、弓のくぐもった笑い声だけが室内に響いていた。

「もういいか？」

「ひい、ひい、腹痛い、ああ、いいよ、もう大丈夫だ」

弓は苦しそうに腹を二、三回撫でた後、ベッドから両脚を下ろした。クマは弓のはしたない姿に、眉をしかめた……ように見えた。

「せめて服を着たらどうだ？」

「嫌だ、暑い」

「いや、しかし、年頃の女性が……」

「家の中だから家族以外に見られることはないから大丈夫だ」

「ああ、それもそうか」

なるほど。クマは納得した。ポン、と手を打った姿は、とても可愛らしい。弓は内心、可愛いな、と思ったが、口には出さないことにした。なんだか、失礼に思えたからだ。

「それで、わざわざ訪ねて来たってことは、何か話さなければなら
ないことがあるんだろ？」

「察しがよくて助かる……単刀直入に言おう。お前には、今後もし
ゴン達と戦ってほしいと頼みに来た。それが訪ねた理由だ」

ふむ……そうか。弓は顎に手を当てて、クマを見据えた。

「それなら私も単刀直入に返そう。今後も私はレゴンと戦い続ける。
それが私の答えだ」

「………お前、もう少し悩んでもいいのではないか？　そこまで
あっさり了承されるとは思わなかったぞ」

「ここで悩むくらいなら、始めから戦わず家に帰って布団の中に隠
れているさ。話はそれで終わりか？　だったら私は寝る」

そう言くと、弓はよっこいしょとベッドに寝転んだ。横向きに
なっているせいで、二つの塊が重力に負けてふにやりと潰れる。湿
ったシーツを鬱陶しいと思いつつも、大きな欠伸をした。

「……本当にそれでいいのか？」

「………」

もう、弓は返事を返さなかった。

「……後悔してはいないか？」

「………」

「……一つ、意地の悪いうえに卑怯な質問をする」

弓は黙って目を瞑っている。規則正しい呼吸は、傍目には寝てい
るように見えた。少なくとも、クマの目にはそう見えた。だから、
構わず話を続ける。

「お前はもう人間ではない。それは私にも変えられない事実だ。こ
れから先、お前は人間から迫害を受ける日がくるかもしれない。お

前を好いてくれる家族から嫌悪の眼差しで見つめられ、刃を向けられるかもしれない。それでも……」

「五月蠅い」

ポツリと呟いた弓の声は小さかった。だが、静かな室内には弓の声は力強く響き、クマの話を一声で断ち切った。

ゴロリと、弓は寝返りをうつ。クマへ後ろ頭を向けて、ふう、とため息をこぼした。

「いちいち確認しなくて、それくらい分かっているさ」

「だが……」

「それに、私を、私達をそうしたのはお前さんだ。あんたこそ、分かっているのか？」

「……それは……」

言いよどむクマ。弓は、はあ、とため息を吐いた。

「……全部分かっているさ。私はもう人間じゃない。女でも、高校生でも、日本人でも、不良でもない」

弓は片手を天井に伸ばす。意識を集中すると、すぐさま黒い皮膚が盛り上がって白い手を覆い隠していく。瞬く間に手の甲には牙のように鋭い棘が幾重にも生え、女性らしい指は鋭く、凶悪なものになる。丸く整えられていた五つの爪も、猛獣の牙のような鋭さを持ったものになった。

「大昔に滅んだ最強の生物の力を受け継ぐ、ただの化け物。それが私だ」

「……」

「否定はしないのか？」

「……否定してほしいのか？」

「ほしくないね。もし否定していたら、ぶん殴っているところだ」

逆再生をしているかのように、伸ばされた手から黒い皮膚が消え、元の白い皮膚が盛り上がっていく。ものの数秒で、弓の手は女性らしい丸みを帯びた手に戻った。

「後悔していない、とは言えない」

ポスン、と手がベッドの上に落ちる。

「けれども、後悔していることを、後悔はしていない。今は、それでいい」

「……どういう意味だ？」

クマは首を傾げた。だが弓は、話は終わりだといわんばかりに、追っ払うようにひらひらと手を振った。

「分からなければいいよ。こういうのは、私が理解できていればいいんだ……里里とマリアには聞いたのか、いまのこと」

「いや、まだ……」

「だったら早くした方がいいと思うぞ。もう夜も遅いし、早くしないと二人とも寝てしまいかもしれないからな」

お休み。弓は最後に大きく欠伸をすると、それっきり何も言わなくなった。

「……弓」

「……」

返事は返ってこない。耳を澄ませると、かすかな寝息が聞こえてきた。

クマは何も言わず、床に転がっていた布団を、弓に掛けた。暑いとはいえ、裸のまま寝ては風邪を引いてしまいかもしれないから。数秒、弓の寝息に耳を澄ませた後、クマはそこを後にした。

戦いの後で：マリア編

「もしかして起こしてしまったか？」

「いえ、寝る前でしたので、どちらかといえばグッドタイミングですよ」

すまなそうに頭を下げるクマを見て、マリアは月のように穏やかな笑みを浮かべた。

白くて細い、すらりと伸びた形よい指が、ベッド横に置かれた引きだし付きの小さなテーブルに伸びる。そこに置かれていたヘッドライトの電源を押すと、ほどなくしてヘッドライトに山 吹色の光が点る。ライトを中心に、真っ暗だった室内に温かみが生まれた。

お互いの横顔がライトに照らされ、秘密めいた不思議な空気が室内に流れる。

綺麗に整えられていたシーツを退けて、両脚をベッドから下ろす。その際、マリアが着ている足先まである特注のネグリジェが、ふわりとはためいた。

お互いの視線が交錯し、一瞬、沈黙が生まれる。だが、すぐにマリアに破られた。

「それで、今晚はどういったご用件でしょうか？ また、レゴンが現れましたか？」

「いや、そういう理由で来たのではない」

「まあ……それでしたら、今後もレゴンと戦い続けるにあたっての諸注意が何かでしょうか？」

それでしたら少しお待ちください。マリアはそう言うと、テーブルの引き出しに手を伸ばし、中からメモ帳とボールペンを取り出した。メモ帳の端をボールペンで書きなぐり、書けるかどうか確認してから顔を上げた。

「メモの用意ができましたので、どうぞ」

につこり、微笑むマリアを見て、クマは呆気に取られた。

「……え、あ、えつと、そうではなくて……」

「あら、諸注意ではありませんでしたか？」

「あ、いや、うん、諸注意といえば、諸注意……なのだろうか？」

「クマさんのペースで結構ですので、落ち着いてお話ください」

お言葉に甘えて、クマはいったんマリアに背を向ける。ふう、と大きく伸びをしてから、もう一度マリアへ向き直ると、穏やかな微笑みが出迎えてくれた。

「……諸注意と言っているのか分かんが、私は今後もレゴンと戦い続けてほしいと頼みにきた。それが訪ねた理由だ」

トン、と音もなくマリアは両手の掌を胸の前で合わせた。

「まあ、そうなんですか？」

「……うん、まあ、そうなんです」

「それでしたら、お受けいたしますわ」

ベッドに両脚を戻し、その場で正座になる。そして、両手の指をきっちり合わせて、静かに頭を下げた。

「何分、自分の力も扱いきれない未熟な身ではありますが、出来る限り精一杯戦おうと思っていますので、今後ともよろしく願いいたします」

「え、ああ、うん、こちらこそよろしく願います」

つられて、クマも頭を下げた。

……なんだろう、こいつの独特の空気は。なんだか思いつきり流されているような気がする。フカフカの絨毯を見つめつつ、クマはそう思った。

顔を上げると、同じく顔を上げたマリアと目が合った。憎しみもない、怒りもない、殺意もない、ただただ優しい光が、そこにあった。

気づいたとき、クマは口を開いていた。

「一つ……質問をしていいか？」

答えは優しい笑みだった。

「私に答えられるものであるならば、構いません」

ならば、尋ねよう。

「……私を、恨んではいないのか？」

「いません」

キツパリ、マリアは返事をした。

そう、マリアはクマのことを恨んではない。初めて出会ったときは、気が動転していたので手荒な行為をしてしまったが、今はなにも思っていない。それどころか、マリアはクマに対して感謝すらしていた。

「恨んでなど、いません。それどころか、私はクマさんにお礼を言いたいくらいです」

なぜなら、クマはチャンスを与えてくれたのだ。レゴンに立ち向かうためのチャンスを、抗うための力を授けてくれたのだ。結果、人間ではなくなってしまったけれども、それでもマリアは感謝していた。

「……人間でなくなってもか？」

「人間でなくなっても……です」

「……もう、戻れないぞ」

「分かっています」

「いつか、お前が大切に思っている人達から銃を向けられる日が来るということもか？」

「それも、分かっています」

そつと、マリアは自身の胸に手を当てた。

いつか、自分が人間の手によって殺される日が来るかもしれない。想像すると、とても胸が苦しく、締め付けられるような痛みを覚える。でも、大丈夫。

だって、私には仲間がいるもの。

「全部、分かっています」

弱弱しくも、力強い。アンバランスな力強さを宿した瞳が、クマを見据えた。クマは、もうこれ以上この話をするのは彼女を侮辱しているような気がして、口を閉じた。

「……そうか。変なことを聞いて、悪かった……それと、最後に一つだけいいか？」

「なんですか？」

正座を止めて、ベッドの上で足をくずすマリア。

「……後悔は、しているか？」

何が、とはあえて言わなかった。

「……」

今度はマリアも、すぐには返事をしなかった。マリアは首を傾げて、沈黙を続ける。時間にして数秒後、もしかしたら数分かもしれない。重苦しい沈黙の後、マリアはわずかに唇を振るわせた後、口を開いた。

「後悔はしています」

「……」

「後悔は、しています。ですが……」

そこでまた、沈黙が訪れる。だが、今度はすぐに破られた。

「今を、後悔してはおりません」

力強い視線が、クマを貫く。

「……そうか……分かった。質問ばかりで失礼だった。もう話すことはないから、私はもう行く」

その言葉に、視線の迫力が和らいだ。

「ご苦労様です……あ、そういえば、里里さんにはもう話を済ませたのですか？」

「いや、この後話しに行く予定だが……一応、最初に会いに行ったが、後にくれと言われて……先にお前達にしたのだ」

「では、里里さん、具合は大丈夫でしたか？ もう、お怪我は治っていましたか？」

心配そうに、マリアはため息をこぼした。それとは別に、クマの方は、はて、と首を傾げた。

「あいつ、怪我をしたのか？」

「え、知りませんでしたか？」

クマの一言に、マリアは心底驚いた。相手が相手だから、この地球上に起きたことなら何でも知っているように思っていたからだ。前に言っていた、たいてい、も謙遜していると思っていたのだ。

それが顔に出ていたのだろう。クマは両手を振って、慌てて弁明した。

「言つとくが、私にも分からないことはいっぱいあるぞ」

「そうなんですか……」

「レゴンみたいに、私の中で暴れていたりすると分かるのだが……すまない、情報を把握していなかった」

クマは頭を下げて謝罪した。ペコリ、擬音にするならば、こんな効果音が付きそうな可愛らしい姿だった。

一瞬、マリアはそんなクマの姿を見て可愛いと思い、誘惑に負けて抱きしめてしまいそうになったが、我慢した。犬、猫、ネズミ、鳥、小動物ならたいてい可愛いと思えるマリアにとって、目の前で頭を下げるクマの人形は余裕で愛らしかった。

反射的に伸ばしてしまった両手を、パタパタと左右に振りつつ、マリアもクマに頭を下げた。

「いえ、わたくしこそ、不躰な言い方をしてしまい、申し訳ありませんでした」

「いやいや、本来把握しておかなければならないことをしておかなかった私が悪い。すまなかった」

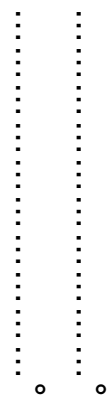
「いえいえ、クマさんにだって出来ること出来ないことがありますよね。わたくし、そんなことも分からずにあんなことを……」

「いやいや、マリアは当然のことを言っただけで、もっともな話だ」

「いえいえ、クマさんは今まで頑張ってきたじゃないですか。それで限界が来てしまい、私達に頼ってしまったのでしょうか？ ですから、クマさんには何の落ち度もありません」

「いやいや、そもそも頼ってしまったことが不甲斐ないのだ。私がつもつとしっかりしていれば、こんな事態には……」

「いえいえ、たまには人間にも頑張ってもらうことも……」



戦いの後で：里里編2

クマが里里の部屋を訪れたのは、里里の部屋を離れてから2時間が過ぎた後だった。思っていた以上に長引いてしまったことが、原因であった。

時間に遅れてしまったことに多少の申し訳なさを感じながらも、とりあえずクマは里里の部屋に入った。入る方法はドアからではなく、いつものときと同じように、空間と空間を飛び越えるワープを使った方法で。利点としては、場所がどれだけ密閉された密室空間でも自由に行き来できるということと、人形が動いている姿を誰かに見られることがないということ。欠点としては、空間と空間を飛び越える際、時間の流れに沿うように移動するので、少し時間を飛び越えてしまうということと、飛び越えた先の様子が分からないということ。もっとも、分からないのはドアから入っても同じだが。

「邪魔する……里里？」

部屋に誰も居なかった。二時間前まで里里が向かっていた机には、参考書もノートも載っておらず、代わりにパソコン本体とキーボードと置かれていた。

部屋を見回して見るが、どこにも居ない。天井を見上げる。紐でスイッチをオン・オフさせる昔ながらの電灯があるだけ。もちろん、ベッドの上に掛けられている布団は膨らんでいない。

はて……どこに行った？

「里里……里里……どこだ？」

机の下を覗く……居ない。

「もしか……ここか？」

ベッドの下も覗こうと、床に手を……つこうとした。が、出来なかった。なぜなら、床に指が触れる寸前、何かに頭を捕まれて身体を持ち上げられてしまったから。

「お、おお？」

手足をバタバタ、身体をジタバタ。精一杯身をよじるが、何かの力はかなり強く、クマは空中で不思議な踊りを披露することしかできなかった。

「だ、誰だ、私を持ち上げるのは」

『あ、ごめん、やっぱ驚く?』

耳に届いた声は、聞き覚えのある少女の声だった。というより、目的の少女の声だ。クマはハッと我に返り、身体のを抜いた。そのままグルリと視界が変わり、ベッドに向けられる。

途端、クマの目の前で、ベッドが歪んだ。頭の上から細く前方に空間が歪み、それが前方で人型に広がる。歪みから様々な色が発光し、一瞬七色に光ると、透明から半透明に、半透明から現実の姿…

…里里が、現れた。

そこで初めて、頭を掴まれて宙ぶらりんになっていることに気づいた。

ボサボサになっていた里里の頭は綺麗に現れて色艶を取り戻し、ブラッシングされていた。こけていた頬は元のふっくらしたものになり、充血していた瞳も白く綺麗になっていた。着ている衣服がパジャマになっていることと、うつすら頬に赤みが差しているところから、お風呂に入ったあとだということがうかがい知れた。

……あれ?

わずかな違和感に、クマは首を傾げた。

けれども、それを形にする前に、ゆっくりと里里の横に下ろされた。

「クマさんが遅かったから、先にお風呂済ませちゃった。もしかして、待たせちゃった?」

「待っていない……私も今来たところだ。ところで、今のはなんだ?」

「ん、今のつて、姿を消していたこと??」

「そうだ」

「うーん、そうだね……なって言ったらいいか……」

頭を抱える里里を見て、クマの疑問はますます膨れ上がっていく。だがクマには、それがなんなのか分からなかった。なぜ違和感を覚えていいのか分からなかった。

なんだ、この違和感は。

疑問を解消するため、里里の横顔をジッと見つめるが、不自然な点は見当たらない……ように思えた。

そう思われているとは知る由もない里里は、にこやかに笑うとはいい、と片手を高く上げた。

「それじゃあ、姿を消していた理由を説明したいと思います」

「うむ」

「一言で説明するならば、練習と実験です」

「……練習と実験？」

「うん、練習と実験」

見て。里里が右腕を指差す。すると、パチッと一瞬、何かが破裂したような音が聞こえてすぐ、里里の右腕がパジャマごと風景に溶けて同化し始めた。ものの二秒程度で肘から先が見えなくなった。

驚きに目を見開いているクマを尻目に、里里は肘から先の部分を、クマへ差し出した。

「ほら、触ってみて……ちゃんとパジャマの感触と腕の感触があるでしょ」

言われるがまま、手を伸ばす。おそろおそろ伸ばした指先に、しっかりと布地の感触が伝わってきた。確かに、そこにある。

「……驚いたな……姿を消すことができるのか」

「そうだよ、よく分からないけど、多分光学迷彩つてやつかな……ところで、クマさん驚きすぎじゃない？ この力を授けたのはクマさんだよ」

確かにそうだ。里里にアンドロイドの力を受け継がせたのは、他ならぬクマだ。

「確かに私だが……実際に肌身で体感するのは始めてなのだ。なんと説明すればいいやら……そうだな、今までテレビの向こうにあっ

たものが、実際に見て、触れて、感じる事が出来た…… というような感覚が、近いかもしれない」

「ああ、なるほどね、合点がいった」

うん、うん、と頷く里里。クマの言うとおり、実際に見て、触れて、感じることで得られる現実のものと、知識として得られるものとは、まるで実感が違う。

いくら知識として知っていたとしても、それはあくまで知識ではない。その知識を肉付けして現実感を持たせるには、実際に触れて、感じることにしか方法はない。クマにとって、自身が保有する膨大な知識の中で始めて、実際に見て、触れて、感じる事ができたのは、これが始めてだった。

「ま、これをベッドに寝転びながら練習していました」

ぐにやりと消えた部分が歪む。点滅するように腕が現れたり消えたりした後、元のパジャマに包まれた腕がそこにあった。

「んで、どれくらい姿を消していられるのかな、っていう実験もしていたわけです。ところでさ、クマさんが家に来た理由ってなに？」

少し感動していたクマは呆然と、里里の質問を聞き流していた。

里里は首を傾げ、もう一度声をかけた。

「クマさん？」

「……ん、あ、ああ、なんだ？」

ぷくつ、と里里の頬が膨らんだ。

「もう……クマさん、なにか用があつて来たんじゃないの？」

「あ、ああ、そうだった」

「クマさん！」

「すまない……ちょっとお前達に……里里に頼みたいことがあるのだ」

「ん、なに？」

ブラブラと足をバタつかせる里里を見て、彼女なら、どんな返事を返すだろうか？

里里の視線と、クマの視線が交錯する。

「実はな……これからも、里里にはレゴン達と戦ってほしい。それを頼みに来たのが、里里を訪ねた理由だ。どうだ、受けてくれるか？」

「うん、いいよ」

明るく了承される。返事は、二人と同じだった。もしかしたら、思っていたので、クマはなぜかとは訪ねない。だから代わりに……。

「後悔は、していないか？」

そう、尋ねた。

そして、返ってきたのは年相応の、可愛い笑顔。

「とっても後悔しているよ」

彼女も、後悔していた。なのに、笑っている。なぜ笑えるのか、クマには理解できない。

「でもね、後悔はしていないよ」

その後に続く言葉は矛盾。これも、クマには理解できなかった。

「……お前達は、三人とも同じことを私に言う。後悔しているのに、後悔していない。私には、それが分からない。よければ、理由を聞かせてくれないか？」

「理由？ うわ、二人とも同じこと言ったのか」

「教えてほしい。なぜだ？」

クマの質問に、里里は目を白黒させた。

「なぜ……って、私に聞かれても困る」

「お前なりの意見でもいいから、教えてほしい」

そうだね。里里は再び頭を抱えた。

クマには、理解できなかった。自身に恨みをぶつけるわけでもなく、自暴自棄になるわけでもない。戦う道しか残っていないのは確かだが、なぜ、迷いなく戦う道を選ぶのかが分からなかった。

ふと、里里が顔を上げた。何度かクマから視線を逸らした後、力強い眼差しでクマを見据えた。

「私には難しいことは分からないけど……弓ちゃんもマリアさんも、

私みたいに人間を辞めたことを、人間を捨てたことを、後悔しているんじゃないかな」

「人間を……か？ それは、私が無理やりしたことで、お前達のせいでは……」

「それはそうだけど、人間としてのプライドってやつなのかな。豚が豚であるように、鳥が鳥であるように、やっぱり人間は人間でしかないって私は思うの。多分、私も含めてだけど、その人間としてのプライドが無くなったことを、後悔しているんだと思う」

どれだけ望んでも、どれだけ願っても、それは変わらない。鳥は鳥でしかなく、植物は植物でしかなく、人間は人間でしかない。

鳥が魚になりたいと思う。魚が動物になりたいと思う。植物が虫になりたいと思う。人間が他の生物になりたいと思う。そう思うのは誰にだってあるし、不思議なことではない。けれども、今の自分を全て捨ててなりたいと思うことは、決してないだろうとも思う。

魚の記憶を持った鳥。動物の記憶を持った植物。人間の記憶を持った化け物も同じで、決して馴染むことはない。鳥は鳥として生まれる。魚は魚として生まれる。人間は人間として生まれる。それを、摂理と人は言うのだ。

「私達が始めから人狼として、吸血鬼として、アンドロイドとして生まれていたなら、多分後悔は全くしていなかっただろうね」

「……では、その後の後悔していない理由は？」

それは簡単だよ。里里はニッコリ微笑んだ。

「人間じゃなくなったことを後悔しているけど、戦う道を選択したのは後悔していないってことだと思うよ。だから、後悔しているけど後悔していないし、今を後悔していない。多分、弓ちゃんもリアさんも同じ気持ちだと思う」

そう、里里も、弓も、マリアも、後悔はしていない。人間ではなくなったことを後悔しているだけで、抗う道を、戦う道を選んだことは、全く後悔していないのだ。

そうか、それでお前達が……。

「選ばれたのか……」

「なにが？」

年頃の無邪気な瞳がクマへ向けられる。瞬間、クマは自分が感じていた違和感を理解した。そうなる、それを尋ねないわけにはいかない。

「いや……なんでもない……もう時間がないので、私は戻る。すまない、こんな夜遅くに」

「あはは、気にしなくていいよ。けっこう夜更かしには慣れているしね……朝は弱いけど」

「……ところで、さっき私が来たとき、お前、目が充血していたり、頬がこけていたりしていたが、どうして今は治っているんだ？」

そう、それが違和感の正体。

「え、治っていたらおかしい？」

自身の目を指で擦りつつ、里里は首を傾げた。

「いや、おかしくはないが……いくらなんでも、治るのが早すぎる。それも、何か能力が作用しているのか？」

「うん、そうだよ。体内のナノマシン……要は擬似血液内にある極小サイズのメカね。それを使って、見た目を変化させていたの。見て」

クマの顔に目を近づける。白目には全く充血の痕跡も見られない。「ちよっと操作すると……」

あっという間に、里里の白目の部分は真っ赤に染まり、充血した瞳に変わった。

クマはその変化を驚きの眼差しで見つめた。

「ほう……なるほど」

「頬がこけたのも、これと似たような方法を使ったわけ……分かった？」

「ああ、分かった。教えてくれてありがとう……それでは、また」「うん、じゃあね」

ふわりと、クマの身体が宙に浮く。ポン、と両手を合わせると、

クマの身体が空気に溶けるように消えていった。

その様子をジッと見届けた里里は、大きく欠伸をした後、部屋の照明を消して、ベッドに潜り込んだ。

出会いは何時だって突然に

ああ、面倒くさい。

校長先生による学生生活についての諸注意が始まってから20分が過ぎた。今日は始業式だけで、授業はない。なので、これさえ終われば帰れる。そう、これさえ終われば。

何回同じ話すれば気が済むのやら、ギネスに申請してみようかな。お尻から響いてくる、痺れるような鈍痛に頬を引きつらせつつ、里里はそんなことを思った。

体育館に集められ、中の綿が死んでいるとしか思えないパイプ椅子に座って早2時間。そろそろ、座っていることが苦痛に感じてきた。

「校長が飼っているインコの話なんてどうでもいいから早く終わらせてよ……」

お尻痛いんだから。里里は回りに気づかれないようにしつつ、愚痴をこぼした。

里里が通っている学校は、どこにでもある公立の学校だ。大して特色があるわけでもなく、これといって目立つところもない、日本中を探せばいっぱい見つかりそうな学校だ。

ただ唯一、他校と違うところがあるとしたら、それは校長の無駄話が異様に長いということくらいだろう。

交通安全、高校生としての自覚、将来を見据えた進路の選択、それらは分かる。だが、今朝食べた目玉焼きの黄身が二つだったことなど、どうでもいいのだ。

チラリと、左右に視線を向ける。両隣の女子は、座っていること自体は平気なのか、眠そうに船を漕いでいた。

よく他の人達はお尻の痛みに我慢できるわね。あ、でもこれは私だけなのかな。

時々開かれる全校集会のたび、里里はいつもそう思った。

そして、校長先生の話が終わったのはそれから20分が過ぎた後だった。

運が悪いとしか思えない。始業式当日、担任の先生に捕まりゴミ捨てを頼まれてしまったのだから。

「疲れた、お尻痛い、もう帰る」

意外と重量のあるゴミ箱を焼却場に持っていき、中のゴミを憂さ晴らしの意味も込めて焼却炉の中にぶち込む。その帰り道、里里は誰に言うでもなく、愚痴をこぼしていた。

「ゴミが臭う、お腹すいた」

トボトボと職員室にゴミ箱を戻しに向かう。まだまだ残暑が残り、蒸し暑い温風が頬をくすぐっていく。暦の上では季節は秋だが、まだ夏と違っていい暑さだった。

だが、里里には関係ない。自動的に外と中の温度が調節されているため、全く暑さを感じないのだ。太陽光が当たって暖かいとは感じるものの、それだけ。

そして、現代科学からは到底成しえることができない、高度な技術で構成された里里の身体の中に搭載された機能の一つが、いくつかの熱源を捉えた。

「ん……なに？」

目をパチクリさせつつ、熱源の先……左前方にある、人目のつかない校舎裏の方に視線を向けた。合わせて、視界の丸い照準がそこへ向けられる。目を凝らすと四角い照準が校舎裏に続く道を視界に拡大表示させた。

次いで耳を済ませると、耳の奥でノイズ音が鳴った。

「うお、びっくりした！」

思わず耳に手を当てる。ノイズ音がしばらく続いた後、途切れ途切れではあるが、何かの音が聞こえてきた。

『……おま……やる……』

『……人……こない……』

『さいき……よく……』

どれくらいの数なのかは分からないが、どうやら男女2人以上であることは分かった。どうやら、これは校舎裏の音を拾っているらしい。ゆっくり状況を理解していくと同時に、里里の頭は別のことでいっぱいになった。

人気のない校舎裏。始業式も終わり、先生も見回りには来ない。そして、そこには二人以上の人。

「……やる……人……こない……もしや!？」

瞬間、里里の頭に考えてはいけない妄想が広がった。

男と女が裸になってするアレ、中には服を着たままなのもあるが、そんなアレ。

ああ、インモラル。

ああ、アブノーマル。

もしやもしや、これは男と女の、いわゆる密事、秘め事なのではない?!

その考えが頭に浮かんで膨らむ。そんなわけがない、どうせ不良同士の喧嘩だろうと思いつつ、もしかしたら、という妄想も膨れ上がる。

……ぐ、偶然だよ、偶然。たまたま盗聴みたいな機能が働いて、たまたま覗いてしまった……ってこともあるよね。

無理がありすぎる言い訳を呟きつつ、里里の身体が空気に溶け込むように消えていく。わざわざ光学迷彩まで使い、足音を立てないように忍び足で校舎裏に向かった。

校舎の影に隠れつつ校舎裏を覗く。そこには、里里の妄想していたイチゴミルクのように甘く、コーヒーのようにほろ苦い大人の世界は広がっていなかった。

もっと殺伐とした世界が広がっていた。

『……喧嘩かな?』

人数は思っていた以上に多く、五人居た。

怖そうなスキンヘッドの男、悪そうな男、後姿のために顔が分からない女性が二人。共に別の学校の学生服を着ているところから、二人は学生だろう。女性の内、一人は背の高い女子に怒声を浴びせていた。その女子は、里里が着ているのと同じ学生服を着ていた。

この距離なら拡大表示する必要はない。怒声を浴びせられている女子の顔を見る……。

弓ちゃん!?

寸でのとこで叫びそうになった口元を手で押さえる。そして、喉まで上ってきた言葉がゆっくり胃の辺りまで落ちた後、手を離れた。

次第に里里の頭に理解の色が深まってくると共に、目の前で広がる状況が気になってくる。もう、妄想はない。

『弓ちゃん……どうしたんだろ……喧嘩かな? 相手四人も居るけど、大丈夫かな?』

いざとなったら加勢しよう。そう思い、いつでも飛び出せるように身構えた……途端、里里の耳に聞き覚えのある声が届いた。

「どうしましょう……弓さんが喧嘩しています」

……ん? あれ? この鈴を転がしたみたいに綺麗で軽やかな声は……。

振り返ると、目の前が制服でいっぱいだった。顔を上げてみて、初めて目の前の人物が誰か分かった。

「どうしましょう、先生を呼びに行かないと……でも、戻ってくるまでに弓さんの身に何かあったら……」

マリアさん!?

またもや飛び出しそうになった言葉を吞み込む。自分の姿を消しているの、迂闊に声を出していたら、面倒な事態になっていただろう。いや、既に面倒な事態になっているかもしれない。

そう思ってしまうくらい、マリアの様子はおかしかった。同じと

ころをグルグルと周り、どうしよう、どうしよう、と頭を抱えている様は、少し可哀相に思えてしまう。

着ている制服は里里と弓のものと同じだった。マリアも同じ学校の生徒だったのだ。

そういえば、同学年にとっても美人な女子が居るって聞いていたけど、あれってマリアさんのことなのか……世間って狭いなあ……とりあえず、マリアさんを落ち着かせるのが先かな。

そうつと、そうつと、驚かせないように、マリアの制服をつまむ。同時に、光学迷彩を解除して、知覚できるようにしていく。

「どうしましょう、どうし、え、はい、なんででしょう?」

くるりとこちらに振り返ったマリアと、里里の視線が交錯する。

マリアの目が大きく見開かれるのと同時に、里里は手を伸ばしてマリアの口を塞いだ。

「——っ!？」

「静かに」

自身の唇に指を当てて静かにするようにジェスチャーすると、マリアは、はつきりと頷いた。ゆっくり、手を離す。それから、声を潜めた。

「……びっくりしました」

「こっちもね」

頬に手を当ててはにかむマリアを見て、里里もつられてはにかんだ。

「まさか、三人とも同じ学校に通っているなんてね……漫画みたいだね」

「ふふふ、そうかもしれませんね……で、そうではなくて、弓さんが大変なんです」

途端、マリアは心配に瞳を潤ませた。

「分かっているって……いざとなったら加勢するから、それまでは成り行きを見守っておこうよ。私もそうだけど、なんで弓ちゃんが喧嘩しているか、理由も知らないでしょ?」

「それは……そうですけど……」

「だったら、黙って見ているだけ。ほら、リラックス、リラックス」
両手の指をバラバラに動かす様子を見せる。途端、マリアの様子は激変し、涙を湛えていた瞳は羞恥に染まり、恥ずかしそうに自身の胸を両手で隠した。

「わ、わたくしの胸は玩具じゃありませんよ」

ニヤニヤ、里里の目が弧を描いて細まった。猫のようになった口元を隠そうともしない。

「あれあれ、マリアさん。私、一言もそのおっきなお胸を玩具にするなんて言っていないよ」

「え……あ、ああ！」

変化がはつきり分かるくらい、マリアの頬が赤くなった。

「私だったらくすぐられると思うのに、マリアさんはエッチな女の子ですね」

「ち、違、だって、里里さん、前に……」

「いくら私でも2度もやったりしないよ。そうか、胸をガードするのか」

「だ、だって……」

「ぬっふっふ、マリアさんはお胸をモミモミされると思ったのだね。私には想像もつかないくらいのアダルティな対応だね」

「……………あうう」

どんどん赤くなっていくマリア。同性から見ても、その姿はとても可愛らしかった。

やりすぎたかな？

「あははは、ごめん。意地悪しすぎたよね、からかってごめんね」

「…もう、本当に恥ずかしいんですからね」

「ごめんよ……さあ、弓ちゃんを見守ろうよ」

「……もう……はい、見守りましょう」

里里はしゃがんで、マリアはその里里の肩に手を置いて、2人は息を潜めて、そっと様子を伺った。

「……マリアさん、やっぱりでかいね
そう言ったら、無言で頬を抓られた。」

出会いは何時だって突然に：2

弓は欠伸をかみ殺しながら、目の前で顔を赤くしている少女を見下ろした。

金髪パーマに、剃り落とされて近くで確認しないと見えなくなつた眉に、だらしなく着こなした制服。少し、品性が悪そうな少女だった。

「なに余裕しちゃってんだ、この野郎！」

私は野郎じゃないんだけどな。

そう思ったが、口には出さなかった。出したら出したでどうなるかは目に見えていたからだ。

ごく自然を装って周りを見回す。体格のよい男が一人と、その男の傍で腕を組んでいる黒髪の少女が一人、平均的な体格の男が一人、目の前でわめいている茶髪の少女が一人、計四人。

体格のよい男は剃っているのか、綺麗なスキンヘッドが目眩しい。その男の傍に居る少女は、見た目は可愛らしいながらも、ここに居るということは、そういうことなのだろう。平均的な男は、クラスに一人は居る、見た目が怖いというやつだ。あまり、強そうには見えない。

全員の顔を確認してから、弓はリーダー格がスキンヘッドの男であると結論付けた。位置関係もそうだが、なにより一番余裕を保っていたからだ。

ということはスキンヘッドの男さえ倒してしまえば、後に残つたやつらは逃げ出すだろう。今まで幾度となく因縁を付けられてきた経験が教えてくれた。

いつものように、無駄とは思いつつも、弓は理由を問いただした。「それで、私がここに呼び出された理由は？」

「てめー、最近ちよつと調子のとてるんじゃないの!？」

身長の関係から、下から見上げる形で睨まれる。なんというか、

駄々をこねている子供を相手にしているような気分だ。

「お前がいつたいたいという理由で私が調子にのっていると思ったのかは分らないが、結局、私を呼び出した理由はなんだ？」

「おちよくってんじゃねーよ！」

目の前でわめいていた少女が突然、弓の腹部に拳を叩き込んできた。突然の衝撃に身体が若干よろける。

けれども痛くはなかった。

これには人狼の力が関係している。元々女性としては頑丈な性質ではある弓だが、人狼の力を受け継いでからは、その性質がさらに強くなっているのだ。人間だった頃ならともかく、今の弓には、ろくに鍛えていない者の拳などよける必要はないのだ。

今や弓の肉体は脆弱な人間の肉体ではない。茶髪の少女は殴った拳を開き、苦痛に呻いた。

「いつ……つづ……かた、硬い……」

「それが私を呼び出した理由か？」

「て、てめえ！」

さらに一発、こんどは顎に拳が直撃する。だが、結果は同じで、痛みはない。ただ、衝撃でグルリと視界が変わるのは慣れそうになかった。

「い、いった……」

「それで、用がないなら私は帰るぞ」

全く、余計な手間を取らせやがって……こっちは腹が減っているんだ。

両手の痛みに呻いている茶髪の少女を尻目に、横を通り過ぎる。

途端、死角から飛び出した何かが頬に直撃した。また、グルリと視界が回る。思わず足がもつれ、校舎の壁に寄りかかってしまう。

軽く頭を振って、意識を覚醒させる。見ると、平均的な男が舌打ちして右手をプラプラと振っていた。

「いつて、お前マジで女か？」

カチン、と頭の中で怒りが生まれた。

確かに、弓は自分でも気にしているくらいの長身で、女っぽさの欠片もないと思っている。異性に媚を売ることも、愛想笑いもできない無愛想な女であることも分かっている。

だが、それでも、言っではならないことがある。それだけは口にしてはならない言葉がある。弓だって、立派な女性なのだ。スタイルだけなら、そこの女性に引けを取らない自信はあるのだ。

それを、今、目の前の男は言っではいけないことを、触れてはならないことを口にしてしまった。

「……さっきから人の顔を殴っているが、私に何か恨みでもあるのか？」

しかし、弓は耐えた。相手から悪意に満ちた言葉を投げつけられても、我慢した。ともすれば握り締めてしまいそうな拳を必死にだめた。

「気に入らないんだよ、お前」

答えたのは、黒髪の少女だった。少女の横に立っていた体格のよい男も、加勢するように一歩、弓に歩み寄った。

「俺は特に何とも思っていないが……まあ、たまにはお前みたいな気の強い女を無理やりするのも、悪くはないしな」

一瞬、弓は体格のよい男が何を話したのか分からなかった。

「へへへ、ま、そういうことさ」

平均的な男が、ポケットから折りたたみナイフを取り出した。慣れた手つきで刃を取り出し、日の光を浴びた刃が鈍く光っていた。

「……そういうこと。一匹狼だか知らないけど、生意気だからやっちやっていいよ」

黒髪の少女は弓から一歩離れると、体格のよい男の後ろに隠れた。

「ねえ、さっさとしてよ」

「ちよっと待っている」

茶髪の少女が平均的な男を急かす。男はこれから行くことに全く罪悪感を覚えていないのか、ニヤニヤ気持ち悪い笑みを浮かべていた。

……そう……か。

全身の産毛が総毛立つ程の怒りと憎悪が、弓の心に燃え広がっていく。

……そうか、そういうことか。

かみ締めた唇から血がにじんでくる。いつのまにか握り締めていた拳からは、数滴、血が滴って地面に吸い込まれていく。

「……お前ら……今まで私以外にも同じことをやってきたのか？」

「はあ、そんなこと聞いてどうするんだ？」

平均的な男が不思議そうに首を傾げる。

「……答える」

「……口の利き方がなっていないが、まあいいか。多分、五人目じゃねえの？ 覚えてないけどな」

そうか、五人か。

膨れ上がった怒りと憎悪が胸の中を渦巻く。その五人のことを思うと、胸が張り裂けそうなくらいの悲しみと切なさを覚えた。

そして、どうしようもないくらいの殺意が、弓の思考を黒く塗りつぶしていく。

「そうか、だったら我慢する必要はないな」

「んん、おとなしくやられる気になったか？」

「……おとなしく？ 私が？ 違うね……それはお前達だ」

ニヤニヤと気持ち悪い笑みを浮かべる四人を、弓は怒りを込めて睨んだ。

「……おとなしく病院でお休みする覚悟は決まったか？」

弓のまとう空気が変わった。弓が抑えていた人狼の絶対的な覇気が、凄まじい圧力となって四人を威圧した。人間の姿のままなのに、もう、そこに居るのは人間ではない。

その迫力は凄まじかった。事実、四人よりも離れていた里里とマリアが思わず力を解放してしまいそうになったくらいだ。

背筋にビリビリと走る怖気に、我知らず拳を握り締めていた里里は、唇を引きつらせた。

「……マリアちゃん、いざというときが来たかもしれない」

肩に鋭い痛みが走る。見ると、マリアも同じ気持ちなのか、表情が凍り付いていた。その足元の影が、不規則に形を変えてざわめく。「ええ……どうしましょうか？」

「そうだね……とりあえず、姿を消してロケットパンチでも打ち込んでみる」

「でしたら、援護いたします」

「うん、お願い……行くよ！」

「はい！」

意識を集中する。里里の体内に内蔵する機能が動き出し、体表が受ける光の屈折率を変化させる。パチッと乾いた音と共に、空気に溶けるように里里の姿は消えた。

里里が行っている光学迷彩と呼ばれるそれは、現代の技術でもある程度は同じことができるのだが、大きく違う点がいくつかある。

一つは、現代の光学迷彩は、光の屈折率を変化させて光を後方に受け流すことで、人の目には映らないようにしているという違い。古代技術で行われる光学迷彩は、光を後方受け流すだけではなく、重力と熱源と各種光線も受け流し、なおかつ着ている衣服すらも透過しているという違いだ。

光学迷彩で姿を消している際、里里の体内では微弱ながら半重力装置が作動していて、これによって足音などによる活動音を消しているのだ。また、体表のいたるところに内蔵された各種のセンサーが気温と湿度を測定し、即座に周囲の気温と体温を同調されるので、熱源探知機によって見つかることもない。光学迷彩自体完璧な性能を持ち、赤外線はいうに及ばず、視認できない紫外線レベルの不可視線すら受け流しているため、カメラ等の現代機器にも映ることはない。

今、里里は完全に姿を消したのである。

目の前で一人の人間が完全に消えてしまったのを見たマリアは、驚きに目を見開いた。

「さっきもこれで姿を消していたのですね……里里さん、援護します」

マリアの影が一際強く蠢くと、凄まじいスピードで蛇のようにうねりながら弓へと向かっていく。

『私も、行くよ』

カチン、と金属的な音と共に、四本の噴射口が右腕から飛び出す。噴射口の先端から青白い光が少し漏れ始めていく。

『外れたら終わりだね』

確実に当てるために、里里は弓の元へ走った。

最終話：友達

夢だ、夢だ、覚めろ、覚めろ、夢だ、嘘だ、夢だ、覚めろ、嘘だ、
嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ夢だ夢だ夢だ夢夢夢夢嘘嘘嘘！。

仲間の三人が失禁しながら氣絶したのを横目に、体格の良い男は現実を受け入れることができなかった。そのせいで、氣絶すること
ができなかった。力にはそれなりの自信があつたことが、この男の不幸でもあつた。

氣絶していない男を狙うのは、ある意味必然だった。

「さて……他のやつらは気絶したから、まずはお前からだ」

弓が一步、腰を抜かして座り込む男に近づく。男はまるで、銃口の束をこちらに向けられたかのような錯覚を覚えた。

全身が壊れた玩具のように痙攣し、乾いた地面に大量のアンモニア水を排泄していく。口の中でカチカチと鳴り続ける歯の鈍い痛みだけが、生きているという実感を与えていた。

弓が一步、また男の下へ歩み寄る。

「はははは」

男の口から、言葉にならない悲鳴がこぼれる。男は完全に威圧されていた。自分と同じくらいの身長ではあるものの、自分よりもふた周り以上も華奢な女の子に、だ。

また一歩、また一歩、また一歩、弓と男の間が縮まる。そのたび、男は氣絶できない自分を呪った。涙でかすむ弓の姿を見て、いつそ自身の両目を潰したくなった。

ゆらりと、弓の右腕が高々と上げられる。

男にはそれが、巨大な刃に見えた。自分の命を刈り取る、死に神の刃に。

弓と男の間が数メートルまで狭まると、弓の歩みが少し遅くなる。体勢を低くし、腕を水平にする。

次の瞬間、弓の身体は弾丸のように飛んだ。

「——っ！！？？」

同時に、男は体中から体液を垂れ流しながら、やっと気絶した。
「うらあ！」

凄まじいスピードで男の顔面に迫る拳。ありったけの怒りを込めた弾丸が、男の顔面を捉えた……はずだった。

地面を這う影が弓の手足に巻きつき、弓の突進を止めなければ。

「——っ！？ な、なに！？」

突然速度を0にされる。慣性の法則に従って加速していた弓の身体は、無理やり押さえられたことで痛みという悲鳴を上げる。

だが、その痛みが、弓の理性を寸でのところで引き上げる。手足に巻きついた影を見やる程度には、冷静さが戻った。

「か、影！？ っていうことは」

男から視線を外し、顔を上げる。地面に伸びた影の行き着く先に視線をやると、すまなそうに微笑むマリアが居た。

マリア！？ なぜここに！？

けれども、そこまでしか考えられなかった。

トン、と腹部に何かが当たる感触を覚え、視線を下ろす。

そこには、光学迷彩を解除し、にじみ出るように姿を現した里里が居た。握り締めた右腕の拳を弓の腹部に当て、四本の噴射口から漏れてくる駆動音が、弓の耳に届いた。

嫌な想像が、弓の脳裏を駆け巡った。

「お、おい、里里？ 何をしようとしている？」

「頭に血が上った狼さんに、ショック療法を、とね」

「ま、待て！ もう落ち着いたか」

「発射」

音もなく、里里の右腕が発射された。

蝉時雨が五月蠅い午後の通学路。里里、弓、マリアの三人は、並んで帰路についていた。

腹部を辛そうに摩っていた弓は唇を尖らせていた。

「いつつ……おい里里、もうちょっと手加減してくれてもよかったじゃないか」

「あれでも十分手加減しているよ……それに、弱かったらショック療法にならないじゃん」

「……まあ、そうだけども。それだったら、わざわざロケットパンチ使わなくても、マリアの影で動きを止めるだけでよかったんじゃないか？」

「いや、弓ちゃんのあのときの様子だと、いったんは治まっても、私達が見てないところでビンタとかしそうだから」

「いくらなんでも、倒れているやつ相手にはしない」

「仮に気絶から目を覚めましたら？」

「もちろん殴る……って、おい、マリア」

ニツコリ微笑んで2人の口喧嘩を見守っていたマリアの横槍に、口を滑らした弓がさらに唇を尖らせる。ジト目で睨まれているマリアはそんな視線に気づいていないかのように、穏やかに微笑んだ。

「弓さんの気持ちも分かりますが、里里さんの判断は正しかったと思いますよ」

「……まあ、あれで冷静になれたけどさ……痛かったんだぜ、あれ」
「もう、ごめんよ」

「ええい、引っ付くな、暑苦しい」

謝罪の意味も込めて弓に抱きつく里里。だが、すぐに振り払われた。

ところで……、マリアの言葉に、二人はマリアへと視線を向けた。
「あの四人は、あのままでよろしかったのですか？ 警察に事情を説明して然るべき処置をしてもらった方がよろしかったのでは？」

「ああ、それ無理かも」

「多分、無理だろ」

無理、無理、と片手を振って否定する里里とマリアに、マリアは首を傾げた。

「どうしてですか、本人達がそう言っていましたし、警察に調べてもらえば……」

「でもね……証拠がないんだよね」

「あいつらが、しらばっくれたら、もう手の出しようがないしな……」

「そんな……」

マリアは悲しそうに肩を落とした。

マリアにとつて、あの四人が犯していた悪事自体、今でも本当なのか信じられないのだ。そういうことは、全部テレビの向こうで起こることで、自分の身の回りでは絶対に起きないと思っていたのだ。それが今日、彼女の考えが否定された。それも、よりもよって同じ学校に所属する生徒で、襲われかけた相手が知り合いであったのだ。ある意味、マリアは弓以上に強いショックを感じていた。

そんなマリアを慰めるように、里里はマリアの肩を叩いた。

「そのかわり、ちゃんと釘を差しておいたでしょ。紙にでつかく『同じ事を他の人にやったら許さん』って書いて全員の顔に貼り付けておいたじゃん。あれだけ怖がつていたんだから、もう大丈夫だと思っよう……そういうえばマリアさん、ついでにあいつらの血を吸えばよかったのに」

「え？」

途端、マリアは目を白黒させた。里里の純粋な視線から目を逸らす、弓と目が合ってしまった、また視線を逸らした。

「前、クマさんが遅れてきたときに話してくれたけど……マリアさん、血を吸わないと駄目なんでしょ？ あの人達凄く血気盛んそうだから、一口分くらいは吸っておいたらよかったんじゃない？」

「……それは……その……」

「やっぱり、抵抗はあるのか？」

弓も、心配そうにマリアを見つめる。

「ちよっとくらいなら私も弓ちゃんもあげるよ、ねえ、弓ちゃん」

「そうだな……少しくらいなら平気だ」

ほら、と里里と弓は制服の肩口を掴んで引つ張る。そこから、年頃の少女らしい瑞々しい首筋がマリアの目に飛び込んできた。

ゴクリと、マリアは自分の喉が鳴ったのを聞いた。

「だ、大丈夫です。それに、実はさっき、ちよっとだけ血をいただきましたから」

「え、そうなの？」

驚きに目を見開く里里。弓は首を傾げた。

「影の先端を注射みたいにして……気づかれない程度に、ちよっとだけいただいたんです。おかげで、少し楽になりました」

良かった。里里は胸を撫で下ろした。けれどもすぐに、でも、と言葉を濁した。

「血が吸えなくて困ったときはいつでも呼んでね。ちよっとくらいなら血を分けてあげられる……あ、けど、私の血液って飲んで大丈夫なんだろうかな、弓ちゃん」

「知らん」

知らないって、もつと考えてよ。知らないものは知らん。意地悪く。いっぱい便利な機能があるんだから、それで調べる。やいのやいの、言い合う二人。

そんな二人を見ているだけで、マリアは十分だった。

「そのお気持ちだけで十分です」

ありがとう、里里と弓に礼を言つと、里里と弓は照れくさそうに頬を赤らめた。

「それでもあいつらが同じ事を繰り返したら、容赦しないけどな」
言い合いが終わり、しばらく無言の時間が流れたとき、弓がポツ

リと言った言葉に、二人の視線が、弓に向けられた。チラリと、弓は二人を見下ろす。里里はばつが悪いのか、そつぱを向いた。

「……分かってるよ。そのときは、もう止めない」

弓の視線がマリアに向けられる。マリアはチラチラと落ち着きなく視線をやった後、顔を上げた。

「……短い付き合いですが、弓さんに譲れない何かがあることは察しています。わたくしには、止める理由が見当たりません……ですが、これだけはお約束ください」

「約束？」

弓は首を傾げた。

はい、とマリアは頷く。

「もし、もし仮に弓さんが人間を……あなたが譲ることの出来ない理由で手に掛けてしまったとき……そのときは、そうする前にわたくしに声をおかけください。わたくし達は、お友達なんですから」

ピクリと、弓の眉が動く。同時に里里も振り返る。

「知っていて知らない振りはいたくありません。そんな卑怯な真似したくありません」

スツと、マリアは右手を上げて小指を立てた。いわゆる指きりだ。沈黙を持つて、その手をジツと見下ろす。すると、弓の視界にも一つ、マリアよりも小さな手が横から現れた。その手も小指が立てられていた。誰のかは考えるまでもない。

「……里里……」

「友達だから」

唇を尖らせ、傍目にも機嫌が良さそうには見えない。けれども、しっかりと立てられた小指と、赤く染まった頬を見ると、それだけではなさそうだ。

「……友達？」

ニツコリ、マリアは見ているこちらまで嬉しくなってしまうくらい、輝かしい笑みを浮かべた。

「もう、里里さん。さっきはあんなに私をからかっていたのに……」

なんでこんなときに恥ずかしがるんですか？」

里里は答えなかった。ただ、黙って小指を差し出した。

弓は、どうしてか泣きたくなった。自分でもなぜ泣きたいと思ったのかは分からないが、気を緩めると涙がこぼれてしまいそうだ。

両手を上げて小指を立てる。右手の小指をマリアに、左手の小指を里里の小指に絡めた。

「……2人とも……ありがとう……」

2人は答えなかった。何も聞こえなかったかのように、ゆびきりげんまん、と、お馴染みのフレーズを口ずさんだ。

最終話：友達（後書き）

これにて『Monster War』を終了させていただきます。
ファンタジーというより、現代ファンタジーという方がしっくりくるような気がします

（ファンタジーしかないので、ファンタジーにしました）

この話は、これにて完結です。また、新しい三人の話が浮かんだら、続きを書くつもりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6638g/>

Monster_War

2011年3月6日16時40分発行